

平成26年度指定



スーパーグローバルハイスクール (SGH) 研究開発実施報告書 第5年次



平成31年 3 月 京都府立嵯峨野高等学校

は じ め に

スーパーグローバルハイスクール（SGH）の研究指定を受け最終年度（５年目）となりました。この５年間、地域連携と海外の高等学校・大学等とのコラボを基盤とし、カリキュラムを新たに開発した「グローバルインタラクション」「ロジカルサイエンス」「アカデミッククラブ」「課題錬成」等による京都グローバルスタディーズを通して、グローバルリーダー育成に取り組んで参りました。指定初年度には産みの苦しみともいうべき校内の状況も見受けられましたが、何回も話し合いを重ねる中で、新しい人材を育成するという理念を共有し、教職員が一致して一つの方向に向かうことができました。実践後は互いに評価しながら、一つ一つの取組みを発展させ、定着を図ることが出来ました。特に「アカデミッククラブ」においては持続的社会の構築というSDGsの理念を生徒全員が理解し、自ら設定した課題を探究し、３年生では全員がそれらを英語で発表するという取組みを通して、海外にもその成果を発信することが出来ました。今まで皆無であった海外大学への進学も少しではありますが兆しが出て参りました。海外の高等学校や大学との信頼関係も築かれ充実発展し、今やそれは十数校に及ぶようになりました。また、平素の授業においても、教科の枠を超えて協同し教科横断の取組みにも挑戦できました。さらに、多くの教員が個々の授業改善に取り組み、徐々にその成果が現れてきているところです。

この５年間、国際情勢はもちろん日本社会も大きく変化しました。日本社会のグローバル化は急速なスピードで進んでいますし、諸外国においては新しいタイプの指導者が誕生し、経済や外交、安全保障など、国際情勢に様々な変化が起き、世界は益々混沌としてきました。サイエンス、テクノロジーの進化で、人間がプログラムをしなくても人工知能が自ら学習するディープラーニングの技術はめざましい発展を遂げており、私たちの生活の変容はもとより、既存の職業の消滅など社会構造そのものの变化も始まろうとしています。世界の大学のグローバル化もさらに加速し、次年には世界の大学生数は２億９千万人になり１０年前の１億７０００万人から１億人以上増加しようとしています。このように激変する国際社会において、真のグローバル化を推進していこうとするなら、今まで以上に日本の伝統的精神によるものの見方や考え方にしっかりと立脚していく必要があります。嵯峨野高校は京都の織物業を営んでいた矢代仁兵衛氏の篤志によって創立されたもので、公立高校ではありますが、「和敬静寂」という禅の心を建学の精神として持っています。本校の伝統である禅の考え方を大切に、伝統的な日本文化を基盤にして、本校がSGHで取り組んできたグローバルリーダーの育成という明確な教育の目的に基づき、主体的・対話的で深い学びの教育活動を今後も展開して参ります。本校はSGHで得た財産を継承し発展させ、これからも様々な取組みを通じて、世界で活躍できる人材育成に取り組んで参ります。

最後になりましたが、この５年間、本校のSGHに多大なる御協力をいただきました京都大学、大阪大学、京都教育大学、京都府立大学をはじめとする様々な大学、研究機関、企業、NPOや地域の皆様方に感謝申し上げますとともに、文部科学省の皆様方の御支援に心より御礼申し上げます。結びに本研究報告書の編纂に尽力した関係教職員の労を労い、発刊の御挨拶とさせていただきます。

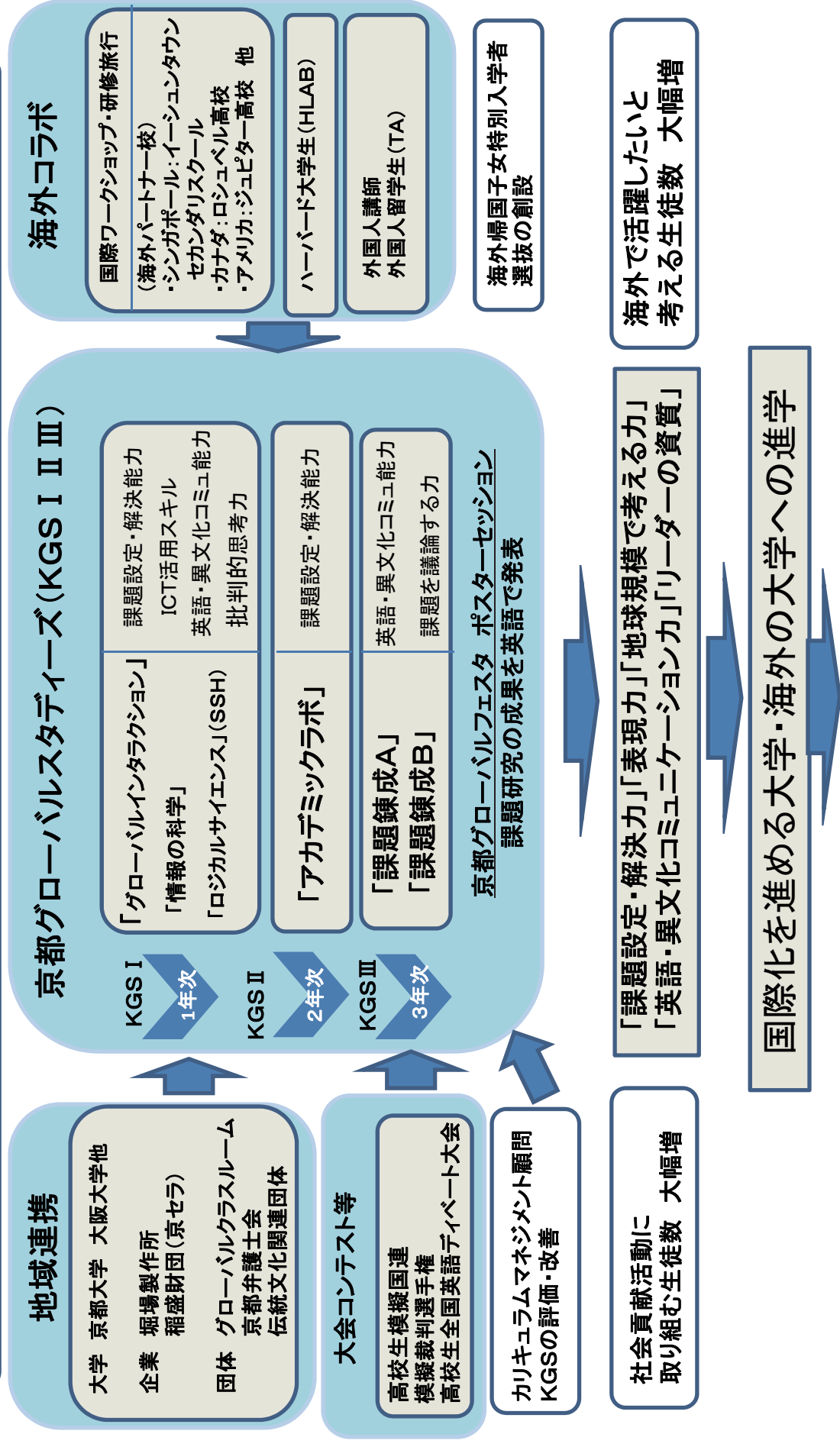
平成31年3月

京都府立嵯峨野高等学校
校長 小川 雅 史

目 次

概念図	1
平成30年度スーパーグローバルハイスクール研究開発完了報告書	2
特集ページ 5年間のSGHの歩みと成果	20
具体的な活動内容	
(1) 研究開発単位「京都グローバルスタディーズⅠⅡⅢ」	
ア グローバルインタラクション (学校設定科目・英語・2単位)	27
イ 情報の科学 (情報・2単位)	35
ウ アカデミックラボ (総合的な学習の時間・2単位)	39
エ 課題錬成A・B (学校設定科目・英語・2単位)	49
(2) 課題設定・解決力や国際的教養を身に付けたグローバルリーダーの育成を図る指導方法の研究	
ア 海外パートナー校との課題研究① 校内	56
海外パートナー校との課題研究② 海外 シンガポール研修(学校交流)	58
Ⅰ アメリカ・フロリダ研修	60
Ⅱ カナダ・ケベック研修	64
イ 海外トップ大学の学生とのワークショップ(課題研究)について	65
ウ ユネスコスクールとしての交流	69
(3) 地域の教育資源を活用した人材育成及び高大接続	
ア グローバルインタラクション等におけるTAの活用	70
イ グローバルレクチャーシリーズ	71
ウ グローバルフィールドワーク	
1 社会科学FW	72
2 人文科学FW	73
3 英語集中合宿	74
エ イングリッシュカフェ	75
(4) グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程外の実施内容	
日本人としてのアイデンティティの確立を促すための取組	
狂言ワークショップ	76
(5) 大会コンテスト	
ア 模擬国連について	77
イ 模擬裁判について	78
ウ パーラメンタリーディベートについて	79
(6) 校内体制・評価計画について	80
(7) その他	
ア 短期・中期留学について	81
イ 海外大学進学・留学セミナーについて	82
(資料)	
運営指導委員会について	83
アンケートについて	88
新聞掲載記事	92

地域連携・海外コラボ型「京都グローバルスタディーズ」によるリーダー育成



研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 京都市下京区中堂寺命婦町1-10
 京都産業大学むすびわざ館内(3・4階)
 管理機関名 京都府教育委員会
 代表者名 教育長 橋本 幸三 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 京都府立嵯峨野高等学校
 学校長名 小川 雅史

3 研究開発名

地域連携・海外コラボ型「京都グローバルスタディーズ」によるリーダー育成

4 研究開発概要

地域連携・海外コラボ型「京都グローバルスタディーズ(以下、KGS)ⅠⅡⅢ(3学年)」で扱う内容は、1年次のKGSⅠでは、基礎的な探究活動を行い、「課題設定・解決能力」「英語・異文化コミュニケーション能力」の基礎を築き、2年次のKGSⅡでは、「環境」と「地域」を2本の柱として「人文科学・社会科学・自然科学」分野において、アカデミックラボで課題研究を行い、探究する力、表現する力、課題設定・解決能力、地球規模で考える力を高めるものとした。3年次KGSⅢでは、本校主催で英語による課題研究発表会「SAGANO GLOBAL PRESENTATION」(府内高校・全国グローバルハイスクール(以下、SGH)指定校・海外のパートナー校が対象)を実施し、研究課題を英語で発表し、質疑応答をすることで、課題研究を深める機会とした。その間、京都大学、大阪大学をはじめとする関係機関との連携や海外交流校との国際ワークショップを有機的に図り、研究開発を推進した。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程(月)											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
スーパーサイエンスネットワーク京都事業 ・サイエンスフェスタ			■					■				→
グローバルネットワーク京都事業 ・HLABコラボレーションプログラム					■							→
府立高校生 グローバルチャレンジ事業 ・説明会・オリエンテーション ・エディンバラ語学研修 ・オーストラリア語学研修 ・短期留学チャレンジ			■	■	→	→	→					
府立高校海外サテライト校事業 ・オーストラリア留学 ・アメリカ留学					→	→	→	→	→	→	→	→
SGH推進委員会 運営指導委員会	→	→	→	→	→	■	→	→	→	→	■	→

(2) 実績の説明

スーパーサイエンスネットワーク京都事業は、独創的な科学研究により世界をリードできる人材の育成を目指し、平成25年度から京都府教育委員会が独自に実施している事業である。府立高校47校のうち9校が指定され、嵯峨野高校は、その幹事校として事業の牽引役を担っている。指定校生徒が課題研究の成果を発表し合う合同研究発表会「京都サイエンスフェスタ」（参加者延べ1,500名規模、年2回開催）において、嵯峨野高校は、幹事校としてその成果を積極的に他の指定校に広めている。嵯峨野高校からは合計258名（1年生170名、2年生82名、3年生6名）が参加した。

また、京都府教育委員会はグローバル人材育成を目指したグローバルネットワーク京都事業も実施しており、府立高校を9校指定している。嵯峨野高校は、H L A B コラボレーションプログラムへの参加をグローバルネットワーク京都校に呼びかけ他校の生徒にもS G Hの成果を波及させている。

また、京都府が実施している府立高校生グローバルチャレンジ事業において、嵯峨野高校からはエディンバラ語学研修に1年生1名及び2年生6名、オーストラリア語学研修に1年生11名及び2年生2名、短期留学チャレンジに2年生1名を派遣した。エディンバラ語学研修では、夏季休業期間に、主にエディンバラ・カレッジ（サイトヒルズキャンパス）を研修場所とし週20時間の英語レッスンを実施した。

オーストラリア語学研修では、夏季休業期間に、アデレード郊外の公立の中等教育学校で8回の英語レッスンと受け入れ校生徒たちとの交流会を実施した。短期留学チャレンジは、留学先を生徒自らが探し出し、海外留学にチャレンジすることを支援するものであり、嵯峨野高校からは夏季休業期間にフィリピンに生徒を派遣した。

さらに府立高校海外サテライト校事業では嵯峨野高校から2年生1名をアメリカ合衆国に、2年生4名と1年生3名をオーストラリアに派遣した。これは4ヶ月程度の中期留学を行うものであり、8月から12月下旬または1月下旬から4月上旬にかけて現地の公立の中等教育学校で現地の生徒と同じ授業を受けた。

これらの海外での語学研修において、より高い語学力・コミュニケーション能力を身に付けさせるとともに、国際感覚を育み、異文化理解を体感させることで、グローバル人材の育成を支援した。

研究計画の作成や教育課程の編成においては、指導主事等が指導・助言を行い、S G H事業の有効な運用に向け支援を行ってきた。

また、運営指導委員会において、学識経験者の委員からの指導とともに、教育委員会からも、研究開発の取組内容に関する指導・助言を行った。

なお、年間を通してS G Hの対象となった生徒数は計722名（1年生240名、2年生243名、3年生239名）である。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①K G S I II III 「情報の科学」 「グローバルインタラクション」 「ロジカルサイエンス」 「アカデミックラボ」 「課題錬成A・B」												
②国際ワークショップ	→		→				→	→				
③海外トップ大学の学生とのワークショップ				→	→							
④グローバルフィールドワーク				→	→							
⑤アカデミックラボ課題研究発表会									→	→		
⑥SAGANO GLOBAL PRESENTATION 成果発表会	→	→										
⑦評価 ・S G H推進委員会 ・運営指導委員会												

(2) 実績の説明

(A) 研究開発単位「K G S I II III」

ア 学校設定科目「グローバルインタラクション」

対象 1年生普通科・京都こすもす科（共修） 239人

① 日々の授業で、生徒の英語によるコミュニケーション活動を最大限持つように授業展開している。

All English の授業とPerformance Task、京都の大学に学ぶ外国人留学生をTeaching Assistant（以下、T A）として活用し、授業内でのコミュニケーション活動の機会と時間をできるだけ多く取り、英語でのプレゼンテーション（スライド・ポスター）やディスカッションに必要な論理的コミュニケ

ーション能力を高めることを目指した。

Performance taskを通して、英語の4技能のうち、特に「英語を聞く力」について87%の生徒が、「非常に高まった」「ある程度高まった」という肯定的な回答をしており、「英語を話す力」「英語を書く力」についても、それぞれ87%、76%の高い割合の生徒が肯定的な回答をしている。これらの成果の普及を図るため、グローバルインタラクシオンの教材を英語で本校ホームページに掲載した。

研究指定後も該当教材を改善し、日英両言語で公開し英語の4技能育成に貢献していく予定である。

② 国際ワークショップ

5月31日(木)・6月1日(金)	シンガポール共和国	ハイシンカトリックスクール生と授業交流等
6月8日(金)～18日(月)	アメリカ合衆国	ジュピターハイスクール生と授業交流等
10月16日(火)	大韓民国	韓一高校生と授業交流
11月12日(月)	シンガポール共和国	イーシュンタウンセカンダリースクール生と授業交流
11月13日(火)	シンガポール共和国	ナンチアウハイスクール生と授業交流
11月21日(水)～23日(金)	シンガポール共和国	アングロチャイニーズスクール生と授業交流

イ 情報の科学

対象 1年生全クラス 319人

① 4月～11月

ICT関連の技術・手法を学び、今後の課題探究学習に必要な文書作成、データ処理の方法や資料作成の方法(パワーポイント等)を学んだ。また、自分が読んだ本の内容を紹介する文書を作成し、ビブリオバトルを行った。

② 12月～3月

課題探究基礎を12月から開始。この課題研究の最終目標は、SDGs(持続可能な開発目標)の17の目標の内、いずれか1つについてグループで問題を発見し、課題を設定して、仮説を立てることである。

まず、SDGsの17の目標のうち、関心をもった事柄について調べたことをまとめ、自分の考えを記述させることによって、生徒に課題意識を持たせた(夏季休業中の課題)。2学期後半からはグループ活動を実施し、グループでまとめた内容について、クラス内で発表会を実施。年度末には、「情報の科学」合同発表会を実施して各クラスの代表1グループが発表を行った。ここで学んだ「課題探究基礎」の手法を2年次のアカデミックラボにつなげる。

ウ アカデミックラボについて

対象 2年生普通科・京都こすもす科(共修) 243人

① 平成30年度アカデミックラボ

4～12月 課題探究学習(中間発表会は各ラボで)

1～2月 ポスター発表準備

2～3月 校内発表会、外部での発表会等へ

来年度6月 課題研究発表会-SAGANO GLOBAL PRESENTATION-で研究内容を英語で口頭発表

② 課題探究学習を始めるにあたって

京都大学博物館 塩瀬隆之准教授による講演会(4月23日(月))を実施。各ラボで課題探究学習を始めるにあたって、「課題探究学習にかかる講演会」として講演をいただいた。生徒にも教員にも指針となる講演であった。

③ アカデミックラボについて

平成30年度開講アカデミックラボ教科別担当講座

国語科担当ラボ(3講座)、数学科担当ラボ(2講座)、地歴公民科担当ラボ(3講座(うち1講座は英語科と共催))、理科担当ラボ(3講座)、英語科担当ラボ(3講座(うち1講座は地歴公民科と共催))、家庭科担当ラボ(1講座)、芸術科担当ラボ(2講座)、保健体育科担当ラボ(1講座)

アカデミックラボでは、生徒全員が各ラボ(研究グループ)に所属して、課題研究に取り組んだ。各ラボでは、テーマ決定や中間発表の際にチームでディスカッションすることを大切にしている。

<主な連携先>

京都大学、大阪大学、京都教育大学、立命館大学、関西大学、京都市立芸術大学、京都嵯峨芸術大学、京都学園大学、京都弁護士会法教育委員会、日本政策金融公庫、嵐山保勝会等

④ アカデミックラボ課題研究発表会

平成31年2月8日(金)に本校で実施した。京都こすもす科共修コース及び普通科生徒243名が、59グループに分かれてポスター発表した。ポスター発表については、1回あたり説明6分・質疑応答5分の11分で構成し、計6回実施した。第1学年生徒(240名)と高校・大学関係者18名、及び保護者32名が見学した。

⑤ 校内での協議・共有・深化に向けて(平成25年度～平成30年度までの流れ)

<平成25年度9月～3月>アカデミックラボのフレームの検討

- アカデミックラボの内容を検討するため、ワーキングチームを立ち上げた。メンバーについては、校内で参加を募り、10回の会議を開催した。

- 平成26年度入学生からの新教育システム（京都こすもす科・普通科）の導入にあたって、全校で課題探究学習に取り組むこととし、京都こすもす科自然科学系統専修コースは「スーパーサイエンスラボ」、京都こすもす科共修コース及び普通科は「アカデミックラボ」とし、全校生徒が課題探究学習に取り組むこととした。
- アカデミックラボについては、生徒は「人文科学、社会科学、国際関係、自然科学」の4つの領域の中から興味関心に応じてラボを選択することを確認した。

＜平成26年度＞アカデミックラボの体制・内容の検討

- アカデミックラボの内容の検討にあつては、教科主任会を中心に行い、各教科で検討を重ね、16ラボを開講することとした。国語科、地歴公民科、数学科、理科、芸術科、家庭科、英語科の教員が担当することとした。また、アカデミックラボの内容の共有のため、教員研修会で確認をした。
- 9月には、生徒への説明をし、生徒の希望に従って各ラボのメンバーを決定した。

＜平成27年度4月～平成28年度3月＞アカデミックラボの実施・共有化・深化

- ラボの運営を校内全体で進めることができるように、ラボ担当者会議、教科主任会や職員会議で内容の検討及び周知を図ってきた。平成27年度、ラボ担当者会議は8回、教科主任会では6回、平成28年度、ラボ担当者会議は10回実施し、情報を共有して内容や研究の進め方、評価等について話し合いを重ねた。2月の課題研究発表会には、2年担任団も評価に加わった。
- 平成28年度からラボに保健体育科も参加することとなり、全教科でラボを担当することとなった。
- 平成27年度から28年度の間、評価方法について研究・協議をし、作成したルーブリック評価方法をアカデミックラボで講評者が使用した。課題研究のルーブリック評価を各ラボ担当者が試行し、その内容を担当者会議で共有した。平成28年度には、全ラボ共通の評価の軸の作成を試行し、課題研究の進捗状況をチェックするシートを使用して生徒へのフィードバックを行った。
- 平成28年2月 アカデミックラボ課題研究発表会（第1回）を実施
- 平成28年3月 総括会議を実施、職員会議で共有した。
- 平成28年6月 「英語による課題研究発表会-SAGANO GLOBAL PRESENTATION-」開催
- 平成29年2月 アカデミックラボ課題研究発表会（第2回）を実施
- 平成29年3月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、当該年度の課題研究やその評価について総括し、職員会議で共有した。

＜平成29年度4月～平成30年度3月＞アカデミックラボの充実と成果の検証・波及

- 平成29年4月 当該年度の活動を始めるにあたり、アカデミックラボ担当者会議を実施して、活動の概要、これまでの流れ、成果と課題などについて共通理解を図った。
- 4月のラボ開講時に京都大学総合博物館 准教授 塩瀬 隆之氏講演会（平成29年4月25日（火））を実施。生徒及びラボ担当者以外にも多くの教職員が参加。
- 平成29年5月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、「英語による課題研究発表会-SAGANO GLOBAL PRESENTATION-」に向けた打合せと、今年度のラボ活動の具体的な進め方等について確認を行った。
- 平成29年6月 「英語による課題研究発表会-SAGANO GLOBAL PRESENTATION-」第2回開催
- 平成29年7月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、1学期の評価に関する確認と活動のまとめを行った。
- 平成30年2月 アカデミックラボ課題研究発表会（第3回）を開催
京都大学大学院教育学研究科 楠見 孝教授、西岡 加名恵教授と今後の活動・評価の深化について協議
- 平成30年3月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、課題研究やその評価について総括し、職員会議で共有した。
- 平成30年4月 当該年度の活動を始めるにあたり、アカデミックラボ担当者会議を実施して、活動の概要、これまでの流れ、成果と課題などについて共通理解を図った。
- 4月のラボ開講時に京都大学総合博物館 准教授 塩瀬 隆之氏講演会（平成30年4月23日（月））を実施。生徒及びラボ担当者以外にも多くの教職員が参加。
- 平成30年6月 「英語による課題研究発表会-SAGANO GLOBAL PRESENTATION-」（第3回）開催
- 平成30年7月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、1学期の評価に関する確認と活動のまとめを行った。
- 平成31年2月 アカデミックラボ課題研究発表会（第4回）を開催
- 平成31年3月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、SGHの取組を行った5年間の評価について総括した。

⑥ 成果と課題

<成果>

- 1 生徒独自の視点での課題研究、真剣な取組姿勢⇒「総合的な探究の時間」への移行
- 2 S G H対象3年生全員(約240名)の英語発表⇒英語による発表・提言活動のカリキュラム化
- 3 課題研究の指導体制の確立⇒課題研究の指導法の改善・開発
- 4 下級生への波及効果と刺激⇒嵯峨野の新しい伝統
- 5 生徒・教員の変容や教育効果を調査⇒卒業生対象アンケート等(S G H対象第1・2期生)
- 6 海外交流校との関係の深まり⇒国際化の促進
- 7 生徒の海外交流経験の促進と留学者数の増加⇒国際化の促進

<課題>

- 1 課題研究の内容の深み
- 2 英語での質疑応答力
- 3 生徒・教員の変容や教育効果を可視化⇒卒業生へのアンケート調査
- 4 課題研究及びS G Hの取組の評価
- 5 課題研究以外の教育活動への波及・他校への普及
- 6 S G Hの取組と大学進学との関連
- 7 ポストS G Hについての対処

- 1 「課題探究の進め方」については、各ラボとも大学・企業・地域との連携がさらに深まり、今までの経験(探究の進め方・発表会に向けての準備・I C T機器の使用等)を活かして探究活動が積極的に進められるようになってきている。また、「生徒・教員の変容の可視化」については、従来のアンケート(嵯峨野高校作成・京都大学作成)結果の分析に加えて、ビデオ等を活用した全生徒の発表の記録を通してその変容の可視化を図っている。京都大学の楠見 孝教授の分析においても、探究活動には一定の成果が見られている。
- 2 評価方法についても、5年間の研究を通して一定の成果を得た。研究指定後も評価方法について改善を進め、広く普及を図る。
- 3 「S G H事業」における「学び」の「波及」や「普及」については、成果発表会や国際ワークショップの実施を通して成果を上げてきた。研究指定後もK G S I I Iで行ってきた学びを、学校全体の教育活動とさらに有機的に繋げていき本校独自の教育活動として定着させるとともに、近隣の小・中学校等にも成果を伝えていく。

(B) 課題設定・解決力や国際的教養を身に付けたグローバルリーダーの育成を図る指導方法の研究 ア 国際ワークショップ

海外の同世代の高校生徒との交流を通して、多様な考え方に触れ、地球規模の視野で考える力をつけるため、国際ワークショップを行った。「持続可能な社会の形成、環境、地域の諸課題」について取り組み、国際チームで同一課題に向けて取り組むことで、国際舞台で通用する異文化コミュニケーション力やリーダーシップをとる力を生徒が身につけることを目的とした。

課題研究に取り組み、国際チームで言語の壁や異文化の壁を越える体験とするため、海外のパートナー校へ訪問を行い、持続可能な社会の形成、環境や地域の諸課題についてフィールドワーク(以下、F W)、ディスカッション、グループワークを行った。

海外研修参加者は、始業式等で全校生徒への報告を行い、学校祭においても、本校生、外国人留学生や教育関係者を対象に、英語でポスター発表と質疑応答を行った。

「手作りの相互交流」「同世代の若者との交流」「ミニ課題研究の成果発表」「報告会の実施」「I C Tの積極的活用」を重視しており、「持続可能な社会形成(E S Dの理念)」と「未来デザインの提案」といったテーマ設定が特徴となっている。

① 校内

- | | | | |
|-----|------------------|-----------|--------------------------|
| I | 5月31日(木)・6月1日(金) | シンガポール共和国 | ハイシンカトリックスクール生と授業交流等 |
| II | 6月8日(金)～18日(月) | アメリカ合衆国 | ジュピターハイスクール生と授業交流等 |
| III | 10月16日(火) | 大韓民国 | 韓一高校生と授業交流 |
| IV | 11月12日(月) | シンガポール共和国 | イーシュンタウンセカンダリースクール生と授業交流 |
| V | 11月13日(火) | シンガポール共和国 | ナンチアウハイスクール生と授業交流 |
| VI | 11月21日(水)～23日(金) | シンガポール共和国 | アングロチャイニーズスクール生と授業交流 |

② 海外

<趣 旨>

グローバル社会の将来のリーダーとして活躍するために必要なコミュニケーションへの積極性、英語・異文化コミュニケーション力及び課題設定・解決能力を養うことを目的とする。

I アメリカ・フロリダ研修

<日 時>平成31年1月4日(金)～1月14日(月)

＜参加者＞嵯峨野高校生 6 名

＜場 所＞

アメリカ合衆国フロリダ州内の各地：ジュピター市文化環境関連施設、ジュピター高校、フロリダアトランティック大学、エバーグレイズ国立公園、モリカミュージアム他

＜内 容＞

ジュピター市における歴史・文化・環境 F W、ジュピター高校における授業参加・プレゼンテーション発表、エバーグレイズ国立公園での合同 F W、モリカミュージアムでのプレゼンテーション発表、歴史・文化 F Wを行った。

Ⅱ カナダ・ケベック研修（昨年度実績）

＜日 時＞平成30年 3 月 18 日（日）～ 3 月 26 日（月）

＜参加者＞嵯峨野高校生 4 名

＜場 所＞カナダ・ケベック州

＜内 容＞

ロシュベル高校（IBスクール）コレージュ・ド・コンパグノンでの合同授業と生徒交流、環境（森林等）関連施設で環境（モデルフォレスト運動、エネルギー他）研修（ラバール大学）、モントリオール市役所、在モントリオール日本国総領事館等の日本及びカナダ政府関係機関表敬訪問

Ⅲ S G H 海外研修の事後報告等について

・始業式後、全校生徒にケベック研修報告（平成30年 4 月 9 日（月））

・中期留学（アメリカ、オーストラリア）をしていた 3 名の生徒が全校生徒を前に報告（平成31年 1 月 7 日（月））

イ 海外トップ大学の学生とのワークショップ（課題研究）について

HLAB サマースクールと嵯峨野高校とのコラボ・ワークショップ

グローバルリーダーの資質を育むため、嵯峨野高校生をはじめとする京都府立高校生が、ハーバード大学をはじめとする海外トップ大学の学生や日本の大学で学ぶ日英バイリンガルの学生と共に、祇園・四条河原町・嵐山などの地域の美しい自然や環境、歴史・伝統・文化について F W 等を通して探究した。加えて、国際チームを編成して京都の持続可能な発展に関する共通の課題についてディスカッションや発表を行うなどの海外での大学の学びを通して、課題研究の手法を学んだ。海外大学の学生と交流することで、国際的なキャリアへ進む方法などを知り、グローバルな社会で活躍するための資質を育むこととした。

＜日 時＞平成30年 8 月 25 日（土）・26 日（日）

＜参加者＞嵯峨野高校生 15 名、グローバルネットワーク京都校の生徒 6 名 HLAB 関係者 7 名

＜内 容＞事前 F W、ディスカッション、日本文化体験、F W、プレゼンテーション

※グローバルネットワーク京都校：山城高校・鳥羽高校・洛西高校・東宇治高校・

菟道高校・城南菱創高校・西城陽高校・園部高校・峰山高校（内 4 校が参加）

＜テーマ＞『外国人のための京都観光の質を高める方策』

（各グループは、異なる F W 先へ行った高校生（5 名）と海外大学生（1 名）と日本人バイリンガル学生（1 名）で編成）

ウ 京都ユネスコスクールのネットワークの取組

京都のユネスコスクール 7 校（嵯峨野高校、京田辺シュタイナー校、一燈園高校、平安女学院、京都外大西高校、紫野高校、西乙訓高校）のネットワーク「ユネスコASPnet 京都」を創設。本年度は第 3 回目となるユネスコスクール交流会を開催。「日本の生活・文化で未来に伝えたいもの」をテーマに、講演、ワークショップ、ポスター発表等を行い、E S D に関する各校の取組を共有して生徒の学びを深める一日となった。

＜日 時＞平成30年 10 月 28 日（日）9:30-17:00

＜場 所＞上賀茂神社（世界遺産）

＜参加者＞ユネスコASPnet 京都校生徒（約 50 名）

※本校からはグローバル環境ラボ 2 チームの生徒 6 名が参加

＜内 容＞

・上賀茂神社内 F W 及び上賀茂神社 乾 光孝氏による講演

・ディスカッション（テーマ「日本の生活・文化で未来に伝えたいもの」）

・ポスターセッション（各校の持続可能な発展に関する教育の取組の交流）等

（C）地域の教育資源を活用した人材育成及び高大接続

ア グローバルインタラクションにおける T A の活用

① 「グローバルインタラクション」における T A の活用

4 月から、外国人留学生（立命館大学）を T A として、「グローバルインタラクション」及び「アカデミックラボ」の授業に活用。今年度登録者は、9 ヶ国から 16 名であった。

② 「グローバルフィールドワーク」

I 社会科学 F W（7 月 31 日（火））を実施

京都地方裁判所大法廷を見学するとともに公判を傍聴した。また、京都弁護士会館にて模擬裁判の実践を行い、裁判員裁判を体験するとともに、「刑事裁判の原則」というテーマの講義を受講した。さら

に数人ずつのグループに分かれて法律事務所を訪問し、弁護士の職務等について聴き取り調査を行った。

Ⅱ 人文科学FW（7月31日（火））を実施

仁和寺の歴史等について講話を聞き、「聞香体験」では香道や香木の歴史を学ぶとともに、香りの違いを聞き比べ、香木の香りを深く味わった。「茶席体験」では茶道の歴史や礼儀の意味等を教わった後、茶席体験を行って茶の湯の世界を体感した。「狂言ワークショップ」では専門家の指導の下、実際に狂言の動きを再現し、鑑賞だけでは得られない狂言の世界を経験した。また「仁和寺FW」では仁和寺内の建物を調査し、歴史的建造物に隠された意味について考えた。さらに「伝統文化ワークショップ」を行い、次年度のアカデミックラボに繋がる取組となった。

Ⅲ 英語集中合宿（7月30日（月）・31日（火））を実施

2日間、オールイングリッシュで実施。インタースクールの講師による本格的な通訳の講習のほか、本校教諭や外国語指導助手（以下、ALT）による工夫を凝らしたワークショップやスキットコンテストを行った。

③ 「イングリッシュカフェ」

＜趣 旨＞

本校のTAとのディスカッションをすることで、視野を広げ、その経験を将来のグローバル人材育成への一助とすることを目的とした。英語でのディスカッションを楽しむとともに、TAから出身国の課題等についてパワーポイントを使用してのプレゼンテーションがあり、その後、参加者が質疑応答を英語で行った。今年度はそれに加えて、SGH事業による海外研修だけではなく、広く海外交流体験を生徒が語る場とし、多くの生徒が発表に参加し、さらに有意義な機会とすることができた。

＜日 時＞9月6日（木）文化祭2日目

＜参加者＞本校生徒138名、ALT2名、TA（外国人留学生）4名、保護者

（D）グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程外の取組

ア 海外勤務者帰国子女対象の特別入学者選抜について

平成27年度入試から、本校京都こすもす科において、海外勤務者帰国子女入学者選抜を導入している。異なる価値観を持つ生徒同士が互いに切磋琢磨する環境を整備したいと考える。平成31年度入学者選抜における出願資格は以下のとおりで、この選抜により3名が合格している。

＜募集定員＞ 京都こすもす科5名以内

＜出願資格＞ 公立高校の出願資格に該当する者であって、

Ⅰ 海外勤務者（日本国籍を有する者で、海外に所在する機関、事務所等の勤務又は海外において研究・研修を行うことを目的として日本国を出国し、海外に在留していたもの又は現在なお在留しているもの）の子女であること。

Ⅱ 外国において引き続き1年以上在留していたこと。

Ⅲ 平成28年2月1日以降に帰国したこと。

イ 日本人としてのアイデンティティの確立を促すための取組

海外のパートナー校とのワークショップにおける日本文化についての説明や実際に日本文化にふれる機会を設定した。人文社会FWにおいて、茂山狂言会による狂言ワークショップを実施。また、実際の舞台上で、狂言に挑戦した。

7 目標の進捗状況、成果・評価

（1）アカデミックラボについて

生徒アンケートにおいて、2年生はアカデミックラボで、「自分達で主体的に考え、課題を設定し、研究できた」には平成30年度94.1%（平成29年度95.7%、平成28年度91.3%、平成27年度91.2%）、「課題研究を通して、考える力が身についた」には平成30年度97.3%（平成29年度96.2%、平成28年度93.3%、平成27年度93.5%）、「チームでの協同作業」は平成30年度97.3%（平成29年度98.8%、平成28年度95.88%、平成27年度94.1%）の肯定的な回答があり、それぞれ昨年度に引き続き、高い割合を維持、あるいは上昇する傾向が見られた。特に、「課題研究を通して、考える力が身についた」では、過去最高の97.3%の肯定的な回答が得られたのが成果である。また、年を重ねるにつれて上昇してきた「質問にきちんと答えることができた」の項目では、平成30年度83.5%（平成29年度80.5%、平成28年度80.4%、平成27年度69.0%）の肯定的な回答があり、指導する際の課題として挙げてきた「質疑応答力」についても、完成年度の今年度、過去最高の83.5%の肯定的な回答を得た。質疑応答での達成感は生徒の課題研究の取組と研究内容の深化の影響も受けていると考えられるので、この5年間の取組において、大きな成果を上げたと言える。「研究内容に満足」も平成30年度87.7%（平成29年度84.6%、平成28年度80.3%、平成27年度77.4%）、「全体として、達成感・満足感」は平成30年度93.6%（平成29年度90.6%、平成28年度86.6%、平成27年度83.3%）であり、それぞれ昨年度と比べて3.1ポイント、3.0ポイント上昇した。また、発表会に参加した1年生については、「発表会を有意義だと感じ、参加して良かったと感じる」において、肯定的な回答が平成30年度97.8%（平成29年度98.8%、平成28年度97.5%、平成27年度97.5%）、「今後自分が研究・発表する際の参考になった」は、平成30年度96.8%（平成29年度97.0%、平成28年度94.8%、平成27年度95.8%）となり、昨年度に引き続き、高水準を維持している。さらに、「発表者に質問し、有意義な意見交換ができた」には、平成30年度68.2%（平成29年度65.9%、平成28年度64.9%、平成27年度72.6%）の肯定的な回答があった。

なお、教員へのアンケートの結果、「自身の授業や学びへの考え方に与えた変化や影響」には、平成30年度67%（平成29年度73.0%、平成28年度70.0%、平成27年度93.0%）の肯定的な回答がでており、初年度に新たな取組を行い、高い数値を出した後、安定している。この5年間の探究活動の取組の中で、校内での理解・波及が着実に進んだと言える。

（２）英語による課題研究発表会－SAGANO GLOBAL PRESENTATION－について

「アカデミックラボと課題錬成での活動を振り返って」というアンケートでは、「チームでの協同作業を通じ、ひとつのものを作り上げ、発表することができた」には、平成30年度97%（平成29年度96.4%、平成28年度95%）、「プレゼンテーション能力を向上させることができた」に平成30年度91.2%（平成29年度89.7%、平成28年度91.3%）が肯定的な回答をし、高い水準で維持できている。さらに、「伝えたい内容を英語でうまくプレゼンすることができた」には平成30年度79.3%（平成29年度77.1%）の生徒が肯定的な回答をした。これらの結果は、この5年間で、アカデミックラボからSAGANO GLOBAL PRESENTATIONに至るまでの課題研究活動がよりスムーズに進み、充実した取組になってきたことを示し、運営指導委員会でも非常に評価された。

（３）評価等について

評価等の研究については、京都大学大学院教育学研究科との連携を行った。同研究科 楠見 孝教授、西岡 加名恵教授の指導を受けて、課題研究の内容や今後について協議した。定期的にSGHの取組に関わる生徒の変容を、本校及び京都大学大学院教育学研究科作成のアンケートで調査・考察しており、取組5年目を終え、課題探究学習の成果が明らかになった。研究指定後も学校全体で取り組んできた成果を他の教育活動に波及させ、また、他の高等学校にも普及させたいと考えている。

（４）海外コラボレーション事業について

カナダ研修では、在モントリオール日本国総領事館と連携を密に行うことにより、政府関係機関等への訪問も可能となるなど、年々内容が充実してきた。今年度、この取組を評価する企業から支援がいただけることとなり、研究指定後もさらに内容の充実を図っていききたい。参加した生徒は多様な文化や考え方に触れ、地球規模の視野で考える機会を持つことができた。

一方、アメリカ研修では、昨年度から新たにモリカミュージアムで日本の文化・社会について英語でプレゼンテーションを行い、ホストファミリーと一緒に日本庭園を見学する等の取組を行った。また、現地の交流校であるフロリダジュピター高校は、平成28年に来日して本校との国際ワークショップを実施したほか、平成30年度にも来日しており、双方向での交流を進めることができた。

上記の事業に加えて、京都府教育委員会が実施する平成30年度府立高校海外サテライト校事業では、アメリカ フロリダ州及びオーストラリア クイーンズランド州に約4ヶ月間の日程で代表生徒を派遣している。本校からは、アメリカ中期留学に1名、オーストラリア中期留学に7名が参加し、3名が留学を修了、5名が留学中である。

留学を修了した生徒3名については、3学期始業式において全校生徒向けに留学報告を行った。身近な存在から海外での経験を直接聞くことにより、特に下級生にとっては次年度の事業参加に向けて大きな刺激となったものと思われる。

（５）校内体制について

平成26年度に発足した新教務部（教務部・研究開発部・教育推進部を教務部一つに統合し、その中にSGHプロジェクトチームを置く形）も5年目を迎えて定着してきており、事業毎に学校全体で動き・点検するという全校体制でSGHを推進してきた。一昨年度から、保健体育科も課題研究のラボを担当し（今年度は「地域とスポーツ」を担当）、全教科体制で課題研究に関わることができた。

さらに、「KGSⅠⅡⅢ」をまとめる「KGSⅢ」の、「英語による課題研究発表会－SAGANO GLOBAL PRESENTATION－」は今年度が3回目となり、海外交流校の生徒や各国の外国人留学生であるTAを迎えて、英語によるプレゼンテーションと質疑応答を全生徒が行うという形や運営方法が定着した。生徒にとっても3年間の課題研究の集大成となる取組として強く意識されてきており、下級生にとっては3年生の成果に直接触れることのできる貴重な機会となっている。

（６）運営指導委員会について

＜嵯峨野高等学校運営指導委員＞

稲盛 豊実（公益財団法人稲盛財団専務理事）	岡田 伸夫（関西外国語大学教授）
金 哲佑（京都大学大学院教授）	田原 義宣（嵐山保勝会常任理事・天龍寺宗務総長）
矢代 一（株式会社矢代仁代表取締役社長）	山下 泰生（株式会社堀場製作所理事）

- ・平成30年度第1回運営指導委員会（平成30年9月21日（金）実施）
- ・平成30年度第2回運営指導委員会（平成31年2月20日（水）実施）

（７）意識調査

1年生～3年生対象に、第1回意識調査を年度当初（7月下旬から8月）に、第2回意識調査を2月に行った。SGH指定第3期生である3年生の1年次と3年次の変容を見ると、「SGHのプログラム、あるいはそれに類似する学校行事に積極的に参加している」と答えた割合が53.3%から60.0%へと6.7ポイント増加、「自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組みたい」が70.7%から82.1%へ11.4ポイント増加、「新しいアイデアを得たり発見することができる」が71.9%から80.4%へ8.5ポイント増

加するなど、探究活動に対する意識が3年間で確実に高まってきているほか、自己の積極性や創造性、さらに社会に貢献したり自らを高めようという意識が高まったと実感している生徒が増加している。3年間にわたるSGH事業が、生徒の中に意識変革をもたらしていることが明らかである。なにより、「私は、自分に満足している」が43.0%から58.4%へ15.4ポイント増と最大の増加を見せており、SGHの取組が生徒の自己肯定感を大きく高めることに役立っている結果となった。これはSGH事業の特筆すべき成果といえる。

一方、過去5年間にわたる1年当初の状況を見ると、「将来できれば海外の大学に進学したい」と答えた生徒は平均13.7%と必ずしも高いとは言えないが、「将来海外の大学へ留学したい」が44.8%、「国際化に重点を置く大学へ進学したい」が62.7%、「将来、仕事で国際的に活躍したい」が60.8%となっており、生徒が海外での経験や活躍を強く意識していることがうかがえる。それが学習姿勢にも好影響を与えており、「英語学習に積極的に取り組んでいる」は85.9%という高い数値となっている。

(8) SGH中間評価の指摘事項

SGH中間評価においては、各種取組の学習効果や研究の進行については良い評価を得たが、「KGS以外の科目における指導について、どのような変容があったのかについても評価していくことが必要である。」との指摘があった。

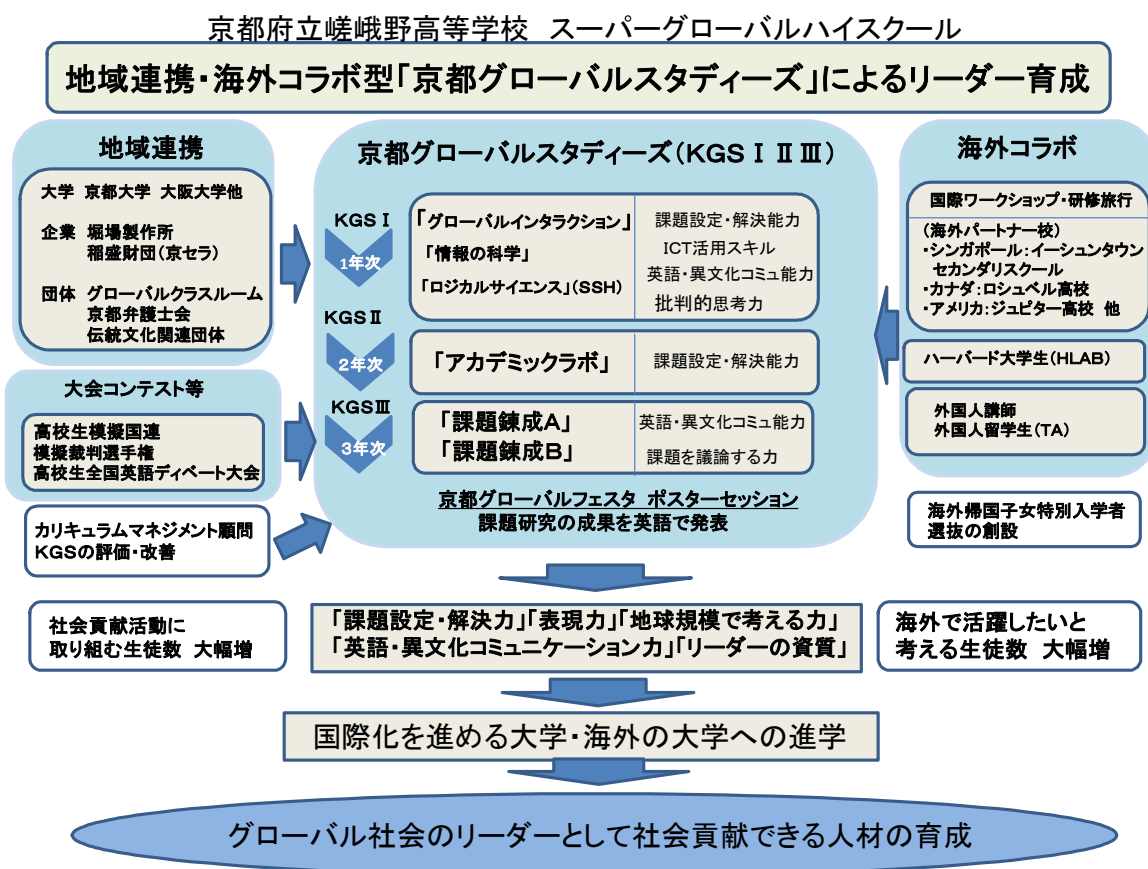
この中間評価の指摘を受け、教科主任会議や授業参観などを通して教科横断的で主体的・対話的な深い学びが実現できるよう授業改善に取り組んだ。

また、全生徒・全講座対象で年2回実施している生徒授業アンケートにも、昨年度から「アクティブラーニングなどの授業形態の工夫があるか」の設問を追加し、学校全体の平均と各講座の平均を教員個人にフィードバックすることで、SGH事業の普及を促進した。その結果、今年度の生徒アンケート結果については、4～1の4段階評価で平均が3.17（1回目）から3.20（2回目）と向上が見られた。

また、今年度のシンガポール研修においては、学年主導のホームルーム活動の取組として、シンガポールについての探究活動を行った。フィールドワーク探究発表会を実施したほか、フィールドワーク探究活動レポートを作成した。このように、授業だけでなく様々な教育活動において、課題研究に取り組むことのハードルが生徒・教員とも低くなっているのは、KGSの活動を通し、全教員の意識が変化した結果であると言える。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について



平成26年度入学生から教育課程の中に京都グローバルスタディーズ（以下KGS）ⅠⅡⅢを設置し、1年次に「社会と情報」（平成28年度から「情報の科学」に科目変更）・「グローバルインタラクション」（GI）・「ロジカルサイエンス」を設置し、課題探究活動の基礎力（英語コミュニケーション力、ICTスキル、批判的思考力・課題設定・解決力）を養成し、2年次の課題探究「アカデミックラボ」にスムーズに移行させた。「アカデミックラボ」では、人文科学、社会科学、国際関係・英語、自然科学の4つの領域に開講された17のラボから興味関心に応じて希望するものを選択する。そして生徒自身が課題を設定し、その課題の解決・改善に向けて探究活動を行い、その成果を「アカデミックラボ課題研究発表会」でポスター発表する。3年次には、「アカデミックラボ」で行った課題研究を「課題錬成A」「課題錬成B」の中で、英語でのプレゼンテーションに挑戦し、SAGANO GLOBAL PRESENTATIONで、内外に発表・提言した。教育課程に関していただいた文部科学省の中間評価は以下の通りである。

「中間評価」

○全体として各種の学習活動が豊富に設定されており、それらが相乗的な効果を生み出していると評価できる。
○研究開発の内容の年次進行が適切に進められている。

特に、3年次の「課題錬成」においては、当初、英語スライドプレゼンテーションまで行う上級コースを「課題錬成A」、英語ポスター発表を行う標準コースを「課題錬成B」と想定して設置したが、対象生徒240名あまりの全員を「課題錬成A」の英語スライドプレゼンテーションをゴールとして指導を行ったので、「課題錬成B」は不開講となった。それ以外は当初の教育課程からの変更もなく、非常にスムーズに進んできた。2年次には、アカデミックラボ課題研究発表会を開催し、研究内容を日本語のポスターで発表し、3年次には、SAGANO GLOBAL PRESENTATIONにおいて、海外交流校生徒・教員、TA（海外から日本へ留学している大学生）、大学教員等・全国のSGH校教員、本校教職員、保護者、在校生に対して英語によるプレゼンテーションを行い、質疑応答を行った。この実践からもわかるように、この5年間の取組の中で、新学習指導要領の「総合的な探究の時間」に繋がる教育課程を開発し、それに関連する学校行事を校内に定着させられことは大きな成果と言える。

（2）高大接続の状況について

本校は今年度の3年生の年度当初の進路希望が全員国公立大学であったように、例年国公立大学進学希望者が非常に多い。希望進路の実現という観点から、平成26年度から平成29年度卒業生の国公立大学の合格状況の推移を見ると、現役の合格件数・進学者数ともに、SGH対象の平成28・29年度が、SGH対象でない平成26・27年度を上回っている。

これまでの進路学習や社会人講師活用事業での大学教員による講演等の取組に加えて、アカデミックラボなどで直接自分達の研究課題について大学の教員にアドバイスを求めたり研究室を訪問するなどの経験を多く積むことで、進路目標が身近なものに感じられ、希望進路の実現により積極的に取り組めるようになったと考えている。

また一方で、SGHの教科横断的な探究活動の経験が、高等学校での学びの経験などを評価する国公立大学の特色選抜などで評価される可能性を探ってきた。この5年間で東北大学1名、北海道大学1名、さらに、今年度は1名の生徒が京都大学の特色入試に合格した。今年度の合格生徒はSGH事業であるフロリダ研修での体験を元に出願書類を作成し口頭試問に臨んでおり、SGH活動の特色入試等での有効性が確認できたので、SGH指定終了後もこれらのノウハウを活用していきたい。

本校では、大学の単位履修制度などは設定していない。地域に多くの大学があり、また、生徒の進学する大学も全国に広がり多様であることから、協力体制にある大学の単位を履修してもその大学に進学するとは限らず、実現にはハードルが高いためである。大学コンソーシアム京都が加盟大学間で単位互換制度を行っており、それらと連動して京都府内のどの大学に入学しても単位として認められるような取組は可能性を探っていきたい。

種別 \ 年度	H29	H28	H27	H26
国公立大学合格件数	245	220	197	186
国公立大学合格件数(現役)	170	174	154	148
国公立大学進学者数	158	146	139	130
私立大学進学者数	101	82	111	120

全8クラスの数値(内SGH対象6クラス)

（3）生徒の変化について

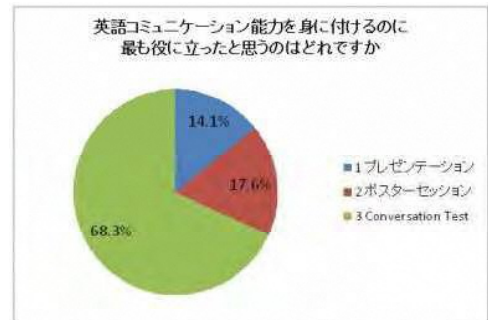
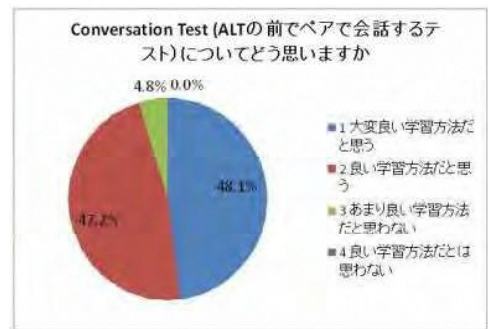
ア グローバルインタラクション（GI）における生徒の変化

スピーキング能力の伸長とスピーキングに対する意識の変化について(Conversation Test, All Englishでの授業の効果)

初年度の平成26年度の取組から、4技能の伸長のうち、最も生徒が伸びを実感しているのはspeakingであり、下記の調査結果から、年間を通して行ったConversation TestとAll Englishでの授業がその伸長を大きく促した要因と考えた。Conversation Testとは、生徒2人がその場で提示されるトピックについて、それぞれが規定の時間を話した後、今度はお互いの述べたことについて、フリーディスカッションを行い、その一連の内容を教員が評価するというものである。

(初年度 平成26年度)

- (1) 「Conversation Testについてどう思いますか」という質問に対して、「大変良い学習方法だと思う」「良い学習方法だと思う」と回答した生徒は、95.3%であった。
- (2) また「プレゼンテーション、ポスターセッション、Conversation Testのうち、英語コミュニケーション能力を身に付けるのに最も役に立ったと思うのはどれですか」という質問に対し、Conversation Testと回答した生徒が最も多く、68.3%であった。
- 生徒の主な感想は次の通りである。
- ・お互いに質問し合うので頭の中で思いついたことを即座に英語で話す訓練になった。
 - ・英語を聞く、話す、伝えるなどいろいろなことが必要になるので良い練習になる。
 - ・英語の能力が上がるし、コミュニケーション能力もつく実践的なものだと思う。
 - ・「どうすれば相手に伝わりやすいか」を考えて英語力を鍛えることができた。
 - ・英語で話すのが楽しいと思えるきっかけになった。
 - ・人とコミュニケーションを取るということが英語を学ぶ上で一番大切だと思うから、大変良い学習方法だと思う。
 - ・リアルな英語力、会話表現力が身についた。
- (3) また「英語を使う能力を伸ばす観点から全て英語で行う授業についてどう思いますか」という質問に対して「大変良い学習方法だと思う」「良い学習方法だと思う」と答えた生徒は93.7%であった。
- (4) 上記の結果に加えて、All Englishでの授業についての主な感想は次の通りである。
- ・聞き取ろうと必死になることである程度わかるようになった。
 - ・授業を終えた後もつい反動的に英語がでてしまうことがよくあった。
 - ・自分の考えていることを伝えるために工夫して話す態度が身についた。
 - ・自分の英語能力が伸びているのを実感できた。



上記のような初年度の結果を踏まえて、平成27年度以降、All Englishでの授業を継続し、その中にCommunication Testを効果的に用いて指導を行ってきた。

平成27年度から29年度にかけての調査において、パフォーマンス・タスクを通して英語の4技能(speaking, writing, reading, listening)において「非常に高まった」「ある程度高まった」と回答した生徒の推移は、それぞれ右の表のようになった。

	Speaking	Writing	Reading	Listening
平成27年度	88.1%	77.9%	73.2%	85.6%
平成28年度	84.3%	82.1%	83.9%	92.1%
平成29年度	90.6%	87.3%	81.3%	89.0%

最終年度の平成30年度においては、右のグラフからもわかるように、この授業での活動を通して英語を積極的に使おうとする意識を高めることができたと答える生徒が85.5% (平成29年度86.4%、平成28年度90.4%、平成27年度85.5%、平成26年度84.1%)となり、この5年間を通して、生徒の英語に対する積極性が高まり、高い水準を保てたといえる。

3. 英語を用いて積極的に活動しようとする意識は高まりましたか。



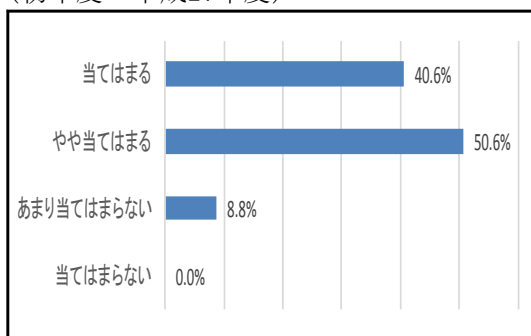
イ アカデミックラボにおける生徒の変化

教育課程上、2年次に実施する「アカデミックラボ課題研究発表会」直後に全生徒にアンケートを行い、生徒の力の伸長を調査してきた。

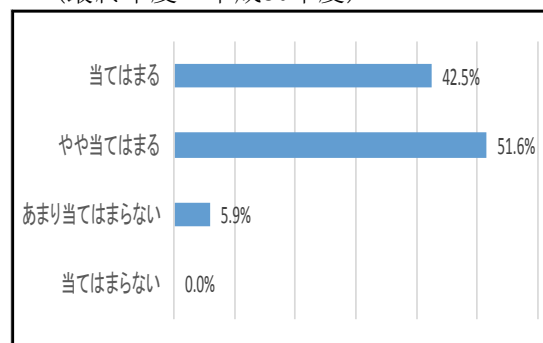
（課題設定・解決力）

自分たちで主体的に考え、課題を設定し、研究していくことができた。

（初年度 平成27年度）

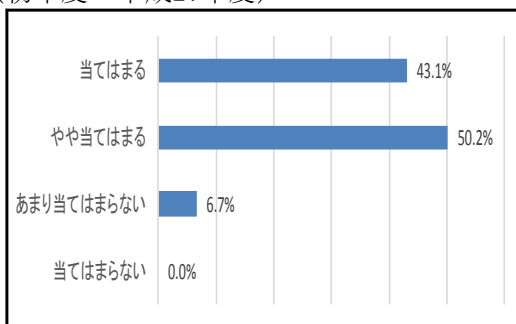


（最終年度 平成30年度）

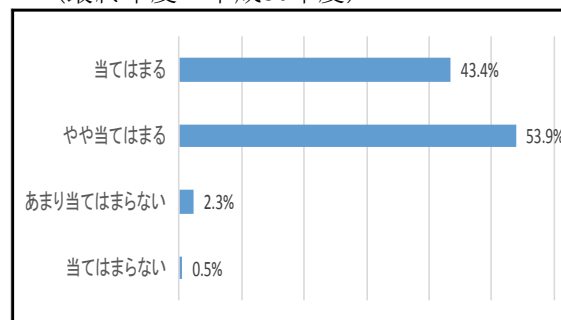


課題研究を通して、考える力を身につけることができた。

（初年度 平成27年度）

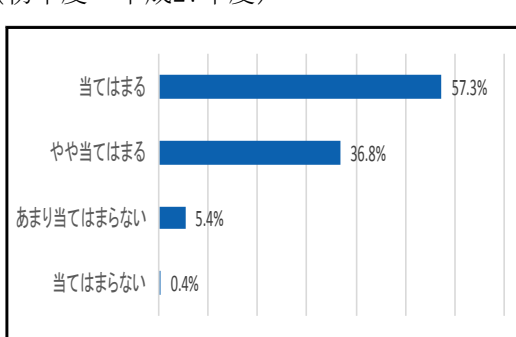


（最終年度 平成30年度）

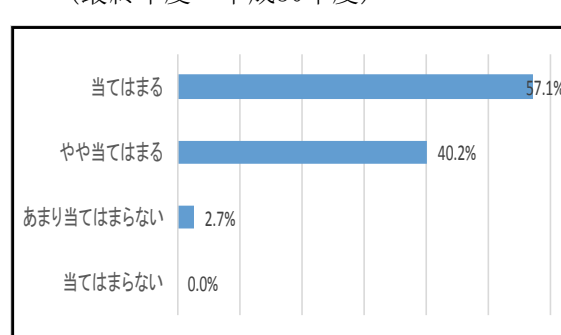


チームでの協同作業を通じ、ひとつのものを作り上げ、発表することができた。

（初年度 平成27年度）

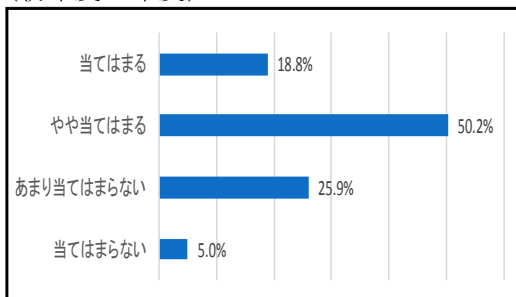


（最終年度 平成30年度）

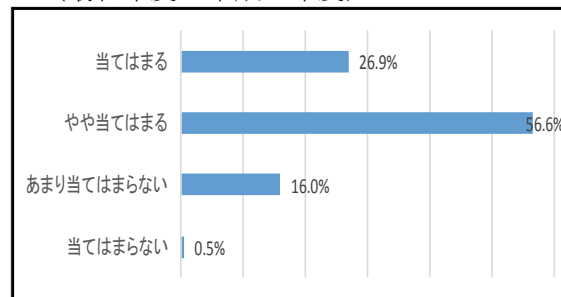


質問にきちんと答えることができた。

（初年度27年度）



（最終年度 平成30年度）



上記のように、「自分たちで主体的に考え、課題を設定し、研究できた」には平成30年度94.1%（平成29年度95.7%、平成28年度91.3%、平成27年度91.2%）、「課題研究を通して、考える力を身につけることができた」には、平成30年度97.3%（平成29年度96.2%、平成28年度93.3%、平成27年度93.3%）、「チームでの協同作業」は、平成30年度97.3%（平成29年度98.8%、平成28年度95.8%、平成27年度94.1%）の肯定的な回答があり、それぞれ高い

水準を維持する傾向が見られた。また、平成28年度に大幅に上昇した「質問にきちんと答えることができた」の項目では、平成30年度83.5%（平成29年度80.5%、平成28年度80.4%、平成27年度69.0%）の肯定的回答があり、一昨年度11.4ポイントの大幅な上昇がみられた状態が今年度さらに3.0ポイント上昇している。本校の課題探究の指導において、重要項目として挙げていたのが質疑応答力の育成であるので、5年間の取組において大きな成果であると言える。「研究内容に満足」も平成30年度87.7%（平成29年度84.6%、平成28年度80.3%、平成27年度77.4%）、「全体として、達成感・満足感」は平成30年度93.6%（平成29年度90.6%、平成28年度86.6%、平成27年度83.3%）であり、それぞれ3.1ポイント、3.0ポイント上昇している。「うまくプレゼンできた」は、平成30年度88.6%（平成29年度84.2%、平成28年度87.5%、平成27年度81.5%）で、昨年度よりは若干の上昇が見られた。限られた時間の中で発表の準備を行う中で、同じく研究指定科目であるGlobal Interactionの手法のポスターセッションを練習に取り入れることで、この5年間の取組を活用して、効果的なプレゼンを模索してきたことも、上記の改善の一要因となっていると考えられる。

ウ 卒業生の変化

平成28年度卒業生と29年度卒業生を対象にSGHでの学びについて調査を行い、以下のような結果であった。

（高校時代に伸ばしたと思われる力）

平成29年度卒業生のトップ3

- ①英語によるコミュニケーション力
- ②課題探究力
- ③論理的思考力

平成28年度卒業生のトップ3

- ①自主性
- ②課題探究力
- ③好奇心／国際感覚

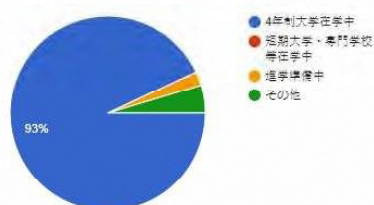
上記は、平成28年度卒業生57名と平成29年度卒業生87名の回答から得られたものであり、課題探究活動を行った成果があったと言える。また、以下にその他の質問に対する回答を記した。現在海外への留学を実際に行っている卒業生からの回答は得られないため、海外大学進学や将来海外の企業で仕事をしたいという項目の数値はあまり高くない。だが、自由記述の意見も含めて、高校時代のSGHの学びが大学での学びに着実に繋がり、課題探究力、コミュニケーション力、協働する力、思考力等を高めていることがうかがえる。

（SGH第一期生と第二期生対象の調査結果）

平成28年度卒業生（第一期生以下同じ）

問2 現在の状況を選んで下さい。

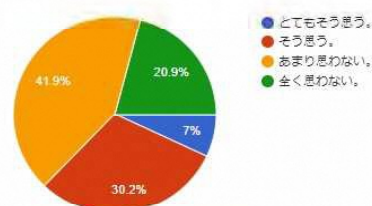
43 responses



平成28年度卒業生

問3 あなたがアカデミックラボで行った課題研究は大学での専門分野を決めるのに役立ちましたか。

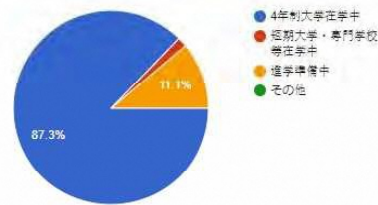
43 responses



平成29年度卒業生（第二期生以下同じ）

問2 現在の状況を選んで下さい。

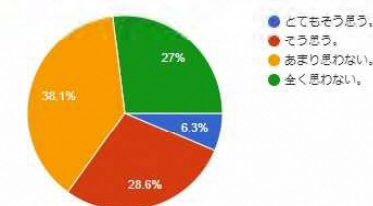
62 responses



平成29年度卒業生

問3 あなたがアカデミックラボで行った課題研究は大学での専門分野を決めるのに役立ちましたか。

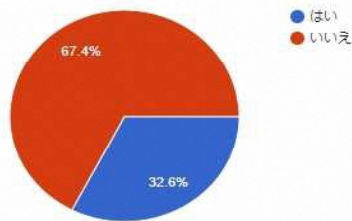
63 responses



平成28年度卒業生

問4 あなたは大学入学後に海外留学、又は海外研修に行きましたか。
(あるいは、行く予定がありますか。)

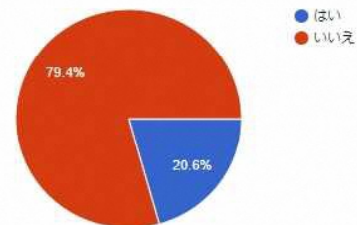
43 responses



平成29年度卒業生

問4 あなたは大学入学後に海外留学、又は海外研修に行きましたか。
(あるいは、行く予定がありますか。)

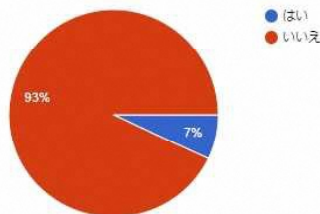
63 responses



平成28年度卒業生

問5 将来、海外の大学への進学や海外での就職を考えていますか。

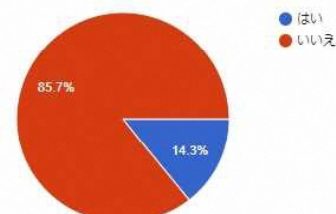
43 responses



平成29年度卒業生

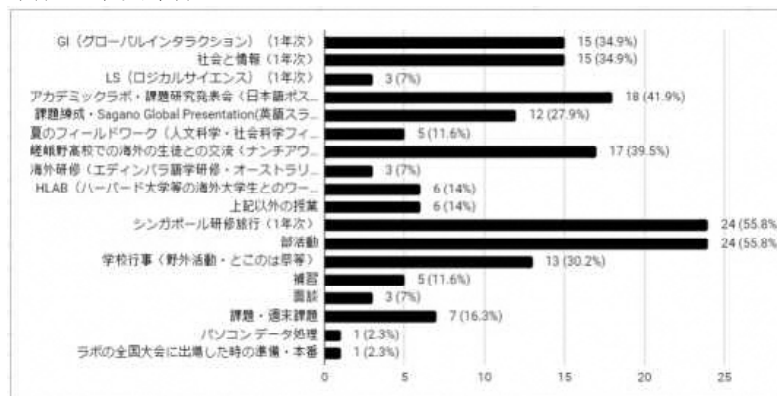
問5 将来、海外の大学への進学や海外での就職を考えていますか。

63 responses

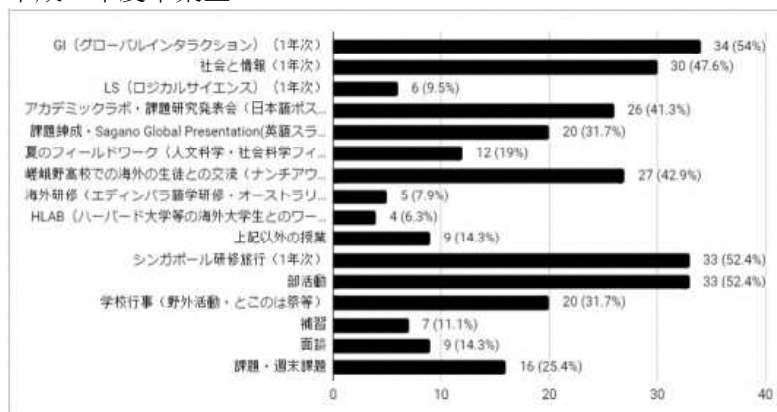


「高校在学中に経験したことで、卒業後に役立ったことを以下から挙げて下さい。」

平成28年度卒業生

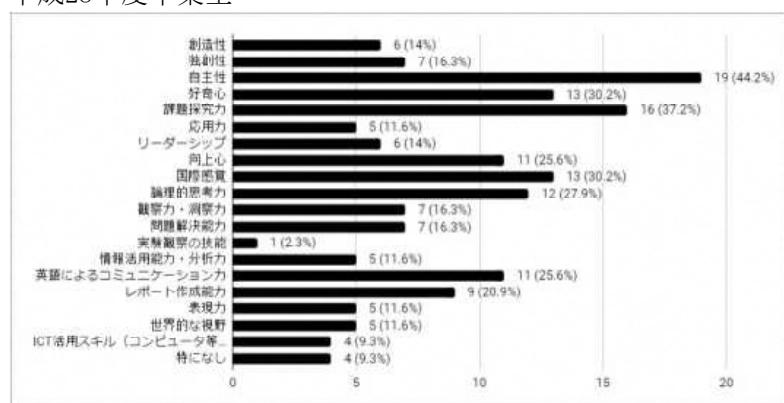


平成29年度卒業生

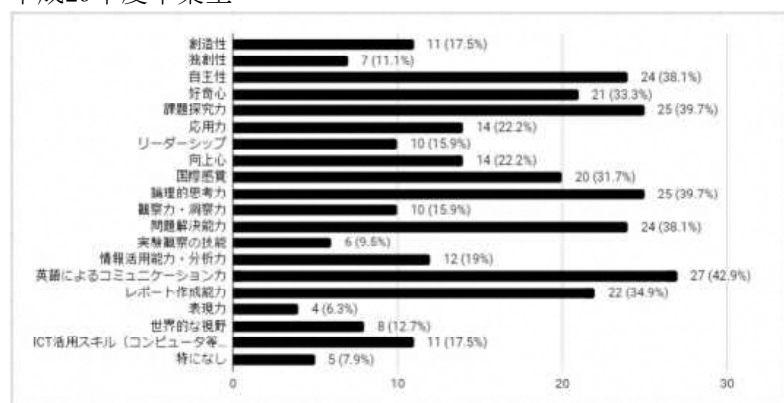


「あなたが高校時代に伸ばしたと思われる以下の技能・能力・態度等で、現在役に立っていると思われるものを挙げて下さい。」

平成28年度卒業生



平成29年度卒業生



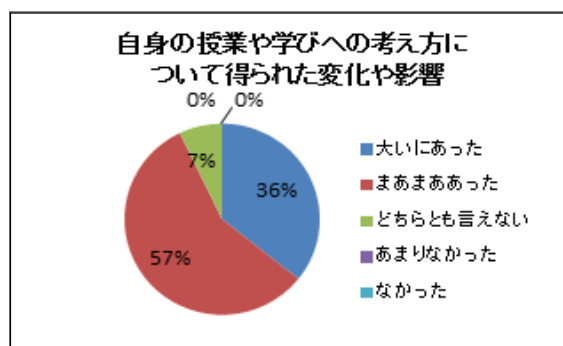
（４）教師の変化について

教員が課題探究活動を指導する中でどのように変化するかについて、２年次の「アカデミックラボ」担当教員を対象にアンケート調査を行った。

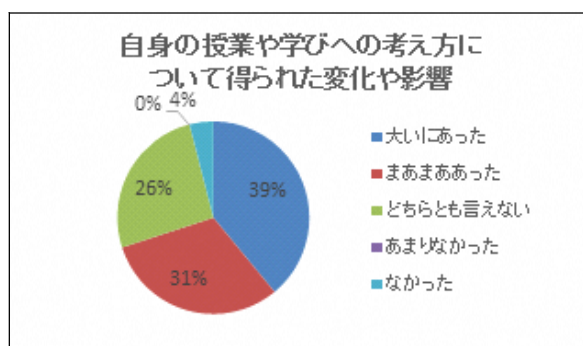
担当教員の回答

「自身の授業や学びへの考え方について得られた変化や影響」

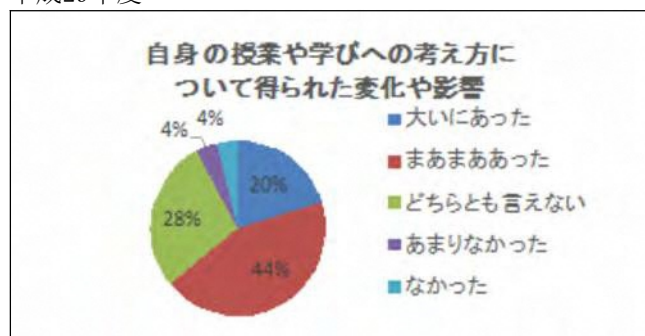
平成27年度（アカデミックラボ初年度）



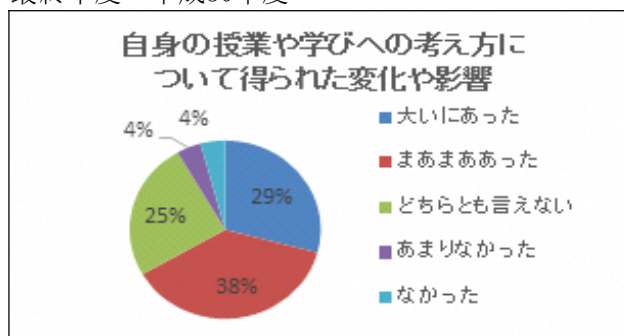
平成28年度



平成29年度



最終年度 平成30年度



上記のように、「自身の授業や学びへの考え方について得られた変化や影響」には、平成30年度67%（平成29年度66%、平成28年度70%、平成27年度93%）の教員が肯定的な回答をしており、この5年間の研究活動において、初年度の大きな意識改革以降、課題研究の取組が教員の授業や教育活動に継続して影響を与えてきたことがわかる。アカデミックラボ実施初年度のインパクトが非常に大きく、数値としても非常に高い。担当者の入れ替わりはあるが、8割の教員は継続して担当しているため、2年目（平成28年度）以降の数値が一旦下降し、そのまま安定しているのではないと思われる。SGH校として課題研究の指導で得たことが校内の様々な他の教育活動に影響を与え、特に教員の授業への意識に大きな影響を与えたことが成果であるといえる。

KGSが他の科目の指導に影響しているかを評価するため、全生徒・全講座対象で年2回実施している生徒授業アンケートに、アクティブラーニングなどの授業形態の工夫があるかの設問を昨年度から追加した。その結果、座学の授業でも一斉講義だけではなく授業形態が工夫されているとの生徒の評価は、今年度だけでも3.17（1回目）から3.20（2回目）と向上が見られ、教員間でKGSの影響を受けた授業の実践が進んでいることが分かる。

（5）学校における他の要素の変化について

SGHに取り組んだ5年間で、外部関係機関等・大学との関係がさらに深化した。日本政策金融公庫、京都弁護士会法教育委員会、茂山狂言会、京つけもの「西利」、宇多野ユースホステル、嵐山保勝会、堀場製作所、Shimazuコーポレーション、シャチハタコーポレーション、京都市交通局、京都バスやNGOをはじめ、京都大学、大阪大学、京都教育大学、京都市立芸術大学、同志社大学、立命館大学、関西大学、京都学園大学、嵯峨美術大学等が主立った連携先であり、生徒の探究活動に関して多大な支援をいただき、学校がより地域社会に開かれたことも大きな成果である。

さらに、海外の交流が広がり、その結びつきが深まった。現在相互交流を行っている学校が、シンガポール共和国のナンチアウハイスクール、イーシュンタウンセカンダリースクール、ハイシンカトリックスクール、米国フロリダ州のジュピターハイスクールの4校となり、訪問交流を受け入れている学校は、先ほどの4校に加えて、韓国の韓一高校、シンガポール共和国のアングロチャイニーズ校の2校である。来年度にはさらにインドネシアの複数校と交流をスタートする予定である。SGH以前と比較して、海外交流校の数は倍増した。

校内の施設内にも、「数学おもしろボード」が登場し、休み時間や放課後に「数学おもしろボード」の前に生徒が集まり問題に取り組む姿や、図書館が大きくリニューアルされ、生徒の探究活動を支援する書籍がSGH予算で整備された。時には生徒の提案で図書館の展示レイアウトが変更されたり、探究活動の内容が展示されたりするようになった。

この5年間で、日本全国から数多くの学校訪問（平成30年度は18校）を受け入れてきた。その中で、SGH校としての取組に限らず、本校の特徴的な教育活動を伝え、その効果やノウハウを全国に普及させてきた。

毎年保護者対象に実施している学校アンケートでは、「グローバル人材育成のための海外校との交流等、国際的な取り組みが行われている」という項目について「そう思う」「おおむねそう思う」という肯定的意見は、平成26年度93.9%→平成27年度88.0%→平成28年度88.0%→平成29年度91.3%→平成30年度93.4%と推移している。SGHの初年度は保護者にもインパクトが強く、期待度が高かったが翌年から落ち着き、高い水準ながら年々評価が高くなっている。あわせて、「学校では、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）・スーパーグローバルハイスクール（SGH）校として特色ある教育活動が行われている」という項目についての変化も平成26年度95.1%→平成27年度85.4%→平成28年度85.4%→平成29年度89.2%→平成30年度90.3%と同様の動きを見せている。

（6）課題や問題点について

今年度は研究指定最終年度であり、5年間の取組の中で次の点が課題であったと考えている。

ア 各取組の評価について

研究指定を受け、KGSⅠⅡⅢを核として様々な教育活動を行ってきた。5年間の研究の中で、PDCAサイクルを適切に回し取組を常に進歩させるべく、生徒評価の重要性は初年度から意識していたところである。

グローバルインタラクシオンにおいては、英語4技能を活用したコミュニケーション能力測定のためのパフォーマンステストについてループリックを作成し、生徒・教員で共通理解を行い、評価を続けてきた。毎年改善を行いつつ進めており、さらに良いものにできると考えている。

また手探りの中で課題研究を行ってきたが、評価方法についても模索を続けた。アカデミックラボでは多様な分野にわたって多岐にわたるテーマの課題研究に対してどのような評価が適切か、5年間にわたり担当者間で検討を続けた。さらに、京都大学大学院教育学研究科との連携を行い、本校及び京都大学大学院教育学研究科作成のアンケートで定期的に調査を行ってきたが、有効な分析や考察の方法についてさらなる研究を続けたい。

SAGANO GLOBAL PRESENTATIONにおいては、全発表をビデオ撮影している。優秀な発表の記録のみならず、探究活動の指導・評価・発表指導等の改善においても活用を進め、より良い指導・評価を目指したい。

運営指導委員会などでも指摘を受けているが、適切な評価と生徒・教員の変容の可視化については、現在も課題として残っており研究が必要である。

イ KGSの他の科目への影響について

5年間のSGH事業を通して、生徒が体系的に探究活動に取り組んでおり、その成果は生徒に良い変容をもたらしている。しかし、中間評価でも指摘されているとおり、KGS以外の科目における指導にどのような変容があったかについての検証は十分とはいえない。

対話的な授業や、ICTを活用した授業は増えてきているが、SGH事業の影響に加えて、新学習指導要領の発表の影響も要因として考えられ、その詳細を分析することは難しい。

ただ、今年度のシンガポール研修において、学年主導のホームルーム活動の取組として課題研究が行われ、フィールドワーク探究活動発表会の実施やフィールドワーク探究活動レポートの作成がされたことは、探究活動が全教員に浸透していることを示すものであるといえる。

ウ 事業成果の普及について

5年間の研究成果を他校にも普及する活動として、課題研究発表会の公開、グローバルネットワーク京都校（9校）との合同実践（HLAB、交流会等）、学校訪問の受け入れなどを積極的に行ってきた。また、幼・小・中学校など他校種との「縦のつながり」については、近隣の小学校の校長に学校評議員として参加してもらい、SGH事業の活動を紹介している。研究指定後も他校種への普及を促進していきたい。

エ 海外留学・海外進学希望者の増加について

短期留学に参加した生徒の内、具体的に海外の大学への進学を希望している生徒は少数にとどまっているが、半数の生徒は海外で働くことを意識するようになったと答え、9割以上の生徒が大学在学中にも留学することを希望しているなど、短期間の経験であっても海外へ視野を広げる大きなきっかけとなっていることがうかがえる。中期留学参加生徒については異文化への深い理解や多様な視点を獲得するなど、より大きな成長を見せており、海外大学への進学を決意する生徒もあらわれた。

このようにSGHの取組で海外への意識は高まっており、将来の進路を見据えて国内の大学に進学してから海外大学に留学を希望する生徒が大多数に上った。一方で、海外大学に進学した生徒は5年間で3名にとどまっている。昨年度までが1名進学で、今年度が2名進学予定と増加の傾向は見られるので、生徒の進路希望に添いつつ、海外進学に関する情報提供やノウハウ等を蓄積していくことで、海外進学希望者の支援を行いたい。

（7）今後の持続可能性について

これまでのSGH事業で実施してきた様々な取組によって得られた成果は、大変有効な教育効果を生み出していると中間評価でも指摘されている。また、様々なノウハウがこの5年間の丁寧な教職員間の情報共有と真摯な話し合いの中で蓄積されており、生徒の発想や活動もスケールの拡大が見られる。また、これまで丁寧に培ってきた海外の学校との交流関係も信頼を高めており、本校の国際教育についての大きな財産となっている。これらの成果を決して無駄にせず、本校のみならずわが国全体の教育に役立て、これまでの研究開発を持続させることは本校の希望であり、使命であると認識している。

本校ではSGH事業で実施した教育課程については、来年度の入学生にも提示しており、今後もKGSⅠⅡⅢの実施を決定している。

事業の終了後は、これまで潤沢に事業予算を活用していたTAやアカデミックラボの活動費などについて、ボランティアや外部団体の寄付などを活用し、工夫しつつ継続していく予定である。また、アカデミックラボは本校教員の多くを指導者とすることで実現でき、かつ成果が上がってきた面があり、これからも指導力向上・人材育成の観点からも多くの教員による取組としていきたい。

管理機関からは、これまで研究を進める上で様々な形で適切な指導や多大なる支援を受けており、これなくしてはこの5年間の研究の成果は為し得なかったと言える。したがって、管理機関の支援体制が今後の取組の継続についても大きな影響力を持つと考える。今後も管理機関から適切な指導・助言を受けながら連携してより良い先進的な教育を実践していきたい。

国際交流事業については、SGH研究指定が終了した後、現在の取組をそのまま続けることは難しいものがある。その中で、必ず残さなければならない核となる取組を精査して、これまでの財産と信頼を維持発展させていきたい。特に、相互交流校との関係はかけがえのないものである。シンガポールへの

研修旅行はSGH指定前から実施しており、今後もシンガポールの学校との交流は継続予定である。フロリダの中期留学は、管理機関の事業として来年度も継続実施されることが決定している。本校独自のプログラムであるフロリダ研修については、国の補助金の活用や、管理機関が実施している「京都府母校応援ふるさと事業」により卒業生をはじめ広く府民に寄付を募るなど、様々な方策を検討している。

（６）で挙げた課題については、研究指定終了後も解決に向けて取り組みたい。

探究活動の評価については、今後、新学習指導要領の実施に向けて、全高等学校で課題となることが予想される。現在も来年度から探究活動を取り入れる予定の近隣府立高校の視察を受け入れているが、今後も引き続き本校が牽引役として先行研究を実施し、その成果を他校・他校種へ波及させていきたい。

SGH事業とSSH事業を通して全生徒が探究活動に携わっていることが、学校全体の雰囲気の良い影響をもたらし、一般科目の授業や他の教育活動においても生徒が主体的に活動する場面を多く目にするようになった。そういった個々の教員や教科・分掌等が行っている実践の共有を図り、全校体制での組織的な指導形態として定着させることで、KGSの他教科への波及が期待できる。

海外の大学へは今年度２名の生徒が進学を予定しており、これまでの取組の成果が表れてきている。今後も、管理機関の補助事業やトビタテ！留学JAPANなどの制度を最大限活用し、生徒が海外を体験する機会を提供することにより、留学成果を他の生徒へ波及させるとともに、海外進学に関する情報提供やサポートを進め、海外留学や海外進学への意識を高めていきたい。

以上により、これまでの取組を持続・発展させ、世界で活躍できるリーダーの育成を実現したい。

特集ページ 5年間のSGHの歩みと成果

SGHの指定を受けて、嵯峨野高校がさらに魅力的な学校に！

成果その1

新学習指導要領の「総合的な探究の時間」に繋がる教育課程の開発と実施

京都グローバルスタディーズⅠⅡⅢによる魅力的な学びから

新学習指導要領の「探究的な学習の時間」へ



①探究活動の基礎力養成 (グローバルインタラクション)

アカデミックラボ

②探究活動 (アカデミックラボ)



課題練成

③英語による研究成果の発信と提言 (課題練成)



成果その2

生徒の主体的な学びの場の創出

アカデミックラボ

京・平安文化論

「ちゅう源氏と巡る京都スタンプラリー」
の企画・実施



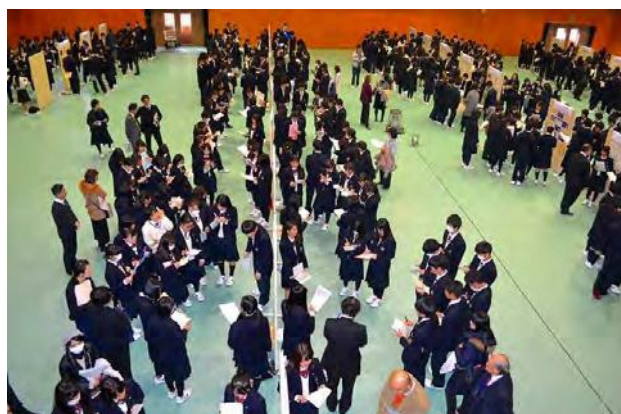
外部企業や大学と連携して生徒企画の

スタンプラリーを京都市内で実施！

NHKニュースにも取り上げられ、話題に
なりました！

生徒全員が課題研究を成果発表会で発信・提言！

日本語のポスター発表



英語でのプレゼンテーション



実践的な英語力を育成！



オールイングリッシュで英語・異文化
コミュニケーション能力の基礎を育成



留学生のティーチングアシスタントを
交えてプレゼンテーション

成果その3

外部関係機関等・大学との関係の深化



弁護士事務所での研修

京都弁護士会法教育委員会



狂言体験

茂山狂言会のワークショップ



京つけもの「西利」と課題研究でコラボ



宇多野ユースホステルにて検証実験



嵐山保勝会の方とミーティング



京都の桜守の方に話を聞く



京都教育大学の大学院生・大学生・研究生の支援を受けて高大連携



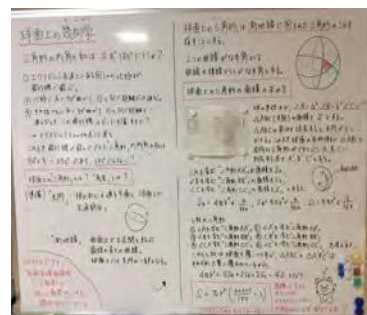
京都大学の大学院研究室にて、海外研修の課題研究を発表交流

成果その4

学校内が変わりました！

数学おもしろボード

休み時間や放課後には「数学おもしろボード」前に生徒が集まります！



図書館も大きくリニューアル！



図書館には課題探究のヒントが満載！

生徒のアクションから図書館が大きく変化！



Before



After

卒業生に聞きました！

～高校時代に伸ばしたと思われる力～

平成29年度卒業生のトップ3

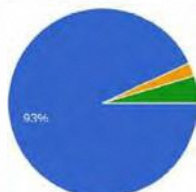
- ①英語によるコミュニケーション力
- ②課題探究力
- ③論理的思考力

平成28年度卒業生のトップ3

- ①自主性
- ②課題探究力
- ③好奇心／国際感覚

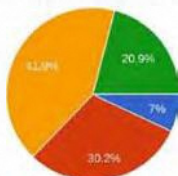
平成29年度卒業生のSGHアンケート結果

2 現在の状況を選んで下さい。



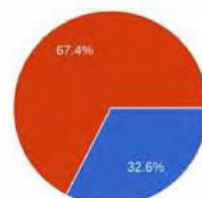
● 4年制大学在学中
● 短期大学・専門学校等在学中
● 進学準備中
● その他

3 あなたがアカデミックラボで行った課題研究は大学での専門分野を決めるのに役立ちましたか。



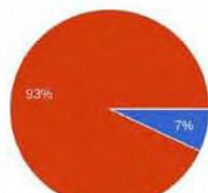
● とても思う。
● そう思う。
● あまり思わない。
● 全く思わない。

4 あなたは大学入学後に海外留学、又は海外研修に行きましたか。(あるいは、行く予定がありますか。)



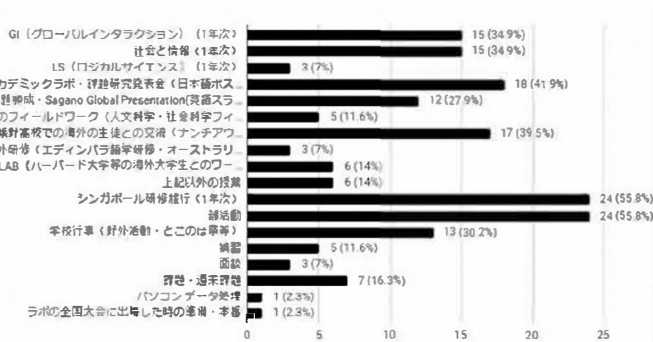
● はい
● いいえ

5 将来、海外の大学への進学や海外での就職を考えていますか。

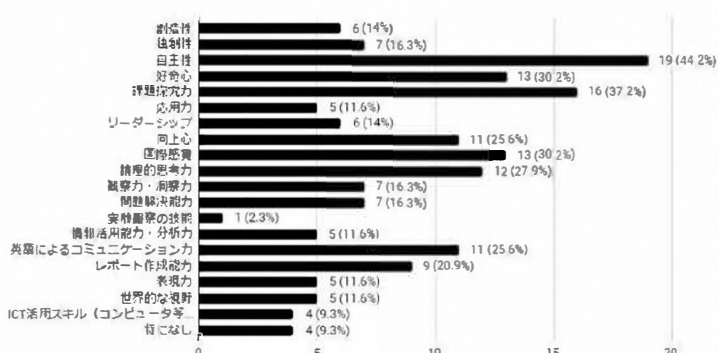


● はい
● いいえ

6 高校在学中に経験したことで、卒業後に役立ったことを以下から挙げて下さい。(複数回答可)



7 あなたが高校時代に伸ばしたと思われる以下の技能・能力・態度等で、現在役に立っていると思われるものを以下から全て挙げて下さい。(特に該当するものがない場合は、特になしを選んで下さい。)



8 嵯峨野高校での上記のような学びが卒業後どのように役に立ちましたか。(簡潔に書いて下さい。)

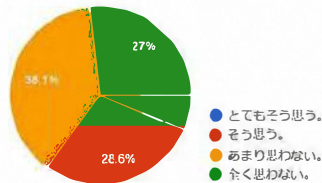
- 授業で問いを考えると様々な視点から考えられると思う。
- 何事にも興味を持ちチャレンジする。
- 自分の考えが明確になった。
- 勉強をする習慣が身につく、何事に対しても積極的に学ぼうとする態度が当たり前のようになってくる。
- 1年次にGIなどで英語によるコミュニケーションに触れたことは、大学等で同様の取り組みに参加する上でアドバンテージになったと考える。
- 多様な価値観を認め合う国際的な視点を養うことができた。真面目に自主的に勉強へ向かう姿勢を学んだ。

平成30年度卒業生のSGHアンケート結果

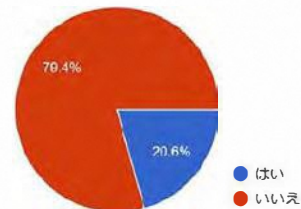
2 現在の状況を選んで下さい。



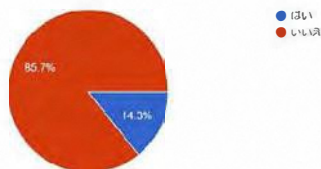
3 あなたがアカデミックラボで行った課題研究は大学での専門分野を決めるのに役立ちましたか。



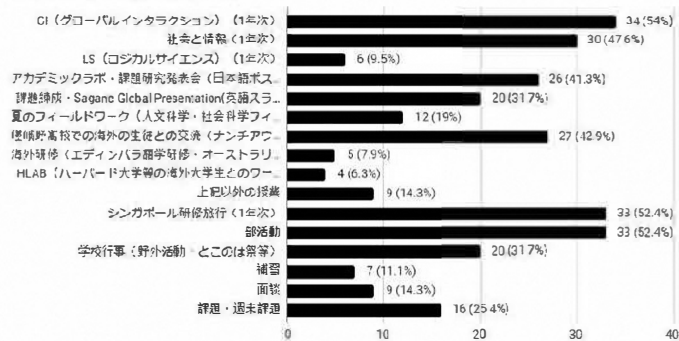
4 あなたは大学入学後に海外留学、又は海外研修に行きましたか。(あるいは、行く予定がありますか。)



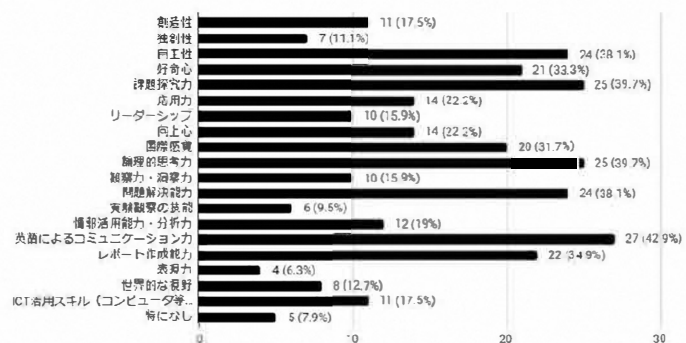
5 将来、海外の大学への進学や海外での就職を考えていますか。



6 高校在学中に経験したことで、卒業後に役立ったことを以下から挙げて下さい。(複数回答可)



7 あなたが高校時代に伸ばしたと思われる以下の技能・能力・態度等で、現在役に立っていると思われるものを以下から全て挙げて下さい。(特に該当するものがない場合は、特になしを選んで下さい。)



8 嵯峨野高校での上記のような学びが卒業後どのように役に立ちましたか。

- アカデミックラボで調べたことが意外と大学での授業を受ける際に基礎知識となって役立った。また、海外に行った経験も日々の大学生活、授業、いろいろな活動で役に立っていると感じる。
- 自分が研究したいこと、やりたいことを見つけて、それをどう研究するか、達成するかを考えられるようになった。
- 高校での勉強に関するさまざまな経験が大学での勉強に対する自信となりました。
- 自主的な行動力につながり、自分の意見を主張できるようになった。
- ハイレベルな技術力を大学の授業や研究において発揮できた。

具体的な活動内容

(1) 研究開発単位「京都グローバルスタディーズⅠⅡⅢ」 ア グローバルインタラクション（学校設定科目・英語・2単位）

1 ねらい

- ・普通科および京都こすもす科共修コースの1年生、6クラス(合計240名)を対象とする。
- ・表現活動を中心にして、「読む・書く・聞く・話す」の4技能を活用し、論理性を伴ったコミュニケーション能力の向上を図る。
- ・シンガポールをはじめとする各国との交流において、積極的にコミュニケーションを取るための技能を習得するだけでなく、国際社会で主体的に生きるものとして、異文化を理解し尊重する態度を育てるとともに、自国の文化への理解を深め、それをプレゼンテーションソフト等を用いて発信できることを目指す。

2 概要(実践)

(1) 年間計画

週2時間のうち1時間をSpeakingに焦点を当てた授業、もう1時間をListeningに焦点を当てた授業とし、1クラスを2講座に分割し、1講座あたり20名で実施した。

Speaking の授業では、以下のパフォーマンス・タスク中心の活動を行った。

	トピック	主なパフォーマンス・タスク
4月	Self Introduction	Conversation Practice / Test (ALTの前でペアで自己紹介) Show and Tell(小道具を用いて1分間の自己紹介スピーチ)
5月		Interview Test(2分間の会話テスト)
6月	Introduction of Sagano High School	Presentation (嵯峨野高校を紹介するプレゼンテーション、質疑応答) ハイシINGKATリックスクール(シンガポール)との交流
7月		Conversation Test (プレゼンテーション活動全体を振り返り、ペアでの3分間の会話) Writing a formal e-mail (formal e-mailの書き方)
8月		Summer e-mail homework assignment(海外の大学に問い合わせのメールを出す)
9月	Telling Your Opinion	Four Corners Questions (理由とともに意見を述べる練習) Mini-Debate(簡単なディベート形式で論理的に意見を述べる練習) Telling Opinion Chain(与えられた主題に対して即座に論理的に意見を述べる練習)
10月		Conversation Test (与えられた主題に対して即座にペアで議論)
	All About Singapore	Poster Session(研修旅行の事前学習としてシンガポールについてリサーチしポスター作成、発表、質疑応答)
11月		Conversation Test(ポスターセッションを振り返って)
	Introduction of Japan	Presentation(研修旅行での交流授業に向けて日本を紹介するプレゼンテーションの作成、発表、質疑応答) イーシュンセカンダリースクール、ナンチアウハイスクール、アングロチャイニーズスクール(シンガポール)、との交流
12月		Conversation Test(プレゼンテーション活動を振り返ってペアで会話)
1月	Future as a Global Citizen	School Trip to Singapore(イーシュンタウンセカンダリースクール、ハイシINGKATリックスクール、ダンマンハイスクール との交流) Tolerance(Global Citizenとしての在り方や生き方を考える)
2月		Interview with adults (TA, ALT, JTEにインタビューし、自らの将来について考える)

	Conversation Test (グローバル社会の一員としてどう生きていくか、1年の学習を振り返って、ペアで会話) Poster Session "Future as a Global Citizen"(グローバル社会の一員としてどのように生きていくべきかについてポスター作成、発表、質疑応答)
--	---

Listeningに焦点を当てた授業は昨年度から今年度大きく改善をした。一つの教室に、iPadを使用してListening Comprehensionに取り組むステーション、Cromebookを使用して既習の英語表現の発音練習に取り組むステーション、英語教諭がImpact Listeningという教科書を使用して英語でインタラクションを行うステーションの3つを設置した。20人の生徒を3グループに分け、生徒は15分ずつ全てのステーションで活動を行う。教員は教員ステーションを受け持ちながら、他の2つのステーションで問題が発生した際のサポートも行う。



3つのStationの様子



Teacher's stationの様子



Cromebook stationの様子



iPad stationの様子

(2) 評価の方法

上記パフォーマンス・タスク(Interview Test, Conversation Test, Presentation, Poster Session等)、プレゼンテーションやレポートなどの提出課題、主体的な授業への取組、課題の提出状況、期末テスト(GIの授業での活動全般で学んだ内容を問うリスニングテストと、パフォーマンス・タスクの内容に関連したライティングテスト)を総合的に評価した。



Presentationの様子



PresentationでのQ&Aの様子



Opinionの様子



Conversation testの様子



Poster Sessionの様子



Interview with adultsの様子



Tolerance Lessonの様子

(3) Conversation Test

それぞれのトピックごとにConversation Testを実施した。主に生徒同士がペアで与えられたテーマについて会話し、英語科教諭とALTが評価した。ペアは直前にランダムに組み合わせた。1学期・2学期は、一人がまず45秒話し、次にもう一人が45秒話し、残りの1分30秒をteam talk timeとして会話する時間とした。3学期は、区切らずに3分間のオープンな時間を与え、2人での会話を採点した。

また、後述のTeaching Assistant(以下TA)とConversation Testの後に、テストの内容についてさらに会話する機会を設けた。



Conversation Testの様子



テスト後のTAとの会話の様子

(4) Teaching Assistant

近隣の大学で学ぶ留学生(9カ国より16名)にTAとして日常的に授業に参加してもらった。前述のConversation Testの際の個別会話練習はもちろん、各パフォーマンス・タスクにおいては活動に参加し、有益な助言や質問をしてもらうなど、生徒の援助にあたってもらった。



Interview with adultsの様子



Tolerance Lessonの様子

(5) 合同授業・学校交流・シンガポール研修旅行

1月のシンガポール研修旅行での学校訪問と合同授業を年度当初からの大きな目標とした。1月のシンガポール研修旅行に向けて、全ての生徒がシンガポールについて一定の知識を持ち、課題を設定でき、かつ現地校との交流で日本や京都についての情報を発信し質疑応答に応じられるように活動を計画した。

6月、11月にシンガポールの生徒との合同授業を行った。1月のシンガポール研修旅行の前に、全ての生徒が2回の合同授業を体験した。合同授業を通して積極的にコミュニケーションを図る態度を育成できただけでなく、ホストとして学校を紹介するプレゼンテーションを行ったり、ゲスト校の学校紹介プレゼンテーション、パフォーマンスなどを見ることで、シンガポール研修旅行に向けて自ら行うべき準備への意識も高めることができた。

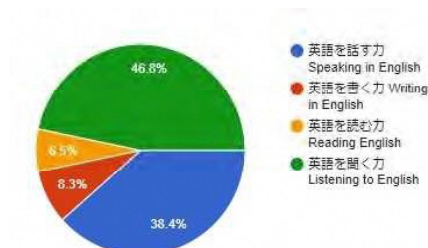
また、研修旅行終了後は、交流や研修旅行での経験を元に、グローバル化の進む国際社会で地球市民としてどう生きていくか主体的に探究できるよう活動を計画した。

3 成果

受講生徒240名を対象に、1学期の授業を振り返って平成30年7月下旬に1回、1年間の授業を振り返って平成31年2月第2週に2回目のアンケートを実施した(有効回答総数220)。その結果から、英語を積極的に使おうという意識を年間を通して91%以上の生徒に定着させることができた。また、授業のタスク設定と運用によって一定レベルの能力伸長を確保できるプログラムを今年度も継続でき、また課題の改善をしてきたことで、生徒が達成感を得ることをできたと言える。アンケート結果から分析できる成果は次の通りである。

(1) Listening Class について

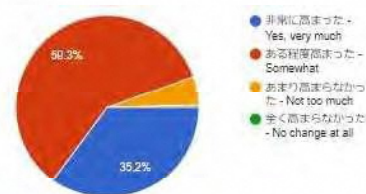
右のグラフからもわかるように、この授業での活動を通して、英語を積極的に使おうとする意識を高めることができたといえる。また、4技能をバランスよく伸長でき、特にspeakingとlisteningの能力を伸長させることができたと言える。また、1回目よりも2回目のアンケート結果が特にこのスキルが伸長していることから、様々な活動を多く経験し英語を用いる場面が増えるほど、生徒の自信につながっていると考えられる。



英語を話す力、聴く力、読む力、書く力のうち、GIの授業で最も伸長したスキルは何か、という問いに対して、聴く力が46.8%、続いて話す力が38.4%となっている。(左図参照)

3. 英語を用いて積極的に活動しようとする意識は高まりましたか。Have you raised your awareness of how to actively use English?

216 件の回答

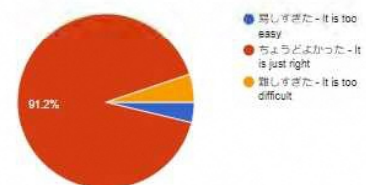


① Teachers Stationについて

教科書の難易度について、昨年度は17%の生徒が難しいと感じていたが、今年度は5.1%と大幅に減っている。また、ちょうどよいと感じていた生徒が10%増えた。昨年度から使用しているテキストに変更はないし、生徒の英語運用能力に大きな差はないことがGTECの結果からも確認できているので、上記結果は、教科書の扱い方を変えたためと断言できるだろう。今年は50分の授業中で15分のみこの教科書を使うので、1回で扱う範囲が狭まった。そのため生徒への負担感が減り、集中力も持続できた。

9. テキスト (Impact Listening 2) の難易度はどうでしたか What do you think about the difficulty of the textbook?

216 件の回答

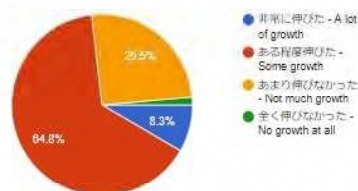


② iPad Stationについて

Listening 活動として取り組んでいるのでその効果を得られていると考えてよいと思う。特に本校ではシンガポールでの交流が英語実践の場の一つであるので、様々な英語「Englishes」を経験することも大切な活動ととらえている。そこでこの station の内容は non-native English speaker が様々なトピックについて英語で話すサイトを使用した。

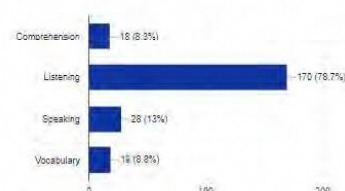
12. 語彙力の伸長についてどのように感じていますか How do you feel about the growth of your vocabulary level due to Listening Class?

216 件の回答



13. iPadを使用したリスニング演習を通して最も伸びたと思うスキルを以下から選んでください。Which skills do you think you have improved by working at the iPad station? (You can select more than one answer).

216 件の回答



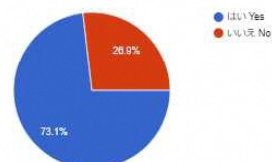
さらに語彙力を伸長するために、来年度は難易度の高いコンテンツを使用する予定である。

③Cromebook Stationについて

今年度始めて導入した演習方法であるが、生徒はすぐに慣れ、72%の生徒が発音が改善されたと答えている。約28%の「いいえ」と答えた生徒は取り組む姿勢に問題がある可能性がある。来年度はより多くの生徒がこの演習方法のメリットを実感できるよう見直したい。

14. クロムブックを使用した演習で英語の発音がよくなったと思いますか？ Do you feel like the Chromebook station has helped to improve your pronunciation?

216 件の回答

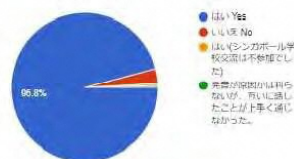


(2)内容の有効性

合同授業・学校交流・シンガポール研修旅行とGIの授業で修得したスキルを実践する場を設けているが、その内容が実践的であるかどうかは重要である。生徒のアンケートによると96%の生徒が役に立ったと答えており、この点では成功していると考えてよい。

17. 授業で習ったことや準備したことが役に立ちましたか。 Was what we did in class and what you prepared for useful for the exchange?

216 件の回答



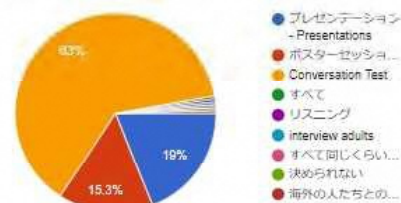
(3)Conversation Testの効果

年間を通して行っているConversation Testの授業の効果は、今年度も明らかであった。

「プレゼンテーション、ポスターセッション、Conversation Testのうち、英語コミュニケーション能力を身に付けるのに最も役に立ったと思うのはどれですか」という質問に対して、Conversation Testと回答した生徒が63%と最も多かった。また、「Conversation Testについてどう思いますか」という質問に対して、「大変良い学習方法だと思う」「良い学習方法だと思う」と回答した生徒は、93.1%であった。その理由としては以下のようなものを挙げている。

25. 上記の3つのうち、英語コミュニケーション能力を身に付けるのに最も役に立ったと思うのはどれですか。その理由も教えてください。 Which of the above three things do you think was the best activity for acquiring English communication skills?

216 件の回答

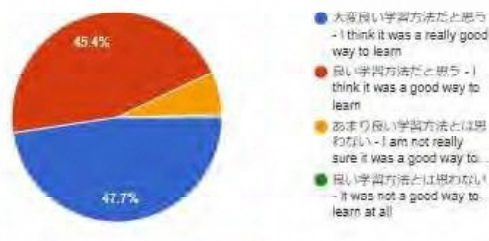


・実際の会話に近い形の活動だったので、日常会話や日常のシチュエーションに対応した英会話力をつけるという意味で役に立つと思った。また、言葉だけでなく、話をする態度、相手の話を聞く態度、適切な質問を考えて会話を続ける力など多様な方面の力を伸ばすのに効果的だと感じた。

・今の英語力を実感するととてもいい機会になった。言いたいことが英語で表現できずもどかしい気持ちをしたこともあったがそれが逆に英語学習に対するモチベーションを高めてくれた。また質問するためには相手の話をよく聞く必要があるので効果的だと思う。

24. Conversation Test (ペアで会話するテスト) についてどう思いますか。 What did you think about all of your Conversation Tests (when you talked in pairs)?

216 件の回答



・二人で会話することは、すごく難しいし緊張するけれど、このテストのおかげで、シンガポールに行った時に会話が聞きとれなくてすごく困ったということはないし、英語で会話することに抵抗がなくなったから、すごくいい経験だったと思う。

英語でコミュニケーションをとる上で「聴く力」「即興で英語を発話する力」などが必要であると認識しており、この活動の有効性を挙げている。

(4)Teaching Assistantの活用について(Teaching Assistantによる援助の効果)

「Teaching Assistantが授業に参加してくれることについてどう思いますか」という質問に対して、「大変良い学習方法だと思う」「良い学習方法だと思う」と回答した生徒が98.2%であった。昨年度同様TAによる援助がspeaking能力の伸長に大きく影響しているといえる。また、以下の生徒の感想から、異文化を理解し尊重しよ

うとする態度の変化、グローバル社会の一員としての生き方の探究に対しても大きな効果があったといえる。TAについての生徒の感想の一部は次の通りである。

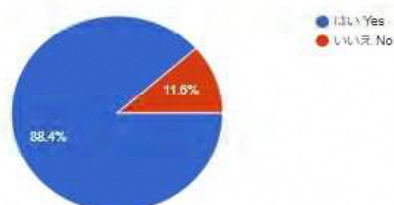
- ・異なる文化を持つ人の話を直接聞くことで、新しい考えや価値観を知ることができたから。
- ・声や話し方が人によって違って、実際に英語で話すための実践的な練習になったと思った。
- ・授業中に CD で聴くアメリカ英語、イギリス英語以外の発音の英語に慣れ、様々な国のなまりのある英語のリスニング力やコミュニケーション力を高められたと思う。

(5) 交流を通しての意識・態度の変化について

①「交流によって、英語を使って海外の人とコミュニケーションをとることに積極的になったと思いますか」という質問に対して88.4%が「はい」と回答した。また、「あなたは今後、海外生徒との交流や英語合同授業に参加したいですか」という質問に対しても93.5%という過去最高の生徒が「はい」と回答している。毎年高い割合で生徒は意識、態度の変化を実感している。受講者が海外の生徒との交流を通して、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度を身につけられているのは素晴らしい。

19. 交流によって、英語を使って海外の人とコミュニケーションをとることに積極的になったと思いますか
Do you think you have improved your attitude in communicating in English with people from other countries?

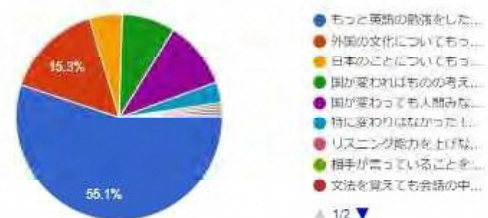
216 件の回答



②「交流をする前と後であなたの意識はどう変わりましたか」という質問に対して「もっと英語の勉強をしたいと思うようになった」という生徒が55.1%いた一方、「外国の文化についてもっと知りたいと思うようになった」「国が違って人間みんな同じだと思うようになった。」と答えている生徒が15.3%・10.6%と占めており、言語をツールとして人とつながりを求めている生徒が増えていることがわかる。

20. 交流をする前と後であなたの意識はどう変わりましたか。最もあてはまるものを1つ選んでください
How did your feelings change after having the exchange? (Choose as many as you want)

216 件の回答



4 課題と展望

(1) 今年度のアカデミックラボの英語での発表で、年々、Q&Aを英語でスムーズに対応できるようになっているという評価を得た。GIの授業で即興的発話力の育成に焦点を当て、あらゆるパフォーマンスタスクにQ&Aの評価を入れている効果が現れてきていると考えられる。

(2) パフォーマンス・タスクのルーブリックを外部講師に共有し、改善のアドバイスをもらい、このアドバイスを参考に改善し、よりわかりやすく使いやすくなった。

(3) 今年度から新しく始めたListening classでの取組でH29年度の課題はある一定改善されたが、コンテンツを来年度はさらに吟味し、生徒の実力により即した中身の充実したものにしていく必要がある。

(4) TAが重要な役割を果たしているが、SGH指定の5年目を終え財源がなくなるので、継続してこのシステムを維持するにはそれを保障するなんらかの工夫が必要となる。

(5) Google ドライブに加え、今年度はGoogle classroomも使用しているが、担当教員全員が同じレベルでシステムの運用について理解できているとはいえない。必要なアカウント管理などについての技術を教科担当者が研修する必要があることは認識しているが、なかなか実現していない。

イ 情報の科学（情報・2単位）

1 ねらい(仮説)

前半は、情報社会と情報モラル、情報通信ネットワークなどの情報理論を学習するとともに、ワープロソフトを利用して文書作成、表計算ソフトを利用して表やグラフの作成、プレゼンテーションソフトを利用して発表資料の作成、プログラミングなどのICTスキルを育成する。また、ビブリオバトル(本の紹介)を実施することにより、プレゼンテーション能力を育成する。

後半は、前半の授業で身に付けたICTスキルを生かし、与えられたテーマの中から、自ら課題を設定し、「課題研究」を実施する。

これらの活動によって、レポートをまとめたり、データを集計したり、わかりやすい発表資料を作成してプレゼンテーションをしたりする能力を身に付けることができるとともに、2年生以降で課題探究学習を行う上での基礎を育成することができると考える。

2 概要(実践)

実施時期	内容
4月～12月	・プレゼンテーションソフトの利用 ・表計算ソフトを用いた表、グラフの作成 ・ワープロソフトを用いた文書作成 ・ビブリオバトル ・プログラミング ・情報社会と情報モラルについて ・デジタル情報と情報の活用について ・情報通信ネットワークについて
12月～3月	・課題研究 SDGs「世界を変えるための17の目標」の中から興味のあるものを1つ選び、それに関連する問いを立て、仮説を設定し、検証を行う。 ・課題研究クラス内発表会 ・課題研究全体発表会

授業については、週2時間で実施し、そのうち1時間はティームティーチング形式で行った。

3 課題研究について

課題研究については、最終目標をSDGs「世界を変えるための17の目標」の中から興味のあるものを1つ選び、それに関する研究テーマ・問い・仮説の設定・検証を行うこととし、次のように大きく四段階に分けて授業を行った(時間数はクラスによって発表を含めて12～17時間)。

第一段階	情報の収集・整理 研究テーマの設定 研究テーマ発表	・SDGs「世界を変えるための17の目標」の中から興味のあるものをグループで1つ選択 ・選んだ目標について、知っていること、知りたいこと、調べてわかったことを整理 ・マンダラート(3×3マスの表の中心にテーマを記入し、その周囲に関連するキーワード等を記入)で情報を整理し、研究テーマを決定
第二段階	問いの作成と整理	・研究テーマに関する疑問文をいくつか作成し、最も興味のあるものを1つ選択 ・選んだ問いを小さな問いに分解
第三段階	仮説の設定と検証	・仮説の設定と調査の実施
第四段階	まとめ	・自分たちの主張・意見とその理由・根拠、予想される反論、反論への反論についてまとめ、発表資料(スライド)の作成

以上の段階を経て、まず中間発表を行った(時間数の少ないクラスでは、2～3グループでお互いに発表し合う形式とした)。中間発表では、見ている生徒はコメント用紙を書き、それを発表者にフィードバックした。それをもとに内容等を修正し、クラス内発表に臨んだ。クラス内発表は、各グループ発表5分、質疑応答3分程度で行い、見ている生徒には内容・構成、スライド、図表、発表姿勢、話し方の5つの観点で相互評価をさせた。この結果をもとに全体発表会でのクラス代表を1グループ選出した。以下の写真はクラス内発表の様子である。



4 全体発表について

クラス内発表で選出した各クラスの代表グループにより、1年生(8クラス)の生徒全員を集め、合同発表を実施した。

各クラス代表グループのテーマは以下のとおりである。

	テーマ
1組	教育が将来に及ぼす影響とは
2組	森林破壊について
3組	日本と海外の働き甲斐の違いとは
4組	貧困と NGO の活動
5組	住めるまち、住めない街。
6組	海洋汚染
7組	日焼け止めと環境汚染～海の豊かさを守ろう～
8組	貧困とまちづくり

5 検証

(1) 成果

今年度も昨年度と同様にSDGs(持続可能な開発目標)における17の目標から自分たちが興味を持ったものについて研究するという形式で行った。まずどの目標について研究したいかを絞ることによって、テーマが焦点化され、課題研究の質の向上につなげることができたのではないかと考えている。昨年度の課題であった中間発表については、時間数の関係で小グループ内で行うにとどまったクラスもあるが、お互いに評価し合う場面をつくり、自分たちだけでは気づけなかった課題に気づくことができる場面をつくることができた。

また、2月下旬に情報の科学の授業を受けている生徒309名を対象にアンケートを実施した(欠席者に対しては実施していない)。

「ICTスキルに関して、授業を受ける前と比較してどうか」という問いに関して、「とてもできるようになった」または「できるようになった」と回答した生徒の割合がワープロソフトについては92%、表計算ソフトについては90%、プレゼンテーションソフトについては93%を占めており、1年間の授業を通して、生徒は一定のICTスキルが身に付いたと実感しているようである。

「前半の授業で習得したICTスキルを課題研究に活用することができたか」という問いに関しては「大いに活用できた」または「活用できた」と回答した生徒の割合がワープロソフトについては92%、表計算ソフトについては78%、プレゼンテーションソフトについては96%を占めており、生徒の感想として以下のように肯定的なものが多く見られ、単にICTスキルを身に付けるだけでなく、活用する能力も育成できたといえる。

- ・課題研究でスライドを作る際に一年間で学んだ技術を生かすことができて良かったです。
- ・プレゼンテーションやビブリオバトルが、学んだ機能を実際に使う機会になり良かったです。
- ・自分で調べてまとめるときに、自分の必要な情報を調べる能力と、それをパワポとかにまとめ

る力が上がっているなと感じることが多くあった。

「自身のプレゼンテーション能力について、授業を受ける前と比較してどうか」という問いに対しては、「とても向上した」または「向上した」と回答した生徒の割合がそれぞれ76%を占めており、生徒の感想として以下のように肯定的なものが多く見られ、多くの生徒がプレゼンテーション能力の向上が実感できているようである。

- ・特にプレゼン能力は情報の授業を通して飛躍的に向上したと感じる。
- ・時間通りに発表を終わらすのが難しかったけれど、楽しんでプレゼン出来るようになりました。

「課題研究は自ら課題を設定し、それを解決する能力を高めるという観点からどう思うか」という問いに関しては、「大変良い学習方法である」または「良い学習方法である」と回答した生徒の割合が99%を占めており、生徒の感想として以下のように肯定的なものが多く見られた。

- ・課題研究の時間が一番楽しかった。協調性が身についたしリーダーシップも発揮することができた。
- ・課題研究を行う上でチームで協力して、時には「どうしてそう思うの？」といった意見交換をすることが大切だと学んだ。
- ・SDGsの学びでは、自分の調べたトピックだけでなく、ほかのグループの発表を聞いて理解が深まったし、新しい知識になった。関心を持てた。
- ・一つの課題について問いを立て、そこから枝分かれするように再び新しい問いを設定すると、当初では思いつきもしなかったような疑問がいくつも浮かんで面白かった。次年度のラボ活動にも活用したい。
- ・特に課題研究は、自ら課題を設定してその問題について解決する力を高めることができ、来年度のアカデミックラボにも役立つ力がついたと思う。
- ・班の人と一緒に課題を設定して解決策を探すことで、与えられたことをこなすだけでなく、自分で考えて行動する力が身についたと思う。
- ・最後の課題研究では批判的に考える力も付いた。
- ・プレゼンテーションをわかりやすくするには、話すのが上手であることも大事だけど、スライドが面白くわかりやすかったり根拠がしっかりしていたり論の展開がうまくできていたり…。さまざまな工夫が大切なんだと感じた。

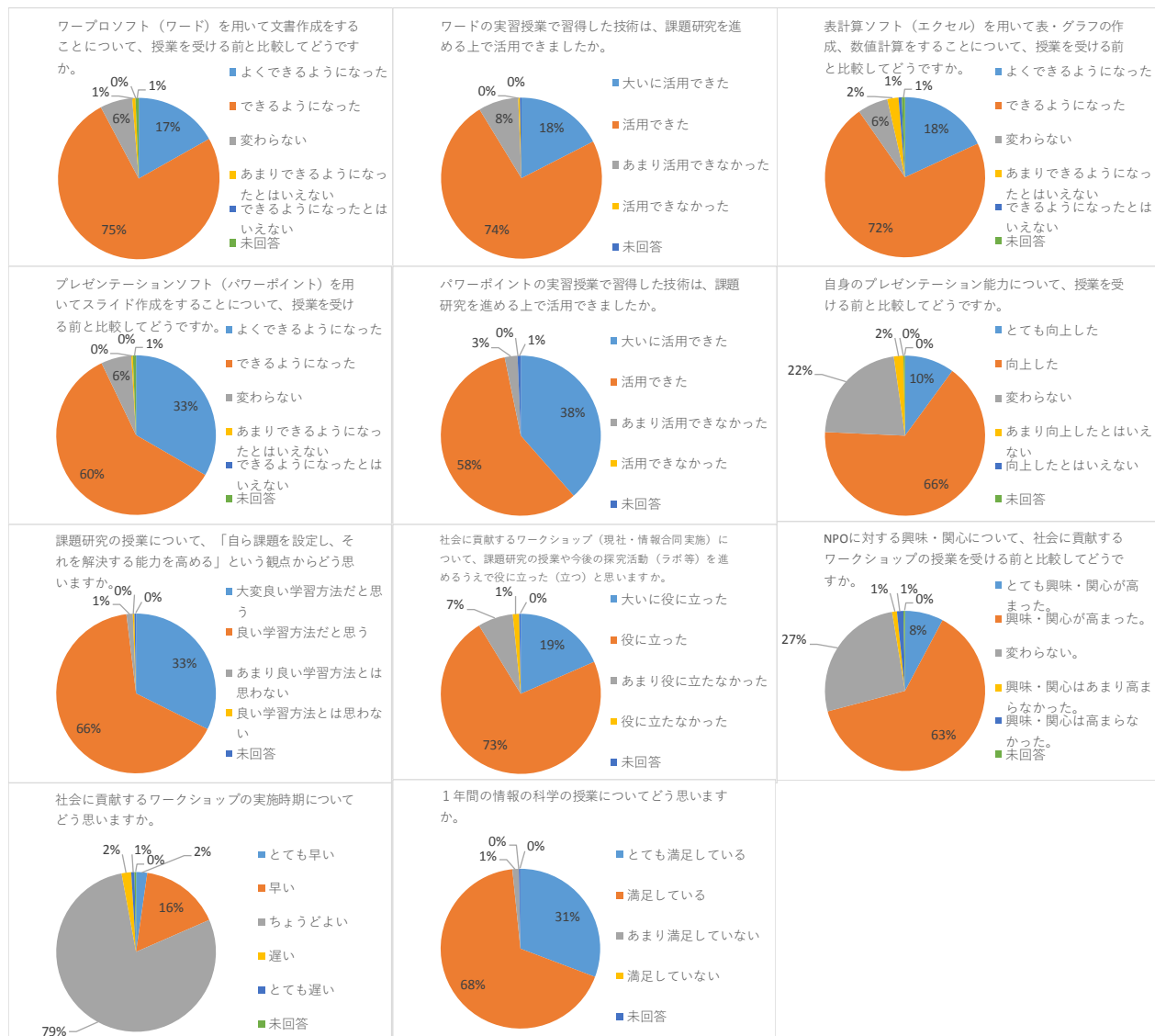
「1年間の情報の科学の授業についてどう思うか」という問いに対しては、「とても満足している」または「満足している」と回答した生徒の割合は99%を占めており、2年生以降の課題探究学習を行うにあたっての基礎ができたといえる。課題研究の授業に対する生徒の感想としては以下のようなものがあった。

- ・これから情報技術が大事になってくると思うので、非常に有意義だった。スライドは相手を思いやって作るということを学んだ。個人的にもっと情報の時間を増やしてほしいくらい。
- ・まだエクセルには少々不安はあるものの、十分な情報活用能力が身につけられたと思います。
- ・コンピューター技術だけでなく、少しでも分かりやすく人に伝えられるように文章を作成したり能力、問いを深くまで掘り下げていける探求心までつけられたのでとても実りある1年に出れました。
- ・現代に生きている中で必要な知識や、問題に対する解決方法などが知れてとても有意義な活動だったと思います。また、ここで学んだことをこれから活かしていこうと思いました。
- ・表計算やスライドづくりなどのパソコンの基本的な活用方法を知れたと思う。またそれらの能力が入学する前と比べて著しく上達したと思う。

(2) 課題

課題研究の授業において、調べたことをまとめるだけに終始しているグループが見受けられる。そのため、問いに対する仮説を立て、それを検証する場面において、さまざまな手法を用いてもうひと工夫し、生徒が自分たちの主張を導けるような手立てを模索していきたいと考えている。

また、地歴公民科と合同で「社会に貢献するワークショップ」を7月に実施した。アンケートの結果92%の生徒が今後の課題探究学習を進める上で「大いに役に立った」または「役に立った」と回答している。実施時期について、昨年は13%の生徒が「とても遅い」または「遅い」と回答していたが、今年は18%の生徒が「とても早い」または「早い」と解答しており、来年度も継続して実施するならば実施時期に関して検討の余地があるであろう。



(3) 5年間の総括

教科情報の授業で課題研究を実施し始めて最初の2年間は本校の近くにある「嵯峨嵐山の課題」をテーマに課題研究を行った。2年間実際に行ってみて、ある程度の成果はあったものの、扱う内容が複数のグループで重複することがあった。そこで3年目からは「ESD（持続可能な開発のための教育）」をテーマに課題研究を行ったところ、内容の重複についてはある程度解消されたが、扱う範囲が大きすぎて、深く研究することが困難であった。そうした課題を踏まえて4年目からはSDGs「世界を変えるための17の目標」から興味のあるものを選んで課題研究を行うという形式に変更した。5年間実施してみて、課題研究というのは生徒が主体的に進めていくものであるが、最初はある程度テーマを焦点化したり、研究テーマや問い、仮説を設定するための手立てを用意したりすることが必要であると感じた。

ウ アカデミックラボ（総合的な学習の時間・2単位）

1 ねらい

SGHの主たる研究指定科目であり、「京都グローバルスタディーズ(KGSⅡ)」に位置づけられている。クラスを超えた1つの研究集団、「ラボ」において、本校のテーマである「地域」と「環境」の下に「生活環境」「文化環境」「自然環境」「国際環境」に繋がる内容を課題研究し、「課題設定・解決力」「表現力」「地球規模で考える力」「英語・異文化コミュニケーション力」「リーダーの資質」を培うことを目標とする。

2 平成30年度アカデミックラボの進行について

平成30年 4月13日（金）ラボ開講時に京都大学博物館准教授 塩瀬 隆之 氏 講演会を実施
 4月～8月 探究テーマを探し、調査を開始
 9月～10月 各ラボで中間発表会を実施
 10月～1月 課題研究
 平成31年 1月～2月 ポスター発表を準備
 2月8日（金）アカデミックラボ課題研究発表会において日本語によるポスター発表を実施
 2月～3月 課題研究の要旨を英訳・日本語論文を作成
 （その際、文化・言語の異なる相手に説明することを留意した英訳に努める。）

※来年度、「課題錬成」で、研究内容を英語で口頭発表し、質疑応答に答え、提言を行う機会として、「SAGANO GLOBAL PRESENTATION」を開催

3 ラボ活動について

(1) 各アカデミックラボの概要

アカデミックラボでは、SGH対象生徒全員が各ラボ(研究グループ)に所属して、課題研究に取り組んだ。各ラボでは、テーマ決定や中間発表の際にチームでディスカッションすることを大切にしている。なお、生徒と教職員の双方からの研究データ及び、論文等の共有のために、Google ドライブを全ラボ共通で使用する。今年度は次の17種類のラボを開講し、全教科でラボ活動を支えることとなった。

ラボ名	テーマ	担当教科
「京・平安文化論」	女流文学を読み解き、現代の日本人に通じる日本人の精神を探究	国語科
「躍動する時代ー中・近世ーの文芸」	サムライや町衆の通じた作品により「日本のこころ」について学ぶ	国語科
「日本文学から見る近・現代」	人間存在を取り巻く環境としての社会の在り方を文学作品に見る	国語科
「数学活用ラボA・B」	数学を活用した環境に関する問題を解決する方法の探究	数学科
	数学を活用した地域・社会に関する問題を解決する方法の探究	数学科
「理科ラボA」	自然現象や地域の自然についての探究	理科
「理科ラボB」	自然現象や地域の自然についての探究	理科
「理科ラボC」	地域の自然、世界的な環境について文献調査及び実験・観察を通して探究	理科
「法学ラボ」	法的なものの考え方を理解し、法律や訴訟にもとづく課題解決を探究	地歴・公民科
「ソーシャル・ビジネスラボ」	身近な地域社会の課題解決をビジネスの視点から研究	地歴・公民科
「国際関係ラボ」	模擬国連の手法を用いて、国際関係を考え、今後の日本の在り方を研究	地歴・公民科 英語科
「京の食文化」	京都の伝統文化を食文化の視点から探究	家庭科
「Global Issues」	世界の今を考え、課題について考え、高校生の視点から解決策を研究	英語科

「グローバル環境」(SSH指定)	グローバルな視点から持続可能な京都の未来の環境を考察	英語科
「京の文化財」	京都の文化財を芸術の視点から理解・探究	芸術科
「芸術工学」	社会と環境のデザインをテーマに未来を切り拓くような解決方法を考察	芸術科
「地域とスポーツ」	日本独自の身体操作や合理的な身のこなしについて探究	保健体育科

(2) 課題研究テーマ

No.	ラボ名	タイトル	分野
1	京・平安文化論	ちゅう源氏と巡る源氏物語京都スタンプラリー ～文化遺産から文化資産へ～	文化環境
2	躍動する時代 ー中・近世ーの 文芸	セツワカラナニガワカル？ 知らばなほをかし！	文化環境
3		古今恋愛事情 ～幸せならOKですか？～	文化環境
4	日本文学から見る 近・現代	「恋の無限性」	文化環境
5		#SNSが匿名性を手に入れた結果	文化環境
6		文学における「新しさ」のひろがりについて	文化環境
7	数学活用A・B	お弁当を売りたい!! ～売り上げを伸ばすための最適な割引とは～	生活環境
8		太陽光パネルの性能比較による設置枚数の提案	生活環境
9		大規模停電を懐中電灯で乗り切るには	生活環境
10		ひさしの最適な設置角度と形状とは	生活環境
11		VALUE TESTで満点を取るには	生活環境
12		シン・サガノセン ～座席配置で考える嵯峨野線の新型車両～	生活環境
13	理科A	嵯峨野式風力発電～室外機とともに～	自然環境
14		音発電	自然環境
15		カイワレ成長記録～酸と植物の関係～	自然環境
16		デュビアの右往左往 ～昆虫に利き手はあるのか～	自然環境
17	理科B	セッケン作りに適する油とは!? ～石鹼使用量削減を目指して～	自然環境
18		安全なしゃぼん玉を作ろう!!	自然環境
19		パパインスーパーファミリー ～タンパク質分解酵素の働き～	自然環境
20		#葉緑体と戯れたい	自然環境
21	法学	百歳時代、どう乗るか。 ー敬老乗車証制度のこれまでとこれからー	生活環境
22		MISSION 限界集落を阻止せよ	生活環境
23		みんなの京都、みんなの民泊	生活環境
24		私たちはどう伝えるか ～外国人観光客に災害情報を提供するには？～	生活環境
25	ソーシャル・ ビジネス	手ぶらで帰ろう	生活環境
26		アメリカに負けるな!? ～貯蓄から投資へ～	生活環境
27		物流を止めるな ～災害支援物資保険～	生活環境

28		子ども“シャイン”プロジェクト ～仕事が照らしだす未来～	生活環境
29		シャッターを閉めるな!! —赤字店舗再生へ—	生活環境
30		シャッターを閉めるな!! —地域の人々のために—	生活環境
31	国際関係	With LGBT —ヨーロッパのLGBTに関する政策を例にとって—	国際環境
32		読めるけど、よめない。 —教育が生む読解力の差—	国際環境
33		Swedenize! —Clean & Green—	国際環境
34		ただし服薬 つながる命 ～おくすりきちんとのめるかな～	国際環境
35		هل تستطيع قراءة هذا؟ ～ムスリム女性の識字率の向上～	国際環境
36	京の食文化	気づいてほしい！天然だしの魅力	生活環境
37		行事食ゼミ ～ギョギョギョッ！～	生活環境
38		和菓子復興プロジェクト	生活環境
39		和食って料理だけ？ ～知られざる魅力を探せ！～	生活環境
40		劇的！和食のビフォーアフター！	生活環境
41	Global Issues	STOP！拡散！フェイクニュース！	国際環境
42		はじめてのけんけつ	生活環境
43		レキシを止めるな！～日本の伝統～	国際環境 生活環境
44		Ai1 Ai2 ～犬猫の命を救うために～	生活環境
45		Teriyaki ～ことばの交換留学～	国際環境
46	グローバル環境	日本庭園をもっと身近に	自然環境
47		そうだ 広沢行こう	自然環境 文化環境
48		嵯峨野巡りの始発点	文化環境 生活環境
49		知られざる奥嵯峨の魅力「苔」	自然環境 文化環境
50		嵐山のつながり ～地震に備えて～	生活環境
51	京の文化財	おくの路地みち～これからの路地～	文化環境
52		茶室記～子曰く、里は仁なるを美しと為す～	文化環境
53		縁の下のちからもち！～こんなところに文化財～	文化環境
54		京都弁取扱説明書	文化環境
55	芸術工学	ま・ん・ほ・お・る manhole	生活環境
56		世界一受けたい黒板授業 ～チョーク文化をつなぐ～	生活環境
57		サガノのゴミ箱大作戦	生活環境
58		避難所を変える	生活環境
59	地域とスポーツ	スポーツの効果 半端ないって！！ そだね～	生活環境

(3) アカデミックラボにおける連携

全てのラボが大学等と連携して課題研究を行った。以下が本校が外部団体と行っている連携の型である。

①大学学部・大学院生型

「Global Issues」、国際関係 International Relations
主な連携先 京都大学、同志社大学、立命館大学、京都教育大学

②大学教授等型
「躍動する時代ー中・近世ーの文芸」「日本文学から見る近・現代」・「数学活用A/B」・「理科A/B/C」・「ソーシャルビジネス」・「京の食文化」・「国際関係」・「グローバル環境」・「京の文化財」・「芸術工学」・「地域とスポーツ」
主な連携先 京都大学、大阪大学、京都府立医科大学、京都府立大学、京都教育大学、立命館大学、京都市立芸術大学、関西大学、京都学園大学、嵯峨美術大学、大阪経済法科大学、九州共立大学

③関係機関等型
「法学」・「ソーシャルビジネス」・「グローバル環境」・「京・平安文化論」・「国際関係」
主な連携先 日本政策金融公庫、京都市環境政策局、京都弁護士事務所、嵐山保勝会、堀場製作所、シャチハタコーポレーション、SHIMAZUコーポレーション、京都市交通局、京都バス、京都府茶協同組合

(4) アカデミックラボ課題研究発表会

日 時: 平成31年2月8日(金) 午後1時15分～午後4時00分
 会 場: 京都府立嵯峨野高等学校 視聴覚教室・体育館
 対 象: 京都府内の高校関係者、全国のSGH校・アソシエイト校関係者及び教育関係者、本校保護者
 内 容: 12:40～13:10 受付
 13:15 開会
 13:25 説明 「本校のSGHの取組について」
 14:05～14:10 発表会日程説明
 14:25～16:00 アカデミックラボ課題研究発表会(ポスター発表)

京都こすもす科共修コース及び普通科生徒245名が、59グループに分かれてポスター発表を実施した。ポスター発表については、1回あたり説明6分と質疑応答5分で構成し、計6回実施した。第1学年生徒240名と第2学年専修コース生徒81名、高校・大学関係者18名及び保護者32名が見学した。



(5) 校内体制と協議・共有化について

平成27年4月に発足し現在に至っている「アカデミックラボ担当者会議」の役割として、「①探究活動における目的の共有、②探究活動の内容交流、③全ての教職員への発信、④担当者間の連絡調整」を挙げている。日々の連絡調整に終わらず、課題研究の内容を議論する場にするために、メールによる担当者間の連絡体制を徹底して時間を省いたり、17ラボの59チーム全体への伝達事項は全体アセンブリーを活用して、周知徹底してきた。この5年間で培った経験やノウハウを今後全校そして他の学校に伝える研修会等を多く持ちたい。今年度も、3月に「アカデミックラボ担当者会議」の評価総括会議を実施し、年度末の職員会議でも報告し、次年度以降のラボ活動、ひいては新学習指導要領の「探究的な学習の時間」に繋げていく予定である。

(6) 評価等の研究について

評価等の研究について、京都大学大学院教育学研究科との連携をしている。ラボ毎に4月のラボ活動開始時に生徒に評価方法(ルーブリック)を示し、指導を行ってきた。そして、学年末の評価を文書で作成し、今年度の評価を行った。次年度以降もこの評価を元に、探究活動を評価していきたい。

4 アンケート結果について

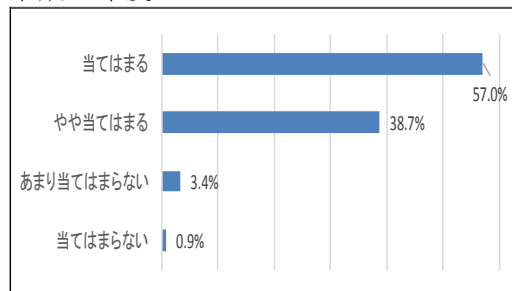
2月8日に実施したアカデミックラボ課題研究発表会の終了時に1年生と2年生全員にアンケートを実施した。

(1) 2年生の回答

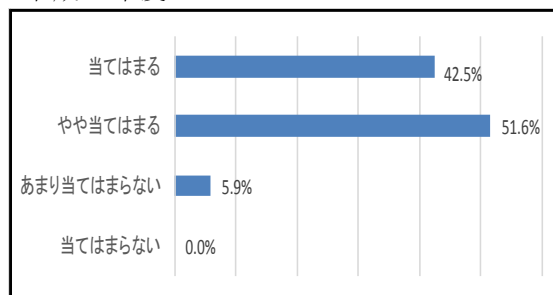
＜1年間のアカデミックラボでの活動を振り返って＞

自分たちで主体的に考え、課題を設定し、研究していくことができた。

平成29年度

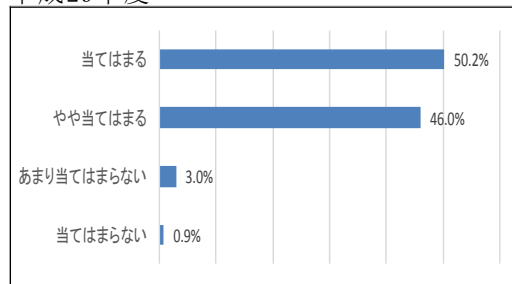


平成30年度

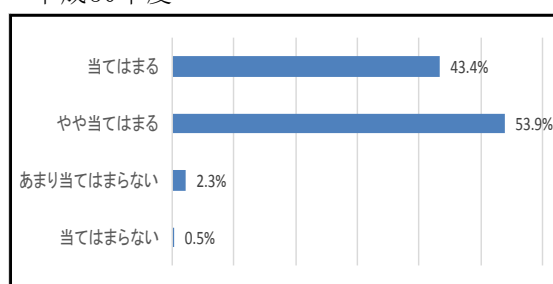


課題研究を通して、考える力を身につけることができた。

平成29年度

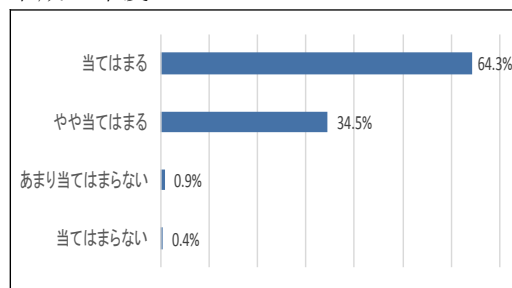


平成30年度

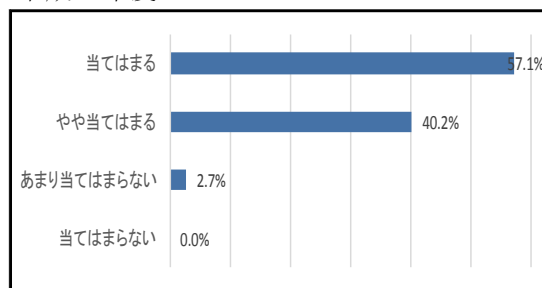


チームでの協同作業を通じ、ひとつのものを作り上げ、発表することができた。

平成29年度

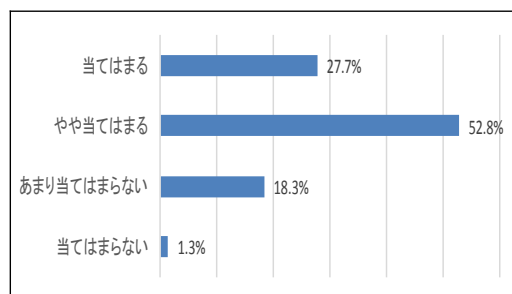


平成30年度

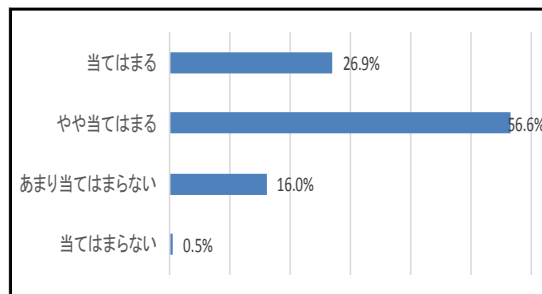


質問に対してきちんと答えることができた。

平成29年度

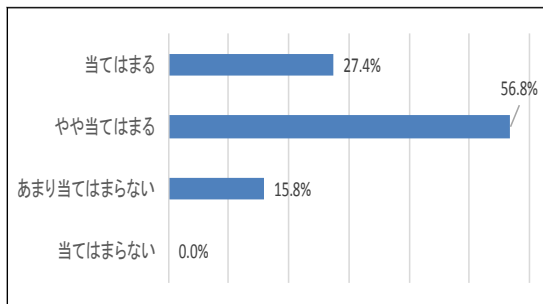


平成30年度

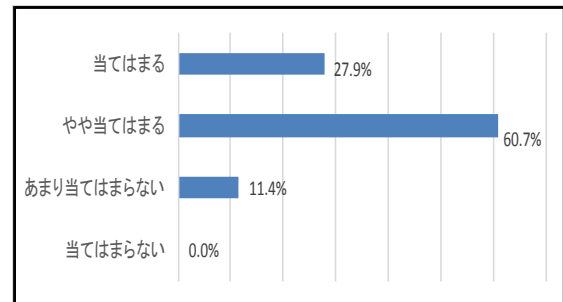


伝えたい内容をうまくプレゼンテーションすることができた。

平成29年度

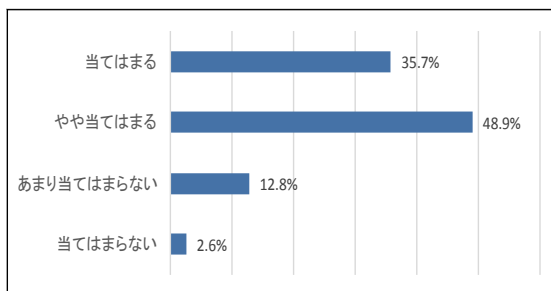


平成30年度

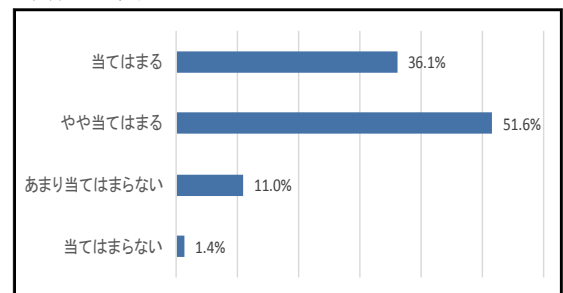


研究内容に満足している。

平成29年度

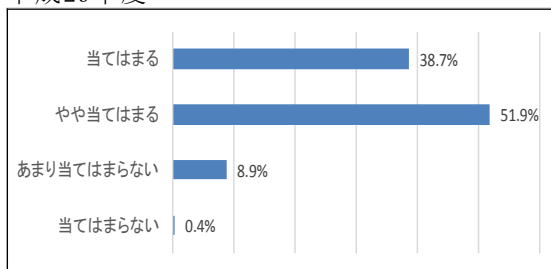


平成30年度

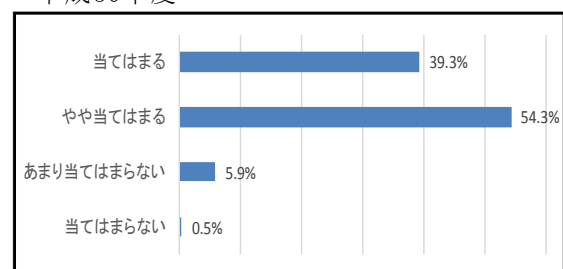


全体として、達成感・満足感を得ることができた。

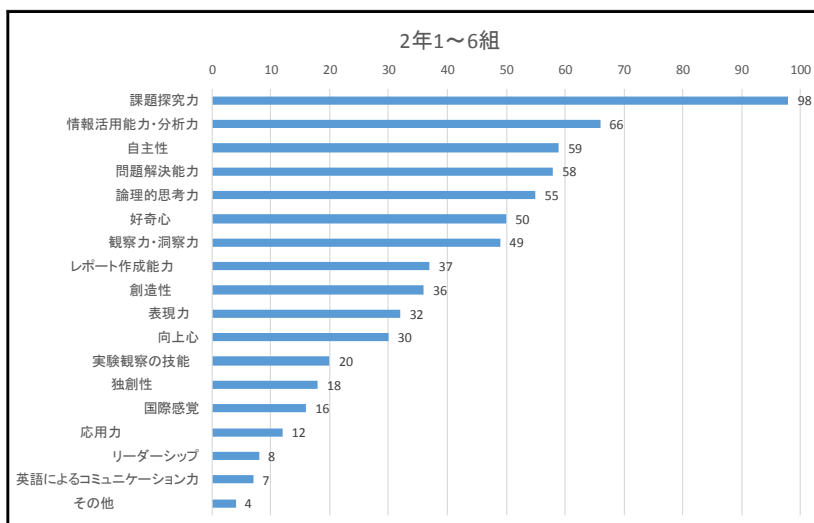
平成29年度



平成30年度



〔この1年間に伸長したと思われる力〕



上記のように、「自分達で主体的に考え、課題を設定し、研究できた」には平成30年度94.1%（平成29年度95.7%、平成28年度91.3%、平成27年度91.2%（平成28年度報告書参照以下同じ））、「課題研究を通して、考える力が身についた」には、平成30年度97.3%（平成29年度96.2%、平成28年度93.3%、平成27年度93.5%）、「チームでの協同作業」は、平成30年度97.3%（平成29年度98.8%、平成28年度95.8%、平成27年度94.1%）の肯定的な回答があり、それぞれ昨年度並の高い水準を維持する傾向が見られた。また、昨年度大幅に上昇した「質問にき

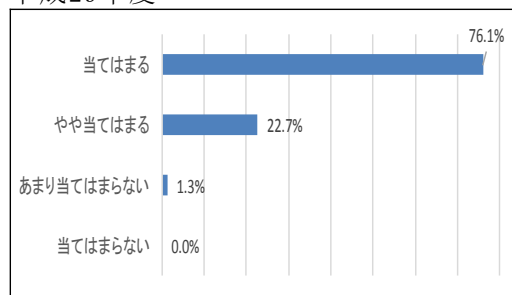
ちんと答えることができた」の項目では、平成30年度83.5%（平成29年度80.5%、平成28年度80.4%、平成27年度69.0%）の肯定的回答があり、一昨年度11.4ポイントの大幅な上昇がみられた状態が今年度さらに3ポイント上昇している。質疑応答での達成感や生徒の課題研究の取組と研究内容の深化の影響も受けていると考えられるので、5年間の取組において大きな成果であると言える。「研究内容に満足」も平成30年度87.7%（平成29年度84.6%、平成28年度80.3%、平成27年度77.4%）、「全体として、達成感・満足感」は平成30年度93.6%（平成29年度90.6%、平成28年度86.6%、平成27年度83.3%）であり、それぞれ3.1ポイント、3ポイント上昇している。「うまくプレゼンできた」は、平成30年度88.6%（平成29年度84.2%、平成28年度87.5%、平成27年度81.5%）で、昨年度よりは若干の上昇が見られた。限られた時間の中で発表の準備を行う中で、同じく研究指定科目であるGlobal Interactionの手法のポスターセッションを練習に取り入れることで、効果的なプレゼンを模索してきたことも、上記の改善の一要因となっていると考えられる。この1年間で伸ばしたのものには、「課題探究力」「情報活用能力・分析力」「自主性」が上位3位に挙げられた。

(2) 1年生の回答

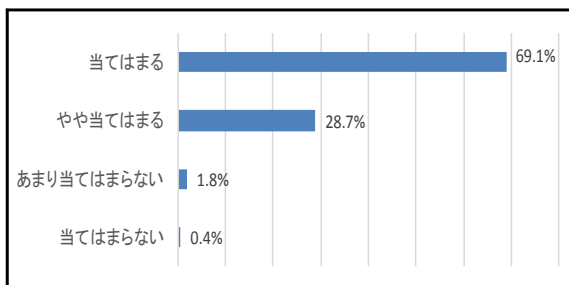
＜アカデミックラボ課題研究発表会を見学して＞

今回の発表会を有意義と感じた。（参加してよかった。）

平成29年度

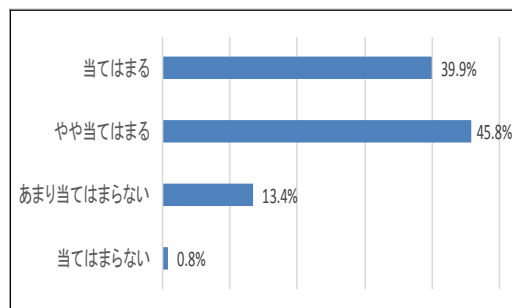


平成30年度

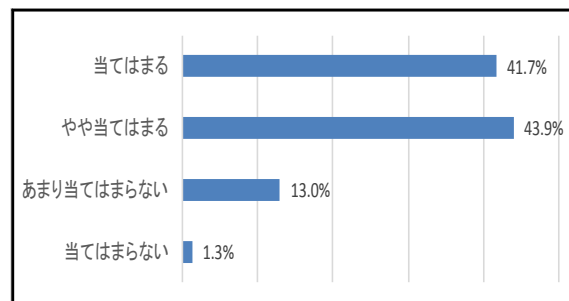


今日のような発表会で自分も発表したいと思った。

平成29年度

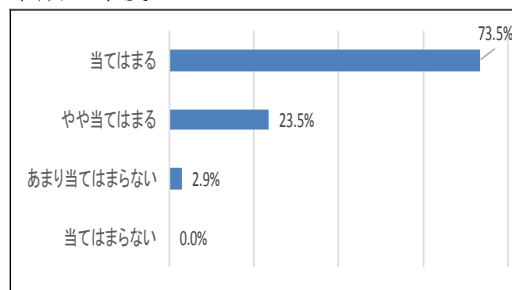


平成30年度

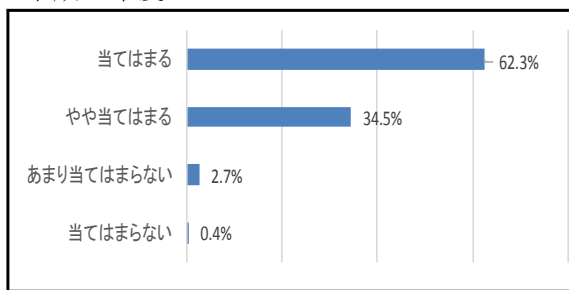


各ラボでの発表は、今後自分が研究・発表する際の参考になった。

平成29年度

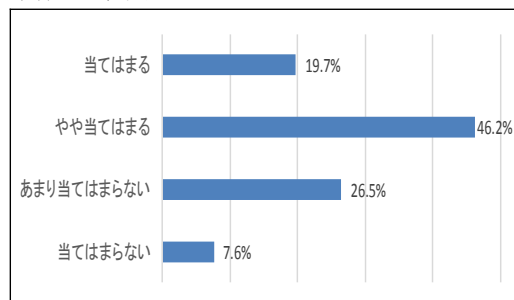


平成30年度

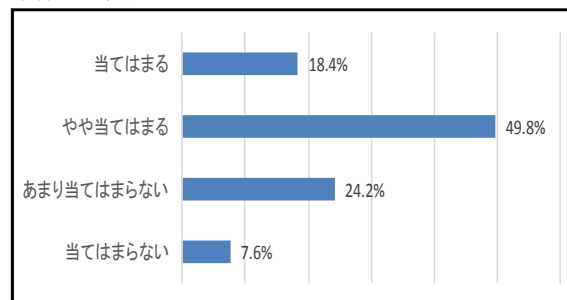


興味・関心・疑問を持ったことを発表者に質問し有意義な意見交換ができた。

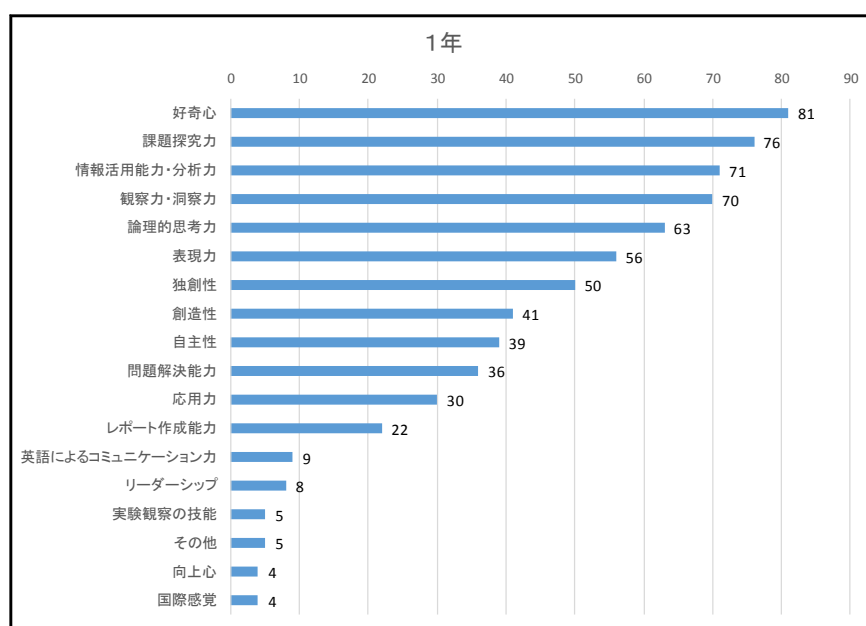
平成29年度



平成30年度



〔課題研究に必要なと思われる力〕



上記のように、「発表会を有意義だと感じ、参加して良かったと感じる」には、肯定的な回答が平成30年度97.8%（平成29年度98.8%、平成28年度97.5%、平成27年度97.5%（平成29年度報告書参照以下同じ））、「今後自分が研究・発表する際の参考になった」には、平成30年度96.8%（平成29年度97%、平成28年度94.8%、平成27年度95.8%）となり、ほぼ昨年度の高水準を維持している。さらに、「発表者に質問し、有意義な意見交換ができた」には、平成30年度68.2%（平成29年度65.9%、平成28年度64.9%、平成27年度72.6%）の肯定的な回答があった。5年目の今年度は、1年生の積極的な

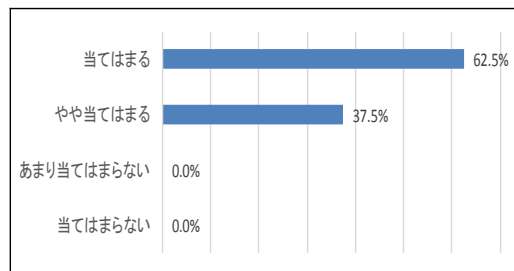
質疑の姿勢が報告されており、1年生の質疑応答指導に改善が見られている。「自分も発表したいと思った」には、85.7%（平成28年度87.4%、平成27年度86.2%）で若干下降気味であることから、質疑応答への満足度を上昇させることがさらに円滑に2年次の課題研究に導く要因となるのではないかと。

今回の発表会も次年度に向けての動機付けになると同時に、2年生にとっても良い発表の場となった。「どのような力が課題研究に必要か」という問には、「課題探究力」・「論理的思考力」・「好奇心」が上位3位に挙げられた。

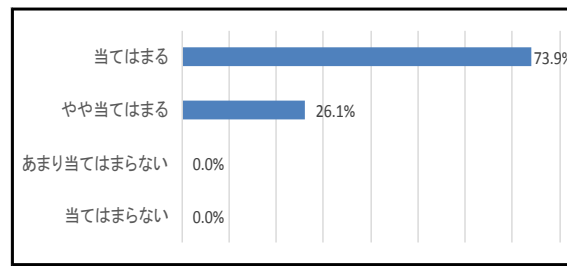
(3) 外部見学者の回答

全体として、生徒独自の視点を含む発表であった。

平成29年度

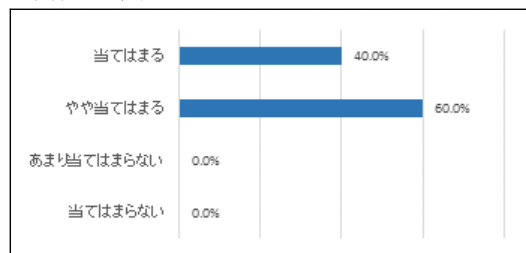


平成30年度

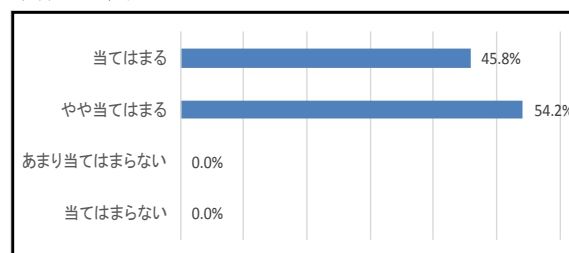


全体として、伝えたい内容をうまくプレゼンしていた。

平成29年度

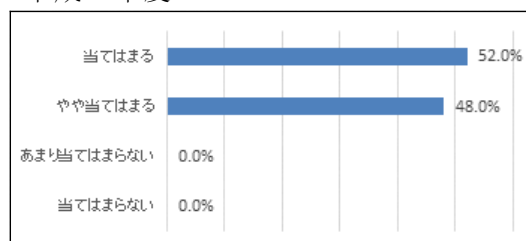


平成30年度

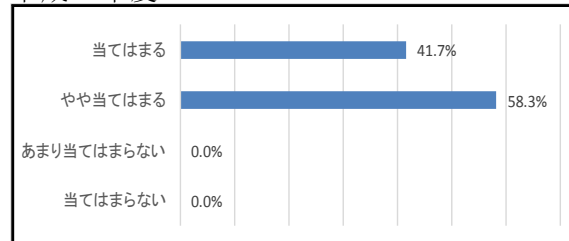


発表者は質問に対してきちんと答えることができた。

平成29年度



平成30年度



上記のように、「生徒独自の視点を含む発表」に平成30年度100%（平成29年度100%、平成28年度98.2%、平成27年度92.6%（平成29年度報告書参照以下同じ））、「伝えたい内容をうまくプレゼンしていた」にも、平成30年度100%（平成29年度100%、平成28年度100%、平成27年度96.2%）、「質問に対してきちんと答える」でも、平成30年度100%（平成29年度100%、平成28年度98.3%、平成27年度92.6%）の肯定的な回答を得られた。第4回の発表会も「充実した発表会」という評価を得た。全講評者の講評シートをラボ担当の教員に返却し、フィードバックを行った。

今年で4年目となる「アカデミックラボ」の活動は、「課題設定・解決能力」「考える力」「表現力・プレゼンテーション力」「情報活用能力・分析力」の育成に特に有効であったと言える。

＜生徒の感想＞

- ・アカデミックラボで、他人と協力、討論し、自分達のやりたいことを1つにまとめ上げることができました。自分の主張をもち、そして他人の意見をも尊重することはもちろん、さらにそれらを他人に伝えることの大切さも学びました。また、本日の発表で、他人に自分達の考えを伝える難しさも感じて、今度の英語の発表にも生かして、よりよくしていきます。
- ・約1年間かけて研究したことを6分で完結に相手方に分かるようにおにまとめるのは非常に難しかったです。途中で終着点が見つからなくなって悩んだりしたけど、メンバー4人でしっかりと話し合っってなんとか今日発表することができました。他のラボの発表はすごく新鮮で聞いていてとても楽しかったです。また、他の発表のよかったところ等は、来年度の英語での発表でいかせるようにしたいなと思いました。

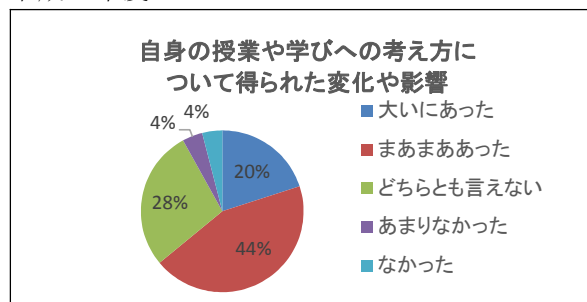
＜保護者・教育関係者の感想＞

- ・生徒が独自の切り口でテーマを深めているのがすばらしいと思いました。どの生徒さんも自分の言葉で設問に答えていただきました。
- ・テーマの設定もとても良いと思いました。質の高い素晴らしい発表で感動しました。ありがとうございました。発表する側、聞く側、みんな真剣で、いい時間だと思います。

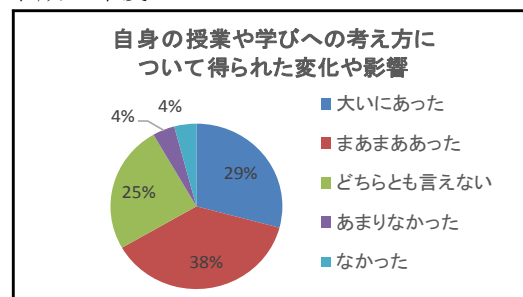
(4) 担当教員の回答

「自身の授業や学びへの考え方について得られた変化や影響」

平成29年度



平成30年度



上記のように、「自身の授業や学びへの考え方について得られた変化や影響」には、平成30年度65%（平成29年度66%、平成28年度70%、平成27年度93%）の教員が肯定的な回答をしており、この5年間の研究活動において、初年度の大きな意識改革以降、継続して課題研究の取組が教員の授業や教育活動に影響を与えてきたことがわかる。SGH校としての取組の成果のページにも掲載しているが、課題研究の指導で得たことが校内の様々な他の教育活動に影響を与え、教員の授業への意識に大きな影響を与えたことが大きな成果であると言える。

5 成果

アカデミックラボで5年間取り組んできたことが、SGH全国高校生フォーラムやグローバルネットワーク京都交流会、校内でのSAGANO GLOBAL PRESENTATIONやアカデミックラボ課題研究発表会等での生徒の発表にも成果として表れるようになってきている。嵯峨野高校の新しい学びの伝統として、新学習指導要領の「総合的な探究の時間」に繋がる教育課程の開発と実施ができたことが大きな成果であった。

(1) 「課題探究における生徒・教員の変容」について

課題研究も4年目となり、各ラボとも大学・企業・地域、特にその他の外部団体との連携がさらに広がり、「課題設定・解決力」を育成する積極的な自主的な学びの活動として探究活動が育ってきている。その成果が生徒の発表やアンケート結果にも表れている。さらに教員の授業や学びに対する意識にも大きな変容がみられる。

(2) 「評価方法」について

評価方法については、年間を通じてラボ担当で検討を行い、京都大学大学院教育学研究科との連携をする中で、より良い評価を目指してきた。今後の「総合的な探究の時間」の評価に繋がる土台を作ることができた。

(3) 「課題研究と教育課程」について

3年間の教育課程の中に課題研究を位置づけ、その道筋〈基礎力養成→課題研究→発表・提言〉を定着させ、「総合的な探究の時間」に繋がる教育課程の開発と実施が行えた。

6 課題

5年間のアカデミックラボでの探究活動の取組においては、運営指導委員会でも高い評価を頂いているが、アンケート（嵯峨野高校作成・京都大学作成）結果に加えて、ICT機器を活用して記録した生徒の発表等の分析や、卒業生対象のアンケート結果等も総合して、さらにポストSGHとして、他校にいかにかこの研究結果を踏まえた指導法を普及させるかが課題である。

エ 課題錬成A・B（学校設定科目・英語・2単位）

1 ねらい

地域連携・海外コラボ型「京都グローバルスタディーズ(KGS)Ⅱ」で2年次に「環境」と「地域」を2本の柱として、「英語・国際領域」、「人文科学・社会科学・自然科学」分野においてアカデミックラボで課題研究を行い、探究する力、表現する力、課題設定・解決力、地球規模で考える力を高めてきた。それをさらに、3年次KGSⅢでは、「課題錬成A・B」において、研究内容を深化させ、英語にまとめ、文化・言語の異なる海外の人にその内容を発信し、提言を行う力をつけ、この3年間の課題研究の集大成となることを目標とする。その発表の場として、「SAGANO GLOBAL PRESENTATION」(以下SGP)(府内高校・全国SGH校・海外のパートナー校を対象)を実施し、研究課題を英語を用いてスライドプレゼンテーションし、質疑応答を行う力を培うことを目標とする。それに加え、英語による表現力をつける一環で、課題研究のアブストラクトも作成する。

2 概要(実践)

平成30年4月に、第1回課題錬成担当者会議を開き、課題錬成の指導をスタートした。アカデミックラボの各チームの英語台本の原稿及び担当者の確認をし、今後の発表会までの指導体制を確認する。

(1) Google ドライブ上のスライドの添削指導(4月下旬～5月中旬にかけて)

生徒が2年次の課題研究のまとめとして作成した日本語台本と英語台本をGoogle ドライブ上で確認し、教員側(JTEとALT)からの助言をコメントとして入力し、生徒とドライブ上で双方向のやりとりをする中で、添削指導を行った。



Google ドライブ上での添削指導



生徒作成の英語スライド

(2) 発表会までの流れ

発表会までの流れ

ア	訂正された英文を読み、内容を理解する。疑問点を担当教員に質問する。
イ	各グループ全員で、誰がどのスライドを発表会で説明するかを決める。
ウ	訂正された英文を参考にして、スライドの日本語を英語にする。
エ	各人が英語の台本を覚える。
オ	台本の音読練習を行う。
カ	各人のスライドに関する想定質問とその答えを英文で作成する。
キ	グループで練習する。

授業内でやること

S G P 1	ア～ウ	発表内容箇所決定
S G P 2	ア～ウ	スライド作成
S G P 3	オ～カ	発表練習
S G P 4	カ～キ	ポスターセッション
S G P 5	カ～キ	質疑応答のシミュレーション
S G P 6	カ～キ	想定問答集作成＋発表・質疑応答の準備完了
S G P 7		S G P 本番
S G P 8		アブストラクト作成

平成30年度 3年生 課題錬成 1学期授業計画

課題錬成	火2	木3
------	----	----

回	月	日	曜日	備考	授業形態		Vintage	
							ページ範囲	備考
1	4	12	木					(春休み課題テスト)
2	4	19	木			Vintage	238 ~ 267	Field 2 語法(30ページずつ)
3	4	24	火			Vintage	268 ~ 297	
4	4	26	木		S G P 1	発表準備		
5	5	1	火		S G P 2	スライド作成		
6	5	8	火		S G P 3	発表練習		
7	5	10	木			Vintage	298 ~ 327	
8	5	15	火		S G P 4	ポスターセッション		
9	5	17	木	短縮		Vintage	328 ~ 355	
1学期中間テスト							238 ~ 355	
10	5	29	火	演劇団体鑑賞/短縮				
11	5	31	木			Vintage	20 ~ 53	Field 1 文法(34ページずつ)
12	6	5	火		S G P 5	発表練習+Q A		
13	6	7	木			Vintage	54 ~ 87	
14	6	12	火		S G P 6	発表練習+Q A ?		
15	6	14	木	人権学習(1・3年)				
	6	15	金		S G P	S G P 7		
16	6	19	火		S G P 8	アブストラクト作成前半クラス		後半講座(E/F/G/H)はテキスト
17	6	21	木			Vintage	88 ~ 121	
18	6	26	火		S G P 8	アブストラクト作成後半クラス		前半講座(A/B/C/D)はテキスト
19	6	28	木			Vintage	122 ~ 155	
1学期期末テスト							20 ~ 155	
20	7	10	火					
21	7	12	木			Vintage	156 ~ 189	
22	7	17	火	短縮				
23	7	19	木			Vintage	190 ~ 231	

(3) 英語による課題研究発表会 -SAGANO GLOBAL PRESENTATION- (6月15日)

日 時 : 平成30年6月15日(金) 5~7限

内 容 : 2年次の「アカデミックラボ」における課題研究の内容を「課題錬成」の授業の取組として、英語でプレゼンテーション・質疑応答を行う。

会 場 : 2年・3年のHR教室13室

タイムテーブル: 開会式

3年生リハーサル

発表 英語発表8分+質疑応答5分=13分を5ラウンド行う。

各自のHR教室に戻り、放送による閉会式 アンケート・片付け

発 表 : 各グループで1回

発表会の進行: 司会とタイムキーパーは3年生が交替で行う。

英語による質疑応答: 各教室に米国フロリダ ジュピター高校生・教員、T A (海外の留学生) が質疑応答者として参加

発表見学: 最低4つ(リハーサル・発表会を通して)の発表を見学する。他グループへのコメントペーパーを記入して、発表終了後会場内の提出用封筒に入れる。

研究テーマ

No.	Labs	Title	Fields
1	Kyoto Culture	Kyoto Stamp Rally with "Chu-Genji" ~ Planning the Rewards and Goods ~	Culture
2		Kyoto Stamp Rally with "Chu-Genji" Liaison Team	Culture
3	Japanese Literature-medieval and early modern ages-	Who knows the "moral"? ~ Education in Medieval and Early Modern Literature ~	Culture

4	Japanese Literature - modern and contemporary-	Social phenomenon of Arikawa Hiro ~Why do many people love Arikawa's work?~	Culture
5		KYOTO NOVELS	Culture
6		New family image ~ New families in Japanese Modern Literature ~	Culture
7	Mathematics A B	How to save as many people as possible from tsunami	Life
8		What elevator pattern can carry people effectively?	Life
9		How to have a shorter wait for the elevator	Life
10		To solve Traffic Congestion	Life
11		Clearing Rain Water Quickly	Life
12		Getting rid of the congestion in Sagano's Common Hall	Life
13		Optimising traffic light timing to reduce the wait time	Life
14		Safety curved mirrors which have fewer blind spots	Life
15	Science	Relationship between the shape of windmills and power generation efficiency	Nature
16		Water pressure force working on a submerged door and dealing with this issue	Nature
17		Tolerance of fruit flies and heredity	Nature
18		The Learning Ability of the Vinegar Fly	Nature
19		How helpful it is! ~ Cytoplasmic streaming within the Brazilian waterweed ~	Nature
20		Growing a forest of white radish sprouts ~ the influence of music on plants ~	Nature
21		Nutrients to make root vegetables taste sweet	Nature
22		Functional Paper	Nature
23		Vegetable Crayon	Nature
24	Law	Let's make city checkpoints	Life
25		NO SCHOOL, NO LIFE	Life
26		Avoid using smartphones while walking	Life
27		DECREASE! The problem of abandoned bicycles	Life
28	Social Business	Convenience Parking	Life
29		Traditional crafts from a different perspective ~Contracts & Services~	Life
30		Traditional crafts from a different perspective ~Retail & Japanese-style hotel~	Life
31		A Special Insurance for Machiya townhouses	Life
32		*Shuhu no Mikata* ~ Homemaker mobile support ~	Life

33	International relations	A theoretical idea on which successful Finnish education is based on - No more cram schools	Inter-national
34		Isolierte Muslime ~For the co-living of German Society and Turkish Muslim Immigrants~	Inter-national
35		We want to help the poor. ~ Messages from rapidly growing Cambodia ~	Inter-national
36		Your care worker is Gabriela?!	Inter-national
37		~ Now is the time for us to make a decision ~	Inter-national
38		Doing business with smartphones at refugee camps -from the success of Zaatar refugee camp-	Inter-national
39	Food culture of Kyoto	Finding Hidden Charm ~ Kyoto soybeans ~	Life
40		Tea House @Sagano	Life
41		CHARM OF MATCHA ~ with help from the students at our school ~	Life
42		Washoku + Fiber = ? ! ~ Help yourself to Kyo-yasai ~	Life
43	Global Issues	SEKAI NO ONGAKU ~ The Unknown Power of Music ~	Inter-national
44		No more passive learning and no more long working!	Inter-national Life
45		YOKOSO JAPAN	Inter-national
46		This Logo will unite the World ~ Goodbye having to Google!~	Inter-national
47		Connecting the world through languages	Inter-national
48	Global Environment	Arashiyama tourism and Hozugawa river boat ride	Nature Culture
49		LET'S START BAMBOO LIFE	Nature Culture
50		Let's make moss popular!	Nature Culture
51		Grow & Keep Moss	Nature Culture
52		Don't you know about Arashiyama?	Nature Culture
53	Cultural Asset of Kyoto	Leaving Cultural Properties to Future Generations - Find an Idea -	Culture
54		The reason for the existence of the "original" and the "fake" cultural properties	Culture
55		Inconvenience is Healing	Culture
56	Art Technology	WASHI ~ Be familiar with traditional crafts ~	Culture
57		PICTOGRAM ~ Break the language barrier!~	Life
58		Awareness of risks in complex road intersections	Life
59		Trying to solve the problem of vacant houses	Life
60	Human Body and Exercise	How to take Good Care of Elderly People	Life
61		Re: Life in exercising with fragrance	Life
J1	Jupiter High School	Park Visitation Levels in Yellowstone: How much is too much?	

J2	Jupiter High School	Everglades National Park: Environmental Impacts and Recommendations
----	---------------------	--



発表の様子



米国フロリダ ジュピター高生も発表に参加

(4) アブストラクトの作成 (6 月)

2年間のまとめとして、2年次に作成した日本語論文、SAGANO GLOBAL PRESENTATIONの結果も踏まえ、発表会後の授業で英語によるアブストラクトを作成した。

(生徒のアブストラクト例)

52 Don't you know ARASHIYAMA?!

Shiho komai / Megu Nomiya / Fuka Suzuki / Tomoha Furufu

We want people to engage more in Japanese culture. We researched how we could help tourists and locals to learn and experience more culture in their travels.

Arashiyama was the focus location for our work. After conducting fieldwork, we found there were more foreign tourists than Japanese. We asked why they chose Arashiyama and not of the other sightseeing spots in Japan. In a questionnaire we found that almost 50% answered “because I came from another place near from here,” or “because Arashiyama is famous.” We wanted them to learn more so they could experience culture in their travels.

Our key points became convenience, amusement, and multilinguality; convenience to gain information easily, amusement to make many people interested, and multilinguality lets many different people know about Arashiyama. We decided to use a mobile device AR application called CocoAR to achieve our goal. With the cooperation of an employee of the app, we made different announcements and movies.

There were two limiting factors. First, the lack of wifi. Second was the landscape itself. We planned to put our app triggers in Jojjakouji temple, which supported us and does have free wifi. However the app wouldn't work right because our AR app triggers were too bright, and we couldn't make the landscape triggers work well. Therefore we had content, but it was impossible for people to access it.

We must work hard in the future to overcome these kinds of limitations, and we hope other students can learn from our research.

22 Functional Paper

Yoshiki Sugai • Chikae Sakata • Mai Nakayasu • Souta Sanoki • Mami Tukada

We wanted to do research that would help the Environment but also would benefit people. We researched how to enhance the value of recycled paper. Our hypothesis was that if we could enhance the value of recycling paper by making a recycled paper which has special functions then it would encourage more people to buy recycled paper because it would be useful to them and this result would therefore help

the environment.

We mixed many things such as charcoal, bananas, and cinnamon, and we found that we were able to make paper with special functions. We focused on making paper which could deodorise, could change its color, had a smell, and had insecticide.

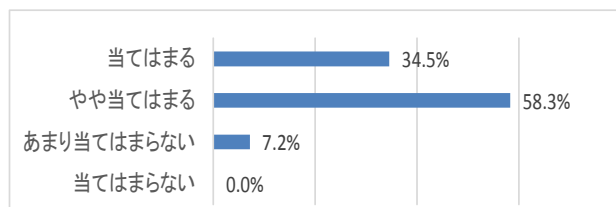
As a result, through our experimentation we found out that: (1) charcoal paper is good for deodorising, (2) BTB paper can change its color, (3) mixing all the substances is good for making papers with a pleasing smell, and (4) cinnamon has insecticide but cinnamon paper did not function as a pest repellent at all. Through our experiment, we now know it is easy for us to make paper with special functions which can enhance the value of recycled paper. We hope we can make paper which is useful for medical care, such as one that is a good insect repellent.

3 成果

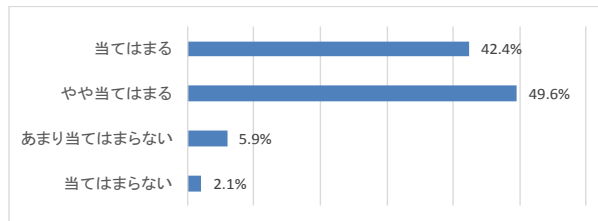
アンケート結果(2年間の課題研究活動を通して、以下のような点がアンケートで挙がった。)
3年生(発表者)

- ・自分たちで主体的に考え、課題を設定し、研究していくことができた。

平成29年度

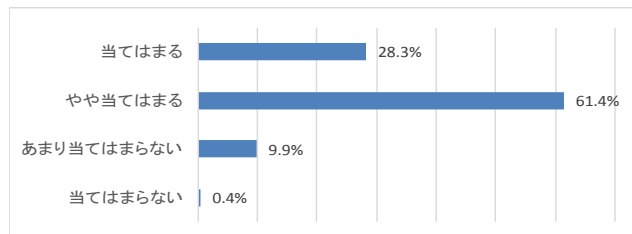


平成30年度

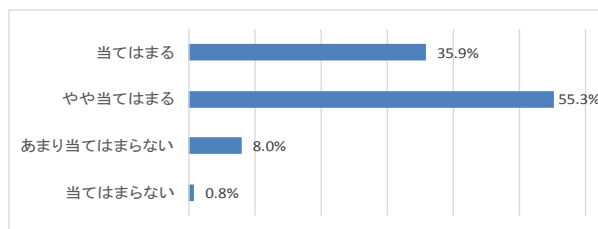


プレゼンテーション能力を向上させることができた。

平成29年度

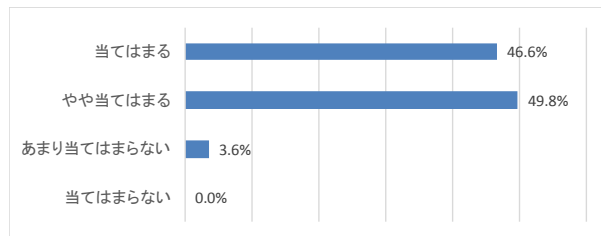


平成30年度

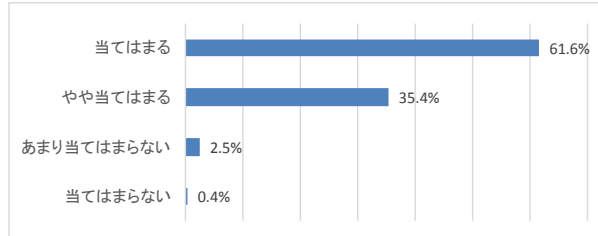


- ・チームでの共同作業を通じ、ひとつのものを作り上げ、発表することができた。

平成29年度



平成30年度



上記のように、課題研究の中で、「主体的な課題研究」・「プレゼンテーション力」・「協働」という点でそれぞれ、平成30年度92.0%、91.2%、97.0%〈平成29年度 92%、89.7%、96.4%、平成28年度 92.5%、91.3%、95.0%〉という肯定的な回答があり、5年間を通じて、2年次から3年次の2年間にわたる課題研究活動の中で得られる大きな成果が見られる。

〈生徒の感想〉

- ・入学前こんな発表ができるはずがないと思っていた英語の発表だったけど、なんとかやりきれた。自分でも

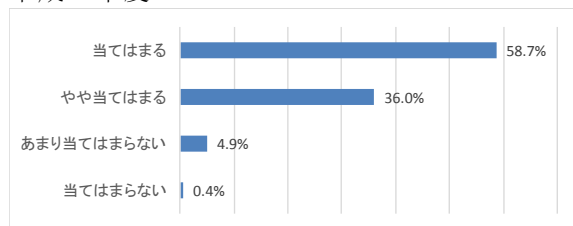
びっくりした。自分の成長も感じたし、周りの人の英語コミュニケーション力の高さを改めてすごく尊敬した。今はとにかく達成感でいっぱいです。

・2年間のラボ活動で色々なことを考えたり、自分たちが決めたテーマをもとに探究したり、とても楽しかったし、様々なことを学べたので良かったです。英語発表では詰まってしまったところもあったけど、伝えたいことを言えたので良かったです。今後、英語のプレゼンテーションをする機会があると思うので、その時は今日の反省を少しでも向上できるようにしたいと思います。

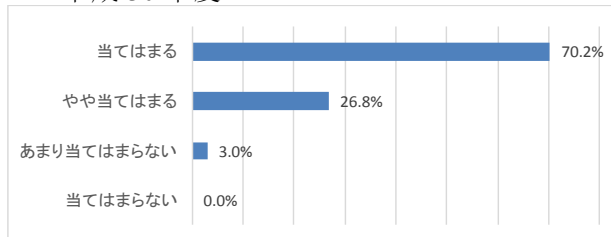
2年生（見学者）

・今回の発表会を有意義と感じた。（参加して良かった）

平成29年度

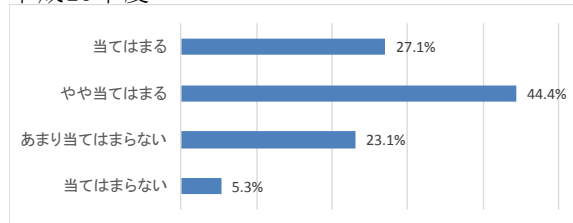


平成 30 年度

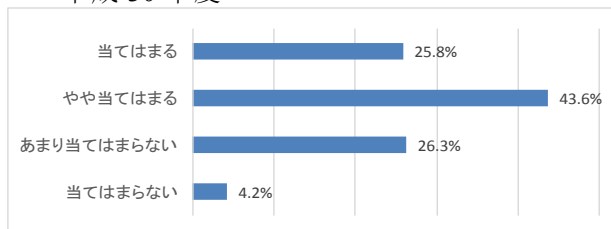


・今日のような発表会で自分も発表したいと思った。

平成29年度

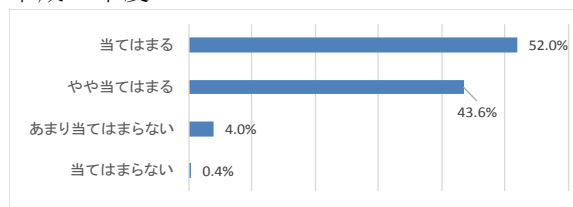


平成 30 年度

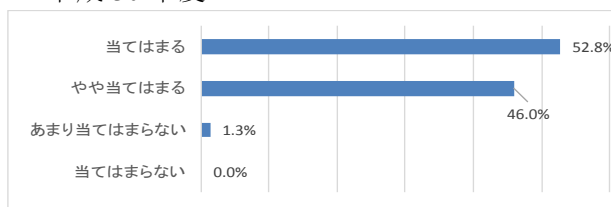


・各発表は今後自分が研究・発表する際の参考になった。

平成29年度



平成 30 年度



上記のように、「発表会が有意義」「自分も発表したいか」「今後の研究・発表の参考になる」という項目に肯定的に回答した生徒が、平成30年度97.0%、69.4%、98.8%（平成29年度 94.7%、71.5%、95.6%、平成28年度88.6%、63.9%、89.5%）で、この5年間の取組の中で、最も高い水準で肯定的な回答が出る結果となった。課題研究の取組が本校の教育活動の中で定着しそれがしっかりと次の学年に引き継がれていると言える。発表会には海外交流校のジュピターハイスクールの生徒6名・教員4名、ALT3名に加え、11カ国の外国人留学生TA(Teaching Assistant)が18名集まり、質疑応答に参加した。また、指導体制としては、「アカデミックラボ」を担当する全教科の担当者から「課題錬成」を担当する英語科の担当者へと引き継がれる指導体制がうまく機能していることも成果と言える。

4 課題

KGSⅢの実施3年目で、SGHの研究指定の最終年度ということもあり、英語による質疑応答の部分で改善が見られるようになってきた。グループ間の到達度にはまだ差があるが、英語での発表に至る探究活動をSGH対象生徒240名全員が体験し、今後の学びに繋げていけることは大きな成果である。今後さらに課題研究の内容の深化を目指すために、教科間連携を推し進める必要がある。3年次の6月の発表会の成果・課題を踏まえて、ポストSGHの取組に繋げていきたい。

(2) 課題設定・解決力や国際的教養を身につけたグローバルリーダーの育成を図る指導方法の研究

ア 海外パートナー校との課題研究① 校内

1 ねらい

将来、国際的舞台上でリーダーシップを取るための資質・能力を育成するため、異文化について理解を深めると共に日本や京都についての理解も深め、英語コミュニケーション能力や異文化コミュニケーション能力の伸長とグローバルな視野の獲得を図る。また、海外パートナー校との交流により両校の教育課程の質の向上を図ると共に、各校との友好を深め、教育的互恵関係を築き上げる。

2 概要(実践)

海外パートナー校等との交流

(1) ハイシンカトリックスクール (シンガポール)

実施日 : 平成30年5月31日(木)、6月1日(金)

参加生徒: ハイシンカトリックスクール生徒(32名)

1年1組・2組・4組・5組(GI受講生徒)

2年4組(英語理解受講生徒)

2年アカデミックラボ・グローバル環境選択者

国際交流委員

実施内容: 合同授業等(Show&Tell等)、嵐山合同フィールドワーク、合同昼食会等

(2) ジュピターハイスクール(アメリカ フロリダ州)

実施日 : 平成30年6月9日(土)～6月17日(日)

参加生徒: ジュピターハイスクール生徒(6名)

1年3組・6組(GI受講生徒)

2年1組・2組・3組(コミュニケーション英語受講生徒、体育受講生徒)

2年1～6組、3年1～6組(SAGANO GLOBAL PRESENTATION))

米国フロリダ留学(予定)者

校有林ラボ所属生徒、グローバル環境所属生徒

フロリダ中期留学参加本校生徒(ホストファミリーとして2家庭)、フロリダ中期留学参加卒業生徒(ホストファミリーとして1家庭)

実施内容: 合同授業、体育授業交流(ソフトボール)、SAGANO GLOBAL PRESENTATION、鞍馬方面合同フィールドワーク、嵐山方面合同フィールドワーク、合同昼食会、市内歴史・文化フィールドワーク、ホームステイプログラム(2泊)等を実施した。またボランティアによる姫路方面フィールドワークを実施した。

(3) セントメリーズカレッジ(オーストラリア)

実施日 : 平成30年9月27日(木)放課後

参加生徒: セントメリーズカレッジ生徒(11名)

ディスカッション部生徒(12名)

実施内容: 学校生活・自国の生活・文化等の交流

(4) 韓国公州韓一高等学校(韓国)

実施日 : 平成30年10月16日(火)

参加生徒: 韓一高校生徒(150名)

2年1～6組(英語理解、コミュニケーション英語、英語表現の受講生徒)

実施内容: 学校紹介、ステージパフォーマンス、Show&Tell(学校生活・自国の生活・文化、将来の夢等)、ボランティア生徒による放課後校内ツアー

(5) イーシュンタウンセカンダリースクール（シンガポール）

実施日：平成30年11月12日(月)

参加生徒：イーシュンタウンセカンダリースクール生徒(33名)

1年6・7・8組(GI受講生徒)

実施内容：合同授業、合同昼食会

(6) ナンチアウハイスクール（シンガポール）

実施日：平成30年11月13日(火)

参加生徒：ナンチアウハイスクール生徒(25名)

1年7組・8組(SE受講生徒)

2年7組・8組(SE受講生徒)

実施内容：両校生徒によるSEスライドプレゼン交流会、嵯峨野高校生によるSEポスターセッション、合同昼食会、市内歴史文化FW(妙心寺、龍安寺)

(7) アングロチャイニーズスクール（シンガポール）

実施日：平成30年11月21日(水)、22日(木)、23日(金)

参加生徒：アングロチャイニーズスクール生徒(26名)

1年1組・2組・3組・4組・5組、2年3・5・6組

2年アカデミックラボグローバル環境選択者

実施内容：両校生徒による合同授業、合同昼食会、嵯峨・嵐山地域フィールドワーク等

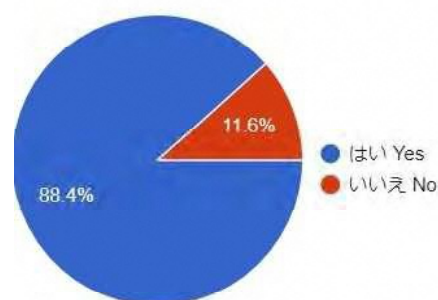
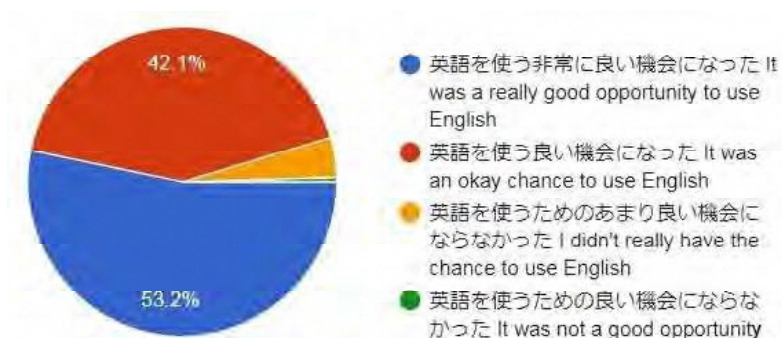
3 成果と課題

(1) 授業での国際交流についてのアンケート結果

2月に実施した1年生全員対象の生徒アンケートによると、1年生がシンガポール研修(1月)に行く前に嵯峨野高校で実施した海外の学校との合同授業は、英語の使用に関して、非常に良い機会(53.2%)、良い機会(42.1%)と約95%の生徒が肯定的に捉えている。また、授業での国際交流によって、英語を使って海外の人とコミュニケーションを取ることに積極的になったか否かの問いに対して、88.4%が「はい」と答えており、授業での国際交流は海外の人とのコミュニケーションへの態度の育成のための有意義な場を提供していると言えよう。

授業での国際交流は英語を使う良い機会になったか

授業での交流によって海外の人とコミュニケーションを取ることに積極的になったと思いますか



(2) 今後の課題

過去5年のSGH指定期間で海外の6校が定常的に本校を訪問するようになり、英語授業における国際交流が定着し英語異文化コミュニケーションへの積極性を育む効果が明らかになった。

今後も海外の関係校との教育的互惠関係を更に深め、英語を使う必然性のある場面を創出する国際交流を年間指導計画に位置付け実施すると共に、受け入れ体制のシステム化を図り、その質を一層高めて、生徒の英語・異文化コミュニケーションへの意欲・態度を更に高めたり、4技能（話す・聞く・読む・書く）を統合した能力の向上を図ることが課題である。

ア 海外パートナー校との課題研究② 海外 シンガポール研修(学校交流)

1 ねらい

海外の同世代の高校生との交流を通して、多様な考え方に触れ、地球規模の視野で考える力を身に付ける。また、言語の壁や文化の壁を越える交流を通して、国際舞台で通用するコミュニケーション能力やリーダーシップを取る能力を身に付けること。

2 概要(実践)

学校交流

期 間：1月16日(水)、1月18日(金)

訪問形態：1年 1組・3組 ハイシンカトリックスクール

1年 2組・5組 ダンマンハイスクール

1年 4組・6組 イーシュンタウンセカンダリースクール

1年生2クラスがそれぞれ上記の学校を訪問し、代表生徒による学校・京都・日本についてのプレゼンテーションを行った。また、小グループに分かれてShow&Tellにより準備した内容について説明を行い、質疑応答を行った。

<事前準備>

シンガポールの学校交流(1月)は、学校設定科目「グローバル・インタラクシオン(GI)」の年間指導計画に位置付けられており、現地校訪問時に行う日本紹介プレゼンテーションの作成、発表練習、質疑応答練習を、GIの授業で行っている。その際、日本人の英語担当教員、ALT、TAが指導を行っている。また、1、2学期に、シンガポールのパートナー校やアメリカのジュピター高校の生徒が本校を訪問するので、その際GI合同授業を実施している。すべての1年生が、シンガポール研修旅行前にGIの授業で2回、海外の生徒と高校生活や日本等を題材として英語で交流している。

<現地での交流の基本形態>

① 全体会(学校紹介等の交換)

嵯峨野高校の代表生徒による嵯峨野高校や京都や日本文化の紹介(スライド使用)

シンガポールの生徒による学校やシンガポールの紹介

② 記念品交換

③ パフォーマンス交換

嵯峨野高校生徒がクラス毎にテーマを決めて舞台パフォーマンスを披露

シンガポールの生徒による舞台パフォーマンス

④ 小グループ交流

・Show&Tell

シンガポールの生徒と嵯峨野高校の生徒がミックスされた少人数のグループに分かれ、日本や日本文化に関する題材について、実物等を見せて紹介し、質疑応答を行う。

・フリーインタラクシオン

自由な話題で話したり、名刺交換(e-mailアドレスを含む)等を行う。

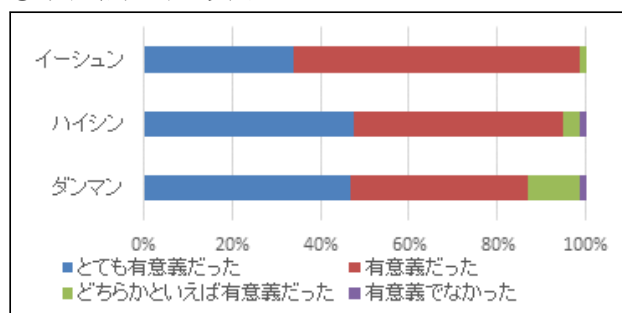
⑤ 学校の食堂でシンガポールの生徒と共に食事をする。

3 成果

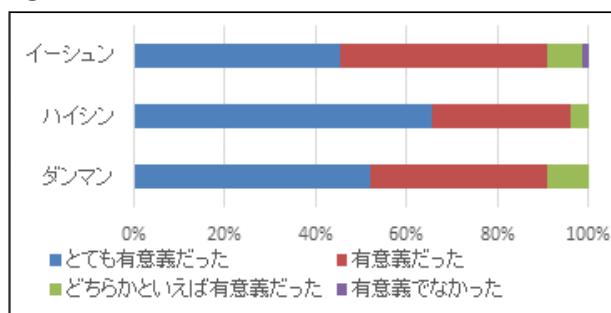
(1) アンケート(生徒自己評価)

学校交流に関するアンケートによる、生徒自身についての自己評価結果を示す。

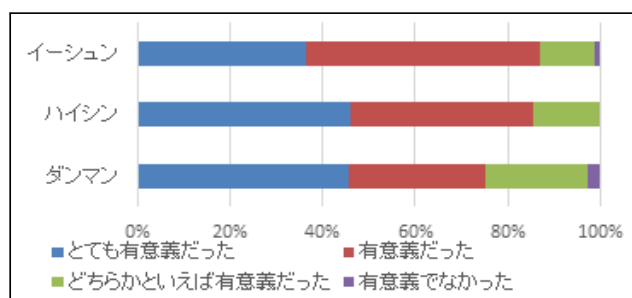
①学校紹介等の英語プレゼンテーション



②ステージ・パフォーマンス



③小グループ生徒間交流(Show&Tell、フリートーク)



学校紹介・ステージパフォーマンス・小グループ生徒間交流の全てにおいて、どの学校においても97%以上の肯定的回答が出ている。シンガポールでの学校交流は、英語コミュニケーションや異文化コミュニケーションへの積極的な態度の育成や能力の育成の上で有効な手段であると考えられる。

4 課題と展望

S G H指定の5年間、シンガポール研修旅行の学校交流を、学校設定科目(グローバルインタラクション)の通常授業と連携させて実施してきた。

1年間で身に付けた英語・異文化コミュニケーション能力を実際に試す場として、3学期1月の訪問は年間を通しての英語学習の現実的な目標となり、英語コミュニケーションへのモチベーションを維持する仕掛けになる。また、実際のコミュニケーションに積極的に取り組むことにより、その楽しさや難しさを実感することは、チャレンジ精神の育成や英語運用能力や異文化コミュニケーション能力の育成に不可欠なことである。

5年間を通して、シンガポール現地校(3校)は、本校を定常的に訪問しており、校長間や教員間の信頼関係も構築できた。今後も、これまで地道に構築した教育的互惠関係を一層深め、持続可能な連携システムを作り、学校訪問プログラムの更なる質の充実を図ることが課題である。また、交流校の新規開拓や相互訪問校を着実に増加させることも課題である。



ステージパフォーマンス



Show & Tell
(小グループで交流)



現地校のユニーク授業
(プログラミング)

I アメリカ・フロリダ研修

1 ねらい

将来、グローバル社会のリーダーとして活躍するために必要な地球的視野、コミュニケーションへの積極性、英語運用能力、異文化コミュニケーション能力及び課題設定・解決能力を養うことを目的とし、次に掲げる研修を行った。

フロリダ州ジュピター市と、デルレイビーチ市のモリカミュージアムにおける歴史・文化・環境フィールドワーク、ジュピターハイスクールにおける授業参加、エバーグレイズ国立公園における環境管理システムフィールドワークを行った。また、環境保全に取り組む企業 TRC Solutions を訪問し、持続可能な経済活動の在り方についてレクチャーを受けた。併せて、ジュピターハイスクール環境アカデミーコース(JERFSA)の生徒宅におけるホームステイプログラムを実施した。

2 概要

(実践1: 現地研修)

(1) 日程：平成31年1月4日(金)～1月14日(月) (11日間)

場所：アメリカ合衆国フロリダ州内の各地(ジュピター市文化環境関連施設、ジュピターハイスクール、フロリダアトランティック大学、エバーグレイズ国立公園、モリカミュージアム他)

参加者：嵯峨野高校2年生 6名

参加者選考方法：

参加応募理由書、英語運用能力(リスニングテスト、英語グループディスカッション)による。
9名が応募し、6名を参加者に決定した。

引率：教諭 2名

(2) 現地プログラム

1月4日	京都駅集合 成田空港から米国アトランタ経由、フロリダ州パームビーチ空港へ ジュピター灯台ハウス泊
1月5日	Coral Cove Park：環境学習 ジュピター灯台：歴史文化フィールドワーク ホームステイ体験(5日午後から12日午後まで) ホームステイ泊
1月6日	ホストファミリーとアメリカ生活文化体験 ホームステイ泊
1月7日	ホストファミリーとモリカミュージアムを訪問(日本の環境及び社会に関するプレゼンテーションを行い、日本庭園を見学) ホームステイ泊
1月8日	環境保全に取り組む企業 TRC Solutions を訪問 (午前) ウミガメ等海洋生物の保護(Loggerhead Turtleセンター) (午前) フロリダ・アトランティック大学キャンパスツアー(午後) ホームステイ泊
1月9日	ジュピターハイスクール訪問1日目：

	高校生活体験(JERFSA生徒と共に通常授業等に参加) 日本の環境及び文化セッション(プレゼンテーションとディスカッション)
1月10日	ジュピターハイスクール訪問2日目: 高校生活体験(JERFSA生徒と共に通常授業等に参加) 夕刻からホストファミリーと共に夕食会、文化体験発表(書道・折り紙・日本の遊び)
1月11日	エバーグレイズ国立公園で環境フィールドワークにJERFSAの生徒と共に参加
1月12日	ホストファミリーとアメリカ生活文化体験 夕刻にホストファミリーとお別れ ホテル泊
1月13日	フロリダ州パームビーチ空港より帰国の途へ
1月14日	帰国

(3) 事前・事後研修等

①事前研修(10月24日～12月20日まで適宜、昼休みと放課後等)に実施)

○プレゼンテーション(3人グループ、10分間)の準備

- ・ A「Japanese Culture」
- ・ B「Japanese Nature」

○プレゼンテーションA, Bに係る質疑応答集(日英)の作成

○現地での質問リスト「フロリダの環境マネジメント(土地のマネジメント、水のマネジメント他)、米国の教育システム、見学地(モリカミュージアム、ライトハウス博物館等)」の作成

○課題学習

持続可能な都市・京都の発展のための提言を行うためのブレインストーミング等

(京都ひいては日本の理想的な未来像に関して、フロリダで学んだ視点を活かした提言をする。)

②事後研修(1月14日帰国後～3月末、昼休み・放課後等適宜)

○グループによる課題研究(課題の明確化と具体的解決策の提案)のプレゼンテーション(10分間)の作成

○3学期終業式での研修報告(日本語)

○平成31年3月 京都大学大学院研究室でのFinal Project発表(予定)

○平成31年度本校文化祭イングリッシュカフェにて、Final Project発表(予定)

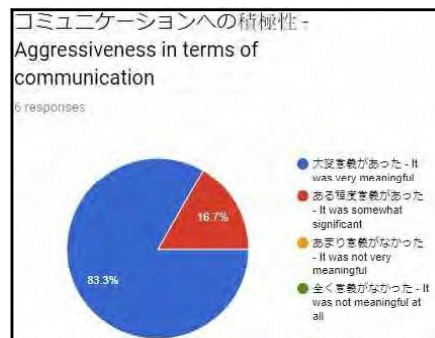
③ICTの活用(事前・現地・事後研修において)

○プレゼンテーション、ブログの作成をグループ単位で行う。その際、Googleドライブの協働作業機能を活用し、集合時及び個別時にスライド作成を行う。また、ペーパーレスによる指導効率の向上と添削による教育効果の向上を図った。

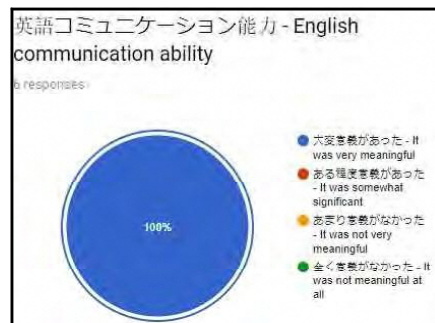
○現地ではiPad(生徒各1台)とWi-Fiルーターを活用し、プレゼンテーション、文化交流、調べ学習や写真記録等に活用した。

(4-1) 現地研修終了後アンケート(3月上旬、対象:参加者(6名))

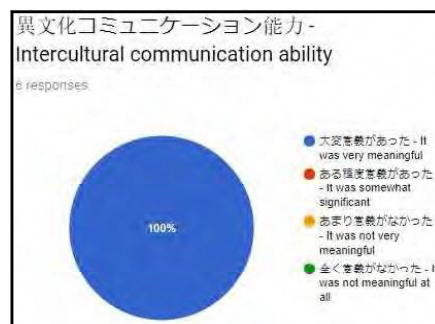
①本プログラムは、あなたのコミュニケーションへの積極性を育む上で有意義でしたか。



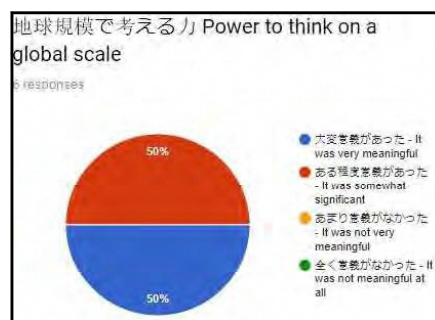
②本プログラムは、英語のコミュニケーション能力育成の上で有意義でしたか。



③本プログラムは、異文化コミュニケーション能力育成の上で有意義でしたか。



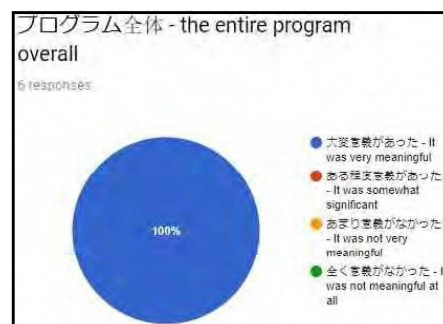
④本プログラムは、地球規模で考える力の育成の上で有意義でしたか。



⑤ホームステイ体験は有意義でしたか。



⑥本プログラムは、あなたにとって有意義でしたか。



(4-2) 現地研修アンケート結果について

上記の①～⑥の回答状況より、本研修で目的とした英語コミュニケーション能力、異文化コミュニケーション能力、地球規模で考える力の育成において、全員が肯定的回答をしており有意義であったと感じていることが分かる。

(実践2: 課題研究発表)

(1) 日程：平成30年9月8日(水)

場所：文化祭のイングリッシュカフェ会場

発表者：嵯峨野高校3年生4名(平成29年度フロリダ研修参加者)

英語ポスター発表：「Introduction of Japanese Culture」

「Japanese Natural Environment」

来場者：本校生徒138名程度、ALT2名、TA(留学生)4名、保護者、教職員

4 成果と課題

事前研修、現地研修、帰国後研修を通して、英語で課題研究及びその発表を行うことができた。例年、2年生及び3年生にまたがる一連の取組となっており、参加生徒は英語コミュニケーション能力(プレゼン力と質疑応答力等)、異文化コミュニケーション能力、課題設定・解決力を育成できていると考えられる。昨年に引き続き訪問したモリカミミュージアムでは、ホストファミリーやスタッフの方々を対象に日本の環境と文化についてのプレゼンテーションを行い、ホストファミリーとの館内見学では、日系移民の歴史と、日本文化とアメリカ文化の新たな邂逅と融合を学ぶ貴重な機会となった。ジュピターハイスクールと本校の教育的互惠関係は平成26年度以来着実に深まり、ジュピターハイスクールでは、本校生徒を4名(平成27年度～30年度)4ヶ月間毎年受け入れ、短期の受け入れ(ホームステイを含む)を5回実施している。また、ジュピターハイスクール校長と生徒が本校を平成30年度6月に訪問したことも、両校の教育的互惠関係をさらに発展させることに繋がった。ポストSGHでも、相互交流を継続し、両校のより良い関係を続けていくことが今後の課題である。

モリカミミュージアム

ジュピター高校での夕食会

ロガーヘッドタートルセンター



エバーグレイズ国立公園

TRC Solutionsでのレクチャー



II カナダ・ケベック研修

1 ねらい

将来、グローバル社会のリーダーとして活躍するために必要な地球的視野、コミュニケーションへの積極性、英語運用能力、異文化コミュニケーション能力及び課題設定・解決能力を養うことを目的とし4年間カナダ・ケベック研修を実施してきた。本年度は、SGH指定校として過去4年間の当研修を通して構築したグローバル社会のリーダーとして活躍するための資質・能力を養う研修を、SSHのプログラムの企画・実施に活用し、将来グローバル社会で活躍できる研究者育成のための研修プログラムへと発展させ実施することとし、次に掲げる研修を行うこととした。

カナダ・ケベック州の森林で土壌調査を実施したり、現地校において同世代の生徒と合同フィールドワークやプレゼンテーションやディスカッションを行う。また、現地の調査結果を学会等でも発表する取組を行う。あわせて、現地で研修プログラムの構築・実施についてサポートして頂いた在モンリオール日本国総領事館や国際関係機関等への訪問を行い、国際的キャリア教育の機会とする。

2 概要

(実践1:現地研修 予定)

(1) 日 程：平成31年3月17日(日)～3月25日(月) (9日間)

参加者：嵯峨野高校2年生6名 (引率：教諭2名)

場 所：カナダケベック州内ケベック市内、モンリオール市内他

<教育関係機関>

①コンパニオン校 (Collège des Compagnon) ②ロシュベル中等教育学校 (École Secondaire De Rochebelle) ③シャンプレーンカレッジレノックスビル校 (Champlain Regional College - Lennoxville) ④ラバール大学森林科学科 (Laval University faculty of Forest Science) ⑤マギル大学マクドナルドキャンパス (McGill University Macdonald Campus) 土壌研究室

<森林土壌調査>

①コンパニオン校隣接森林 ②マギル大学モーガンアルボレタム森林 (Forest Morgan Arboretum)

<日本国外務省在外機関、国際連合機関等>

①在モンリオール日本国総領事公邸

② I C A O (国際民間航空機関) 訪問

(2) 事前・事後研修等

①事前研修(9月～、昼休みと放課後等適宜実施)

○スカイプを活用する海外在住者とのビデオカンファレンス

○科学リサーチ・プレゼンテーション(3分間)の作成と質疑応答集(日英)の作成他

・テーマ：「嵯峨野高校学校有林の概要と土壌などの調査研究」

「日本や京都の森林に関すること」、「校有林の概要」

・嵯峨野高校校有林調査、国内の大学研究室で英語プレゼン発表等

○現地訪問先についての質問リストの作成

②事後研修

○平成31年度第1学期始業式において研修報告(日本語) 5分程度

○課題研究:カナダで学んだことを活かし、各生徒の研究テーマを深め学会等で発表する。

(実践2:課題研究発表会やビデオメッセージ作成)

(1) 日 程：平成30年9月5日(水)

内 容：英語ポスター発表

場 所：文化祭のイングリッシュカフェ会場

発表者：嵯峨野高校3年生4名(平成29年度ケベック研修参加者)

(2) 時期：平成30年10月

内 容：ビデオメッセージ作成、テーマ：「ケベック・カナダと私」

上 映：在モンリオール総領事館天皇陛下誕生祝賀レセプション

掲 載：在モンリオール総領事館フェイスブック

発表者：ケベック研修参加生徒4名及びケベック中期留学生1名

3 成果

グローバル人材に必要とされる資質・能力の育成のために構築した研修プログラムを、4年間で構築した現地の大学や高校との信頼関係を活かしつつ科学関連のサポートを得て、科学分野でグローバルに活躍できる研究者育成のためのプログラムに発展させることができた。

イ 海外トップ大学の学生とのワークショップ(課題研究)について

1 ねらい

グローバルリーダーの資質を育むため、将来の夢や進路を海外トップ大学の学生らと共にグローバルな視点から話し合い、自らのキャリアを構築する方法を学ぶ。また、高校生が、海外大学生をフィールドワークで案内したり、京都の美しい自然や環境、歴史・伝統・文化に触れることを通して京都について探究したりする。あわせて「京都を訪問する外国人リピーター観光客を増やす方策」について英語でディスカッションすることを通して、京都や日本を説明する力を身に付け、英語・異文化コミュニケーション能力や課題設定・解決力を身に付ける。

2 概要(実践)

(1) 事業名: 嵯峨野高校HLABコラボレーションプログラム

日 時: 2018年8月25日(土)～26日(日)

場 所:

ア 宇多野ユースホステル

イ グループ別フィールドワーク先(嵐山・祇園・京都駅・真如寺・錦市場など)

ウ 嵯峨野高等学校 コモンホール・会議室等 (京都市右京区常盤段ノ上町15)

参加者:

ア 京都府立嵯峨野高校1, 2年生(15名)

イ グローバルネットワーク京都校(※1)の生徒(6名)

ウ 海外トップ大学の学生(4名)日英バイリンガル大学生(4名)特別講師(1名)以上9名はHLAB(※2)

(※1 グローバルネットワーク京都校: 山城高校・鳥羽高校・洛西高校・菟道高校・東宇治高校・

城南菱創高校・西城陽高校・園部高校・峰山高校)

(※2 HLAB: 国内外大学生による高校生向けサマースクールを運営する一般社団法人)

(2) プログラム

第1日目: 8月25日(土)

会場: 嵯峨野高校・会議室B、宇多野ユースホステル

13:00 嵯峨野高校集合

13:10 打ち合わせ等(高校生のみ、オリエンテーション、グループ別フィールドワーク等について)

16:00 宇多野ユースホステルへ移動(徒歩15分)

16:30 宇多野ユースホステル入り・荷物整理

17:00 ～ 18:00 「開会式・アイスブレイキング・アクティビティ」

(以降の全日程に海外大学生やサポート役の日英バイリンガル学生等が参加)

18:00 ～ 19:00 合同夕食会

19:00 ～ 21:00 特別講師による講演会および海外大学生とのグループワーク「進路選択・将来の夢」

22:00 ～ 23:00 就寝準備

23:00 ～ 就寝(宇多野ユースホステル)

第2日目: 8月26日(日)

会場：(午前)：宇多野ユースホステル、市内フィールドワーク先、(午後)：嵯峨野高校会議室B

- 6:15 起床
- 7:00～ 朝食(宇多野ユースホステル)
- 8:00～12:00 **グループ別フィールドワーク** ※各グループは高校生(5ないし6名)海外大学生(1名)日英バイリンガル学生(1名)で編成
- 12:00～12:45 昼食(以降すべての活動場所は嵯峨野高校・会議室B)
- 12:45～16:00 **グループ・ディスカッション「外国人のための京都観光の質を高める方策」**
テーマ：『京都を訪問する外国人リピーター観光客を増やす方策』
①ディスカッション(プレスト+まとめ) ②ポスター作成 ③英語スクリプト作り
④英語発表練習 ⑤英語質疑応答対策(各グループは、異なるフィールドワーク先へ行った高校生(5～6名)と海外大学生(1名)と日本人バイリンガル学生(1名)で編成)
- 16:00～16:30 **英語によるプレゼンテーション**(発表5分+質疑応答3分)x4グループ
グループメンバー全員(高校生+大学生)が協力して発表「外国人のための京都観光の質を高める方策」の提案
- 16:30～16:45 **振り返りWebアンケート(高校生のみ)**
- 16:45～17:00 **閉会式**(プレゼンの表彰・講評、あいさつ等)

3 成果

事前学習(7月24日)とコラボレーションプログラム(8月25・26両日)に参加した計21名の高校生に発表活動終了後、WEBアンケートに回答してもらった結果は以下の通りである。

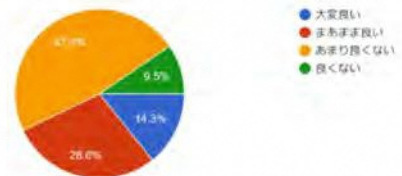
(1) 概況

例年、参加者の満足度が非常に高いプログラムではあるが、実施日程に関してのみは例年同様、「課題テスト直前だった」という理由を中心に否定的な意見が大半を占めた。今年に特徴的だったのは「事前FWが暑すぎて辛かった」という声が複数あったことである。夏の暑さがこれまでとは比較にならなくなってきた昨今、この時期にフィールドワークを実施するには十分な配慮が必要であろう。

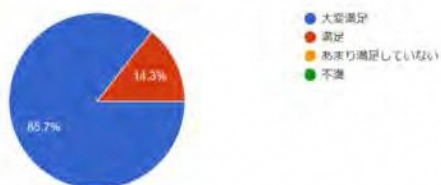
(2) 海外大学生・日英バイリンガル学生について

みなフレンドリーに高校生たちのつたない英語に耳を傾けてくれた様子で、自由記述欄からは高校生たちの感激が伝わる。「さまざまな国のなまりに触れて興味深かった」という声もあった。ただ、バイリンガル学生の語学力には多少のばらつきがあったようである。

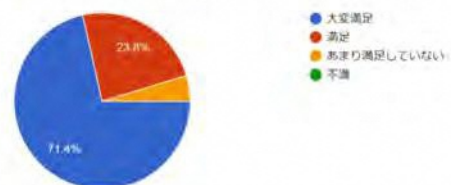
(2-1) 開催日程(8月25日～8月26日)について
21件の回答



(3-1) 海外大学生について
21件の回答



(4-1) 日英バイリンガル大学生について
21件の回答

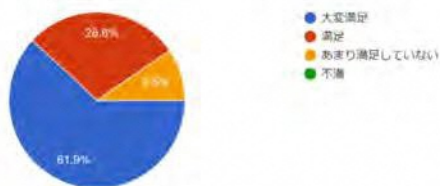


(3) 事前学習(7月)について

入念な準備が出来たことに満足感を示す生徒が大半だが、暑さのダメージを訴える声の他に、本番のFWと実施曜日が異なったため、十分に目的が果たせなかったという不満を感じた参加者もいた。また、「準備」ということで議論を深めるというより調べ作業のように感じてしまう面もあったようだ。

(4) 1日目の打ち合わせについて

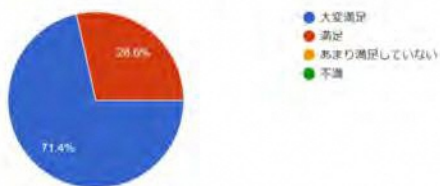
(6-1) 8月25日午後のFW事前グループミーティング
21件の回答



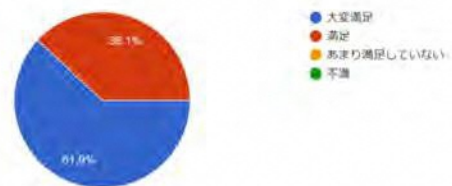
FW前の最終確認・情報共有という意味合いの他、日頃異なる学校に通う高校生同士が打ち解けるためにも必要な時間であったようだ。時間を計画的に使えた班は細部までの打ち合わせが出来たと感じた反面、調べた内容の確認に時間を費やしてしまったために議論を深める時間が足りなかったと感じた者もいたようだ。

(5) 特別講師による講演および海外学生との将来の夢・進路選択に関するセッションについて

(8) ステファン フーチェさんの講演
21件の回答



(9) 海外大学生の将来の夢・進路のセッション
21件の回答

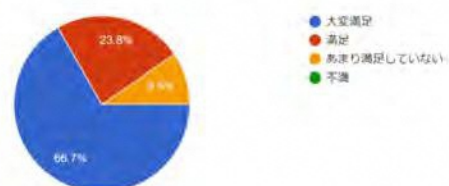


日本へ来ている留学生などを除き、既に社会に出て活躍している大人(外国人)の話を聞くチャンスはめったにないからか、例年通り特別講師の講演からは非常に刺激を受けたことがうかがえる。特に今年は日本語と日本事情にも精通した講師がこれまで経験した波瀾万丈とも言える人生の選択について英語で話すというものだったため、未知の世界に目を開かれたように感じた参加者もいた。大学生とのグループセッションでは将来の夢の有る無しにかかわらず、大学生や同じ高校生に真剣に話を聞いてもらったこと自体に感動したようだ。

(6) フィールドワークについて

事前準備が十分だったと感じ自信を持って案内できたと感じた反面、行き先によっては時間の配分が思い通りにいかなかったと感じた参加者もいたようだ。また即興的に英語で説明する事態に陥り困惑を感じる場面があったようだ。これもまた良い経験と前向きに受け止める心構えが肝要ということも事前学習において伝える必要があるかもしれない。

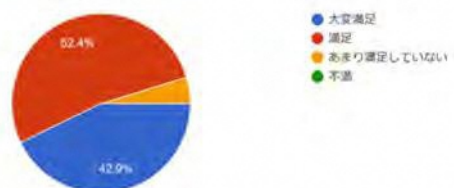
(11) 海外大学生とのフィールドワーク
21件の回答



(7) 英語でのプレゼンテーションについて

「用意した原稿を読むので手一杯だった」と自分に厳しい声もある反面、「自分たちがこのプログラムから何を学んだのか、ということが他のグループの発表からも明確になった」「時間が足りなかったが、たくさんの視点で物事の考え方を知ることができた」など、自身の成長を実感する様子が見取れた。

(12)提案のためのグループディスカッション
21 件の回答



4 課題

5年前の実施開始当初から非常に参加者満足度の高いプログラムであることは明らかなが、運営面で十分なコントロールが可能な参加人数に限界がある。また費用の面、実施時期の面でも課題が残る。今後は京都府内在住の留学生やTA、国内外で活躍するOBやOG、日英バイリンガル学生に協力を求めるなど、府立学校として、いっそう広範囲に効果が波及する方法を模索していくべきではないかと考える。



話し合いの結果をまとめる



アイスブレイクが打ち解けるきっかけに

ウ ユネスコスクールとしての交流

1 ねらい

世界に広がるユネスコスクール(UNESCO ASSOCIATED SCHOOL)のネットワークを活用して、持続可能な開発のための教育(ESD)の推進の観点から海外及び国内の交流相手校を開拓することにより、グローバルな教育環境の整備を行う。

(注)・ユネスコ:国際連合教育科学文化機関

(United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization U.N.E.S.C.O.)

・ユネスコの目的:

諸国民の教育、科学及び文化の協力と交流を通じた国際平和と人類の共通の福祉の促進

2 概要(実践)

(1)昨年度アメリカ・フロリダ州を訪問した生徒4名及びカナダ・ケベック州を訪問した生徒4名が、持続可能な社会の構築の観点から、京都の環境や文化について、その未来ビジョンや具体的な実現策を考案して、9月の文化祭において英語で提案した。また、フロリダ州を訪問した生徒は、京都大学の環境関係の研究室でも英語で提案を発表した。

(2)アメリカ・フロリダ州(1月)を生徒4名が訪問し、現地の高校や大学等を訪問し、京都の環境及び文化についてプレゼンテーションし、フロリダや京都について、持続可能な社会の構築の観点から課題研究の取組をしている。次年度、英語で提案を発表する予定をしている。

(3)京都のユネスコスクールのネットワーク(ユネスコASPネット京都)の連絡会議に定期的に参加した。

(4)ユネスコASPネット京都加盟校の生徒交流会を実施した。

日 程:平成30年10月28日(日) 9:30~17:00

会 場:ユネスコ世界文化遺産上賀茂神社

参加者:ユネスコASPネット京都加盟校生徒(50名) 嵯峨野高校生徒(6名)

内 容:テーマ「未来に伝えたい生活文化」

・アイスブレイキング

・上賀茂神社内フィールドワーク

・上賀茂神社乾光孝氏による世界遺産の講話

・グループディスカッションテーマ:「未来に残したい生活文化」

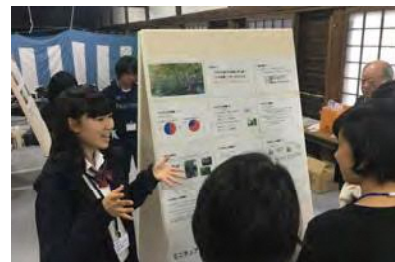
・ポスターセッション:ネットワーク所属各校の持続可能な発展教育の取組の交流

3 課題

平成29年3月に公示された新学習指導要領にユネスコスクールの目指す「持続可能な社会の構築」(ESD)の推進が盛り込まれている。今後は、生徒が学ぶことと社会とのつながりを一層意識し、学びの質や深まりを促せる教育課程の研究開発が求められている。本校では、1年生全生徒が「社会と情報」の授業で、SDGs(持続可能な開発の17の目標)に関連するテーマを生徒が定めて課題探究学習行っている。また、2年生は、アカデミックラボの多くのグループが「持続可能な社会の構築」関連のテーマに取り組んでいる。今後は、国内ばかりでなく全世界的なユネスコスクールのネットワークを活用し、ESDを促進することが課題である。



ESD交流会 (上賀茂神社)



ポスター発表

(3) 地域の教育資源を活用した人材育成及び高大接続 ア グローバルインタラクション等におけるTAの活用

1 ねらい

積極的に異文化に触れ、相互理解を深める姿勢を育成し、英語コミュニケーション力をさらに育む環境を日々の教育活動の中に創出するために、京都の大学で学ぶ外国人留学生をTA(Teaching Assistant)として迎え、生徒の英語コミュニケーション活動を支援してもらうことをねらいとした。

2 実践

(1) TAの体制

9ヶ国 16名

(インドネシア・アメリカ・シンガポール・中国・韓国・ミャンマー・ラオス・ポーランド・ナイジェリア)

(2) TAの所属大学

立命館大学

(3) TAの業務

京都グローバルスタディーズ I のGI(グローバルインタラクション)における英語コミュニケーション活動の補助

(4) 上記以外の業務

SAGANO GLOBAL PRESENTATIONでの質疑応答及び講評 11名

英語集中合宿でのプレゼンテーション(母国紹介) 2名

イングリッシュカフェでのプレゼンテーション(母国紹介) 4名

(5) 受け入れ体制

TAとの連絡・相談・スケジュール管理の専任としてSGHスタッフを採用



様々なコミュニケーション活動の中でTAと触れ合う生徒たち

3 成果

平成26年度より継続してSGHの取組としてTAを導入している。この5年間を通して、48名の外国人留学生がTAとして授業をサポートし、TAの出身国は23カ国にのぼる。普段の授業から、様々な国出身の多くのTAとコミュニケーションをとる経験を通して、様々な英語に慣れ親しみ、自分達と異なった文化を体感した。TA導入により、外国の人の話を「理解」するだけでなく、異文化交流や自らの考えを「表現」する機会を多く提供することができ、英語コミュニケーション力や積極的に外国語を学んでいく態度が育成できた。4月から3月にかけてのべ281人(授業時間数×人数)のTAを活用し、授業内容により適当な人数のTA(各時間1～7名)を割り当てた。

TAに実施したアンケートでは、生徒の英語学習に取り組む姿勢の変化について次のように述べている。

・I think the students have become more confident in speaking. They feel more inclined to study because they realize the class is fun throughout the semester.

(生徒は、自信をもって話すようになってきている。学期を通して授業を楽しみ、学習意欲も高くなった。)

・I remember one student who said that she hated learning English, but became more motivated in the later part of the semester. (英語が大嫌いだと言っていた生徒が、学期が進むにつれてやる気を出してきた。)

4 課題

SGH事業の終了後も様々な面で工夫を凝らすことにより、TAを積極的に活用していきたい。

イ グローバルレクチャーシリーズ

1 ねらい

課題探究活動とは何かを理解し、そのための課題設定の方法。探究活動の深め方を学ぶ。

2 概要(実践)

講演： 「課題研究にかかる講演会」

講師： 京都大学総合博物館 准教授 塩瀬 隆之 氏

対象： 第2学年生徒

日時： 平成30年4月23日(月)6, 7限

内容：

生徒たちにとって身近な昆虫であるはずのアリの脚の数や動き、また有名なだまし絵「アヒルとウサギ」「老婆と貴婦人」などを使ってペアで話し合う時間を設けるなどしつつ、「課題設定の大切さを認識しよう」「課題を発見するにはまず何よりも観察が重要」「自分が無意識に持っている先入観・バイアスをあえて意識すること」「対話を根幹とした自学自習が基本」「相手に考えを変えさせた方が勝ち、変えた方が負けとされるディベートが近年、世間では盛んになっているが、研究活動においては相手との対話の前後で自らの考え方・ものの見方に変化が生まれることこそが成功と言える」などなど、はっと考えさせられることの多い内容だった。探究活動について方法論に生徒の書いたアンケートからも大いに刺激を受けた様子が見て取れた。昨年同様、教員にとっても諸々刺激を受けることの多い内容だった。

生徒アンケートから：

- ・大人の言うことを全部信用すれば良い訳ではない、という言葉が大人である塩瀬先生から聞いたのは新鮮だった。
- ・今まで課題研究で一番大切なのは、その研究過程だと思っていたが、実は観察することであると初めて知った。
- ・大学で一つの視点を身につけて、そこからたくさんの視点を増やしていく、という流れを実現したい。

3 成果

本校2年次に行う「課題探究活動」に向けて、生徒自身に「何を、どのように探究するか」を自問させる非常に有効な講義内容であった。一方的な講義に終わることなく、能動的な意見交換なども交えたことで一層生徒たちからの信頼が高まっていたようだった。

4 課題

教員がこの5年間に蓄積してきた「課題探究活動」の指導実践を今後、どのような形で発展させられるかがこれからの課題となると思われる。



ウ グローバルフィールドワーク 1 (社会科学FW)

1 ねらい

まず、法廷の見学・裁判の傍聴を通じて、現代の社会において法律や訴訟がどのような役割を担っているかについて認識を深めるとともに、裁判員制度の意義に関する理解を深める。次に、模擬裁判の体験を通じて、事実認定とその厳密な評価を積み上げてゆく手法や、刑事裁判における無罪推定の原則など、法的なものの見方・考え方を学ぶ。最後に、弁護士の仕事の現場を見学し、直接お話を伺うことを通じて、法律や法律に携わる職業が社会の中で果たしている役割について理解する。

また、これらの取組を、2年次以降の系統選択やアカデミックラボの選択を考える契機とし、SGHにおける学びの推進に資する。

2 概要(実践)

日 時： 平成30年7月31日(火) 午前9時～午後5時

会 場： 京都地方裁判所(午前)、京都弁護士会館(午後) ほか

参加生徒： 普通科・京都こすもす科 1年生37名 (男子22名、女子15名)

内 容：

	会場	内容	協力団体
1	京都地方裁判所	裁判員制度について ----- 裁判の傍聴	講話、使用法廷の見学 ----- 民事裁判(証人尋問)、刑事裁判(冒頭手続)
2	京都弁護士会館	模擬裁判体験 (7班に分かれて実施)	① 刑事裁判の原則について ・講師：京都地方裁判所 齋藤正人判事 ② 模擬裁判(強盗致傷事件) ・裁判の再現(シナリオに基づく) ・評議(判決を考える) (※) ・結果発表と講評
3	各法律事務所 (7箇所)	法律事務所訪問 (7班に分かれて実施)	① 事務所の見学 ② 聞き取り調査：弁護士の業務内容、 大学での勉強等について
			同上

※ 指導上の留意点：事件の争点を明らかにし、客観的事実に基づく推論によって結論を導くよう、記録シートに記入しながら評議を進めるように指導した。



裁判官から講義を受ける



模擬裁判体験

3 成果と課題

- (1) 刑事裁判を傍聴し、法廷の様子を見聞きすることで、法律や訴訟の持つ意義を理解することができた。
- (2) 現職裁判官から講義を受け、刑事裁判の原則や裁判官の職務などに関する理解を深めることができた。
- (3) 模擬裁判において、多面的に物事を見ることが、法律的・論理的な考え方を体験し、他者を説得できるレベルや社会の中で必要とされるレベルの論理性がどのようなものかについて認識を深めることができた。
- (4) 弁護士の業務の内容、やりがいなどについて、直接、弁護士の先生方からお話を伺うことで、法律や訴訟が現実の社会の中でどのように機能しているかを学ぶことができた。
- (5) 法律や訴訟が、論理のゲームではなく、地域社会が抱えている課題や紛争を解決するための手段であることについて、更に理解を深めることが課題である。

ウ グローバルフィールドワーク 2 (人文科学FW)

1 ねらい

人文科学系の領域に関連する特別講義と施設等の見学、また伝統文化の体験を行うことにより、人文科学に関する教養・識見を深め、その伝統文化の継承・発展と、生徒自身の豊かな人間性の涵養に資する。

2 概要(実践)

日 時： 平成30年7月31日(火) 午前9時～午後5時

場 所： 仁和寺内・御室会館 京都市右京区御室大内33

参加生徒： 普通科・京都こすもす科 1年生32名(男子8名、女子24名)

内 容：

1年生の普通科・京都こすもす科共修コースの希望者を対象に、世界遺産・仁和寺の境内にある御室会館を会場として、「人文科学フィールドワーク」を実施した。講話、仁和寺フィールドワーク、茶席体験、聞香体験(香木の香りを聞き分ける)、狂言ワークショップ、伝統文化についてのワークショップを通じて、伝統文化について理解を深めた。



狂言ワークショップの様子



伝統文化についてのワークショップの様子

3 成果と課題

今年度も昨年度までと同様に講話・仁和寺内のフィールドワーク・茶席体験・聞香体験・狂言ワークショップ・伝統文化についてのワークショップを行った。茶席・聞香・狂言については専門の先生をお招きし、体験講座を実施した。これらの体験講座は生徒には大変好評であり、実際の体験活動だけでなく、伝統文化や茶道・聞香・狂言各分野の考え方のお話が印象的だったという感想が多かった。これまでの人文科学 FW でもそうであったが、第一線で活躍されている各分野の講師の先生方のご協力をいただいたことでこのプログラムの質を高めることができた。

伝統文化についてのワークショップでは、伝統文化に関連するクイズを作成し、発表するという昨年度と同内容の取組を行った。ただし、昨年度の反省を生かし、生徒が時間内にクイズを作成できるように時間を十分確保した。また、クイズの発表の仕方について、教員から手順を指定した。これにより、どのような理由で設定テーマに関心を持ったのかを明確にし、様々な信頼できる資料にあたり、基本的な発表の際の形式を学ぶことができたと考えている。例年我々は、このワークショップを伝統文化についての理解を深めるだけでなく、1月のシンガポールの研修旅行や次年度のアカデミックラボに繋げる意味でも重要な取組として位置付けている。「グループの仲間に気を遣ってしまいがちだけど、その中で自分の意見もしっかり言っていけないのが難しかった」という協働する活動に難しさを感じている生徒もいたが、「色々な知識を得られた」「伝統文化について身近に感じられ、これからさらに学んでいきたい」というような前向きな感想が多くみられ、効果的な取組になったと考えている。

ウ グローバルフィールドワーク 3 (英語集中合宿 English Immersion Camp)

1 ねらい

将来グローバル社会のリーダーとして必要となる英語コミュニケーション能力の育成を目指し、このフィールドワークで英語のみを使って終日生活することにより、その能力と積極的姿勢・態度を育み、探究活動の基礎となるグループ活動を体験することをねらいとする。

2 概要(実践)

日 時： 平成30年 7月30日(月)～31日(火) 1泊2日

場 所： アヤハレクサイドホテル 滋賀県大津市におの浜3丁目2-25

参加生徒： 普通科・京都こすもす科 1年生80名(男子29名、女子51名)

内 容：

英語科教員7名・ALT6名の指導のもと、小グループに分かれてワークショップを実施した。ホテル内では、生活時間帯も含め日本語の使用を禁止し、All Englishで2日間を過ごさせた。「聞く・話す・読む・書く」の英語4技能を統合的に高められるよう、各教員は視聴覚教材や各種英文資料を工夫し、生徒が英語で考え、発表する機会をできるだけ多く与えられるようにした。また、社会人講師としてプロの通訳者を招き、日英語の表現の違いについての講義や英語学習上のアドバイスなど、生徒が自ら学習する上でのヒントをいただいた。さらに、グループ対抗による英語劇(スキット)のコンテストも実施し、生徒が自ら作った英文脚本をもとに、事前準備してきた寸劇を上演した。そして、留学生のTA(Teaching Assistant)による母国の状況や文化等のプレゼンテーションを通じた交流も行い、異文化理解を深め、課題研究の端緒となることをねらいとした。



JTEワークショップ



ALTワークショップ



留学生との交流



英語スキットコンテスト

3 成果

この合宿も本校の伝統として定着しており、英語のみで過ごすという機会は、生徒たちの日常生活の中には無く、参加前に不安を抱いている生徒も少なからずいたが、終了後のアンケートを見ると、みんな楽しみながら英語を学んでいくことができたことと好評であった。各生徒は日本人教員の授業5コマと、ALTの授業3コマを受け、教員が工夫を凝らした8種類のワークショップに参加することができて、満足度も高かったようである。また、他の生徒の様子から刺激を受けたり、言いたいことが言えず、自分の勉強不足を痛感することで今後の学習に対する意欲が高まったりと、生徒自身も合宿に参加して良かったという感想が多く見られた。

プロの通訳者を招いての特別集中講座は、今年度は学年の意向もあり、2部構成で、1部は英語でどう表現するのか知りたい項目を事前に生徒から集め、それらの表現をもとにしたワークショップ、2部は英語学習へのヒントと通訳という仕事について話していただいた。

合宿中の最大のイベントである英語スキットコンテストに向けては、クラスを超えてグループを組み、1学期終わりに2時間、英語の授業を利用し、準備をさせ、あとは自分たちでスキット作成と練習を行わせた。準備時間がない中で、それぞれに創造力を結集させ、楽しいスキットを上演してくれた。英語の台詞を発し、観客に伝えることで、生きた言葉として英語を使う機会が得られ、またグループで1つのものを創り上げる楽しさを感じたようである。

この2日間の合宿を通して、生徒は日々の授業とはまた違ったユニークな内容で興味を持って楽しく取り組み、また、コミュニケーションを図るために必要なことは何なのかを、身をもって感じ取っていた。さらに、自らの勉強不足を感じる場面もあり、今後の学習に対する動機付けにもなったようである。

4 課題

普段の授業では体験できないような方法で英語に触れさせる事ができるのが、この集中合宿の魅力である。教員のアイデアと入念な事前準備で、独創的なワークショップが可能になっている。また、他校から招くALTを確保することと、彼らと事前に授業内容や方法について相互理解を図ることが難しいが、本校常駐ALTが仲介役となり、尽力してくれたことでスムーズな運営が可能になった。スキットコンテストはクラスを超えてグループを組み、生徒間での放課後の時間調整が困難だが、生徒同士で工夫してくれているため実現できている。さらには、この合宿で取り入れられているアクティブラーニング型の取組を、普段の授業にも活かしていくことで、教育活動全般の有機的な発展へとつなげていくことができるであろう。

エ イングリッシュカフェ

1 ねらい

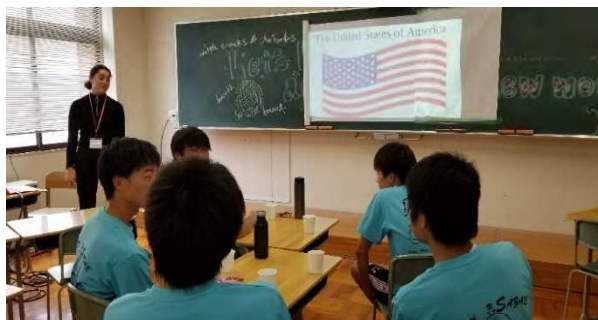
文化祭(本校名称は「とこのは祭」)という学校内外からの観客が集まる機会を捉え、SGH事業をはじめとする海外研修への参加生徒が経験を広く伝える場ならびにTAの出身国について知る場として活用している。特に昨年からは運営生徒の他、在校生のうち入学時以降、家族旅行以外で海外渡航をした経験のある者を募ってカジュアルな形で体験談を語ってもらい、海外研修に関心のある生徒からの質問に答えてもらう機会ともしている。

2 概要(実践)

SGH事業の一環として始まった文化祭企画の一つである「イングリッシュカフェ」は2018年度も例年どおり、文化祭2日目(9月6日(木))に社会科学教室をお借りして実施した。昨年からは始まった取組である海外研修経験生徒たちによるプレゼンテーションは今年もおこなった。

準備として1)運営担当有志募集 2)発表担当有志募集 3)シフト表・発表タイムテーブル作成 4)会場設営 5)ドリンク・スナック購入 6)告知活動 があり、1)以外はすべて、2学期始業式以降になった(主な理由としてはステージ企画時間がはっきりするまで当日に時間的余裕が出来るのかが不透明な場合が多いため)。また、上記の校内的準備の他に、本校の英語授業に協力してもらっているTeaching Assistant(TA=京都市内の大学に留学中の外国人大学生・大学院生)の募集をSGH担当の事務職員が担当し、今年は4人のTAが参加してくれた(USA1、ナイジェリア1、インドネシア2)。

当日は、カフェの運営には、ディスカッション部員を中心に、前日の会場設営まで含めると、のべ30名を超える生徒が参加した。また、発表者として、アメリカ・フロリダ州とカナダ・ケベック州に派遣された生徒たちによるポスターセッションに加えて、私費公費問わず留学・海外研修の経験者たちが代わる代わる、自分たちの経験談を披露してくれた。その合間には、4人のTAが出身国の話をするなど、基本的にステージが空になる時間がほとんどない状態であった。ドリンク・スナックの費用と共にPTAからご提供いただいた紙コップの使用数は例年より少ない138であったが、実際にはドリンクを取らず発表を聞くために忙しく出入りをする生徒も多くおり、最終的には例年と変わらない程度の参加者があったと感じている。



TAたちの母国を知る

3 成果と課題

公私問わず、海外経験の発表の場という性格を持たせたためか、発表生徒の友人・保護者が来場する数が増えた。ただし、事前にそれらの生徒の発表時間割を告知するタイミングがなく、当日になってようやく大まかな時間を知らせることしか出来なかったことが悔やまれる。また、会場の位置が保護者に分かりづらいとの声もいただいた。来年度からはチラシをPTAの給茶所に置いていただく等、工夫したい。



体験談に興味津々

(4) グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程外の実施内容 日本人としてのアイデンティティの確立を促すための取組 狂言ワークショップ

1 ねらい

古典芸能の一つである狂言を学び、舞台上で発表することを通じて、生徒の伝統文化理解を深め、日本人としてのアイデンティティを涵養するとともに、伝統文化の継承・発展と京都府の文化振興に資する。

2 概要(実践)

期 間：平成30年4月～12月

指 導：茂山狂言会(茂山千五郎先生、山下守之先生)

指導回数：15回

参加生徒：1年生2名、2年生3名、3年生4名(男子6名、女子3名)

内 容：

	舞台発表	日時・会場	内容
1	Library KYOGEN (図書室での発表)	平成30年4月18日(水) 嵯峨野高校図書室	曲目 「鬼瓦」 参加生徒 2年生2名(男子1名、女子1名)
2	第5回能舞台フェスタ in 今宮御旅所	平成30年5月4日(祝) 今宮神社御旅所	曲目 「酢薑(すはじかみ)」、「梟(ふくろう)」 参加生徒 2年生1名、3年生4名(男子3名、女子2名)
3	嵯峨野高校 とこのは祭(文化祭)	平成30年9月5日(水) 嵯峨野高校コモンホール	曲目 「魚説経(うおぜつきょう)」 参加生徒 2年生2名(男子2名)
4	第5回京都府高校生 伝統文化フェスティバル	平成30年11月4日(日) 京都市東部文化会館	曲目 「舟船(ふねふな)」 参加生徒 2年生2名(男子2名)
5	第8回嵯峨野高校 狂言の会	平成30年12月15日(土) 冬青庵能舞台	曲目 「舟船」、「柿山伏」 参加生徒 1年生2名、2年生2名(男子4名)
6	平成30年度全国高校生 伝統文化フェスティバル	平成30年12月16日(日) 京都コンサートホール	曲目 「舟船」 参加生徒 1年生2名(男子2名)



稽古風景



今宮御旅所公演(上記2)



狂言の会(上記5)



全国フェスティバル(上記6)

3 成果と課題

- (1) 学校外での発表機会が増え、参加生徒の狂言への理解や伝統文化への愛情は例年以上に深まった。
- (2) 学校内外で、多くの高校生・府民に見てもらうことができ、伝統文化への意識を高めることができた。
- (3) 参加生徒の中には、狂言以外の伝統文化(きもの、茶道、能など)に興味を持ち、着付け教室に参加したり、能の公演を観劇したりする者もいた。
- (4) 狂言を日本の伝統文化として国際舞台上で発信してゆく取組や、参加生徒以外の嵯峨野高校の生徒全般について、狂言をはじめとする日本の伝統文化を理解する取組を強化することが課題である。

(5) 大会コンテスト ア 模擬国連について

1 ねらい

環境・エネルギー・人権などグローバル社会の諸課題について理解を深め、その解決方法を研究する。そのために生徒自身が国の代表となり、その国の立場から解決策の提案や他国代表との交渉、討論などを行う「模擬国連」の取組を実践し(校内実施あるいは校外での大会や他校との合同模擬国連に参加)、国際問題の生じる背景・要因やその解決策を考察することで生徒自身の課題設定能力・課題解決能力・情報伝達能力・豊かな国際感覚・日本語や英語でのプレゼンテーション能力・合意形成能力を養うことをねらいとした。

2 概要(実践)

普通科・京都こすもす科2年生の生徒20名を対象としたアカデミックラボ「国際関係ラボ～International Relations」において、課題研究の一つの手段として初めに「貿易ゲーム」を行い、先進国と発展途上国の格差を理解した後、模擬国連(計3回)に取り組んだ。また国際関係ラボに所属する3名の生徒と1年生2名が5校の公立高等学校の合同開催による「高校生模擬国連～防災世界会議～」に参加した。



校内での貿易ゲームの様子



高校生模擬国連の集合写真

3 成果

模擬国連を3回実施し(議題:安保理改革・核軍縮・難民)、生徒は担当国の大使としてペアもしくは1人で行動した。議題についての担当国のスタンスと十分な知識がなければ、会議やスピーチの中身が薄くなってしまいうため、リサーチの時間を確保することを意識して指導した。その結果、授業時間外でも図書館で資料を探すなど主体的に活動する生徒も見られ、回を重ねるごとに、議題について具体性のある議論が展開された。また、担当する国の立場や実情を説明する「各国スピーチ」では「どうすれば自国の意見を効果的に伝えることができるか」ということを考え、声の抑揚や間の取り方にも意識することができた。交渉の時間に関しては、他国の意見・立場を聞くことで、国際問題の解決の難しさを知るとともに、自国の利益を最優先にするのではなく、譲歩しながらより多くの国に利益のある解決を図っていく合意形成の大切さを実感することができたと考えている。

4 課題

今年度は昨年度の課題を受けて、ペアで行動する場合には、交渉相手をそれぞれ決めておくなど、役割を明確にしておくように指導した。しかし行動の方針を共有しきれていないペアがあり、交渉やスピーチが円滑に進んでいない場面が見られた。ペアでお互いをフォローをし合いながら協働していく力の育成が次年度以降も大きな課題である。

これまでの取組における課題は、教員だけで運営していくことの難しさである。国際関係ラボは、模擬国連の運営上3名の教員を配置し、他のラボと比較すると厳しい教員定数の中では恵まれた環境にある。回数を積み上げれば、生徒にも司会をすることは可能だと考えられるが、時間の都合上実現は難しい。また議題についても、前年度使用してきたものや模擬国連の大会で使用されたものを繰り返し利用している現状であり、現在の世界情勢を鑑み、資料を更新していくこと、新たな議題を作成していくことが必要である。しかし新たな議題の作成には、膨大な時間と専門性が必要である。そのため模擬国連を行っている大学生や卒業生に協力を依頼し、新たな体制を生み出し、授業設計を改善していくことが今後の課題と言える。

イ 模擬裁判について

1 ねらい

平成30年度の第12回高校生模擬裁判選手権(関西大会)に参加し、主催者から提示された教材(刑事裁判)を通じて、生活の中の具体的な問題に法律がどう適用されるのか、また、その問題に関して、法的・論理的な根拠づけを行いながら、自分の主張をどう組み立て、どう表現するかを体験的に学ぶ。

2 概要(実践)

普通科・京都こすもす科2年生の人間科学系統及び人間科学コースの18名の生徒が「法学ラボ」を履修し、次の2回にわたって模擬裁判に取り組んだ。

(1) 高校生模擬裁判選手権(関西予選):平成30年5月20日(日)、兵庫県弁護士会館

- ・概要:応募12校のうち予選免除の5校を除いた7校から3校を選抜する、関西予選が実施された。
- ・内容:各校ごとに、刑事模擬裁判のDVDを視聴し、反対尋問を検討し、実演する。
- ・事前指導:京都弁護士会の弁護士から、刑事裁判のしくみと反対尋問の手法に関する講義を受けた。
- ・結果:関西予選には、生徒5名が出場。審査の結果、本選への出場を果たせなかった。

(2) 高校生模擬裁判交流戦:平成30年9月23日(日)、同志社大学法科大学院

- ・概要:関西・四国の模擬裁判選手権(本選)出場校4校と嵯峨野高校により、交流戦が実施された。
- ・内容:本選の教材(犯人蔵匿・犯人隠避事件)を使用して、模擬裁判を行った。
- ・事前指導:京都弁護士会の弁護士から3回にわたって指導を受け、尋問の作成や模擬尋問を行った。
- ・結果:交流戦には、生徒9名が出場。講評では、本選出場校と互角の水準であるとの評価をいただいた。



模擬裁判交流戦の状況



交流戦の閉会式

3 成果

昨年度と同じく模擬裁判選手権関西大会(本選)への出場を逃したが、今年度は交流戦に参加できたため、本選出場の場合の半分程度ではあるが、専門家による指導を受けることができた。

事前指導にはラボの生徒全員が参加し、刑事裁判の原則から事案の分析、尋問の実践までを体験して、刑事裁判における検察官や弁護人の役割について学ぶとともに、どのようにして有罪(無罪)の材料となる事実を引き出し、それらをもとに論理的に有罪(無罪)の主張を構成するか、という体験を積むことができた。

こうした作業は探究活動と深く関わりあっており、課題研究の取組の早い時期にこうした体験ができたことは、大きな成果であった。

4 課題

日程上、予選、交流戦とも3回のラボで準備せざるを得なかったため、当日の尋問がやや迫力に不足する結果となった。来年度以降も、日程的には厳しい状況を強いられることが懸念される。尋問等の実践を短時間で演習できるような準備を整えておく必要がある。

ウ パーラメンタリーディベートについて

1 ねらい

高等学校新学習指導要領では外国語による統合的な言語活動を通して情報や考えを的確に理解し適切に表現して伝え合うコミュニケーション能力の育成が目標とされている。2年間にわたり、主体的、自律的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成、かつ意見や主張を論理の構成や展開を工夫して伝え聞き手を説得する表現力、また、そのための論理的思考力・プレゼンテーション力を養う一つの手段として、本校では、対戦直前に議題が示される形式の「パーラメンタリー(即興型)英語ディベート」に取り組んでいる。

2 概要(実践)

今年度も昨年同様、2年生英語表現の年間シラバスにディベートの取組を明記し、全8クラスで担当教員5名が授業でディベート実践に取り組んだ。最初の1時間は導入授業として位置づけ、即興型ディベートのルール説明及び日本語による実践で「論理的に話す」「質問をする」楽しさを体感した。その後、政策論題・価値論題を取り交ぜた英語ディベートに各クラスで取り組んだ。

また、1年生も11月～12月にコミュニケーション英語・総合英語の授業を使って全クラスで取り組んだ。これにより、在校生全員がディベートという議論の一つの形式を修得したこととなった。

また、年3回地域で開催しているディベート交流大会への積極的参加を促し、他校の生徒との試合を通して、意欲およびディベートの質を高めるように努めた。海外パートナー校との合同授業においてディベートを取り入れ、シンガポールの生徒と共にディベートチームを組み、英語で論戦した。



遠隔ディベートの様子



シンガポールの生徒とディベート

また、今年度はディベート同好会が発足し、会員は遠隔ディベートサービスを利用して他の都道府県の生徒とも平日の放課後にディベートの試合を行った。

3 成果

英語ディベートに授業で楽しく取り組めた結果、スキルを上げたいもっとディベートに取り組みたいという生徒が増え、ディベート同好会が課外活動として発足した。3年生5人、2年生5人、1年生7人が週2回活動している。そして、財団法人パーラメンタリーディベート人財育成協会が主催する第4回PDA高校生即興型英語ディベート全国大会にも選抜され出場した。

また、主権者学習の取組で1学年全クラスでディベートを取り入れた。英語の授業で既に生徒には手法が定着していたので、HR担任も容易に取り組む事ができた。



主権者学習時のディベート

主権者学習後の生徒の感想より

・ディベートをすることで選挙についてよく考える事ができたと思う。

・ディベート形式にすることによって、ただ説明されることをひたすら聞き続けるよりも、積極的に学習に取り組めたと思う。

・ディベートをすることで多様な意見を聴け、自らも多くの視点をもつことにつながるので、機会があればディベートをしていきたい。



主権者学習時のディベート

4 課題

本校が取り組んでいるのは「教育ディベート」であり、試合で勝つことを目的としているのではない。ディベートを通して英語で論理的に表現できる力、即興性、幅広い教養の育成が目的である。ゲーム性を入れることで英語学習の動機づけになることも狙ってはいるが、大切なのはそこで身につける力の質の向上である。そのために取り組む指導者の数を増やし、指導力の向上をいかに図るかが課題である。

(6) 校内体制・評価計画について

1 校内体制について

平成26年度に校内組織を改編し、従来の教務部・研究開発部・教育推進部を一つの教務部として統合、その中にSGHプロジェクトチームを置き、コアの部分を取りまとめた。事業毎に学校全体で動き・点検するという、全校体制でSGHを推進している。また、指定2年目から「アカデミックラボ」を運営するにあたって、教職員全体での共通理解のもと組織的に動いていくことができるように、定期的にラボ担当者会議・教科主任会・職員会議で協議及び研修を実施している。

アカデミックラボは、生徒が「課題を設定し、探究する中で課題解決方法を考え、表現する」力を身につけるために、幅広いテーマで実施している。一昨年度から保健体育科も参加し、今年度は「地域とスポーツ」ラボを担当し、全教科体制で、課題研究に関わっている。

2 共通理解のために

「京都グローバルスタディーズⅠⅡⅢ」の中核的な存在である「京都グローバルスタディーズⅡ」のアカデミックラボについては、平成26年度から実施内容等について校内で協議を続けてきた。今年度も年度当初の職員会議でラボの内容の説明を行ったほか、各学期には適宜担当者会議を行い、研究の方向性、評価方法、発表に向けた指導体制等について意見交換や確認を行った。また、年度末には総括の会議を行い、今年度の成果と課題、来年度の指導の方向性の確認等を行った。その内容については職員会議で全教職員に報告を行う予定である。

一方、4月のラボ開講時には、京都大学博物館 塩瀬 隆之准教授による講演会を実施した。各ラボで課題探究学習を始めるにあたって、生徒・教員ともに指針を得られる有意義な講演であった。

このような取組を続けてきた結果、校内的にも「課題研究」についての理解が進み、今年度もアカデミックラボ開講講座は全教科にわたり16講座となっている。

3 「課題探究学習と評価方法」及び「授業改善」について

アカデミックラボの課題研究の評価の在り方については、京都大学大学院教育学研究科と連携している。「グローバルインタラクション」においてはルーブリック評価方法を具体化し、評価を行っているところであるが、より効果的な評価のありかたについて、ラボ担当者会議を中心に毎年協議を続けている。評価方法について改善を図るとともに、課題として残っていた「アカデミックラボ」全体の評価方法の具体化を進めた。

＜平成30年度開講アカデミックラボ教科別担当講座数＞

国語科担当ラボ(3講座)、数学科担当ラボ(2講座)、地歴公民科担当ラボ(3講座(うち1講座は英語科と共催))、理科担当ラボ(2講座)、英語科担当ラボ(3講座(うち1講座は地歴公民科と共催))、家庭科担当ラボ(1講座)、芸術科担当ラボ(2講座)、保健体育科担当ラボ(1講座)

アカデミックラボの課題探究学習では、「生徒が自ら考え、課題設定をし、探究活動に取り組んでいく」ための主体的な学びの姿勢を大切に、課題設定するまでの時間が十分に取れるようにしている。また、グループで取り組んでいくため、生徒が協同で学ぶことの重要性を実感できたと考える。

さらにこの「課題研究」における研究開発を通して、授業全体を「教え込みタイプ」の授業から「生徒が主体的に考えるタイプ」の授業への変換を目指しているところである。SSHも含めて学校全体で全生徒が探究活動に取り組むという土壌が育ってきており、一般科目においてもアクティブラーニング型を取り入れる授業が多くなっている。今後は、各教員の実践を汲み上げて共有化を図り、全校体制での授業改善を進めていきたいと考えている。

4 大学や地域連携について

「アカデミックラボ」では、すべてのラボが大学(京都大学、大阪大学、京都教育大学、同志社大学、立命館大学、京都市立芸術大学、京都嵯峨美術大学、京都学園大学等)や関係機関(京都弁護士事務所、日本政策金融公庫、京都府茶協同組合等)などと連携し、専門性の高い指導を受けており、「グローバルインタラクション」、「イングリッシュカフェ」や「英語集中合宿」では地元の大学等で学ぶ外国人留学生をTAとして協力を依頼している。また、海外の生徒や学生との国際ワークショップやグローバルフィールドワークでは、地元の嵯峨・嵐山をフィールドとし、その自然・歴史・伝統・文化に触れ、その持続可能な発展についてディスカッションや発表を行っているが、その際、嵐山保勝会、伝統文化団体等とも連携している。

海外での研修では、在モンテリオール日本国総領事館やケベック市の教育省と連携を密に行うことにより、政府関係機関等への訪問も可能となるなど、年々内容が充実してきている。また、アメリカ・フロリダジュピターハイスクールは、平成26年度から交流が始まり、本年度も来日し、本校との国際ワークショップを実施したほか、他の多くの海外の高校との双方向での連携・交流が進んでいる。

(7) その他

ア 短期・中期留学について

1 ねらい

より高い語学力やコミュニケーション能力を身に付けさせるとともに、国際感覚の育成や異文化理解の促進を図るため、短期または中期で海外に留学する高校生を支援する。

2 概要

(1) 短期留学

イギリスのエディンバラ市、オーストラリアのアデレード市、あるいは英語を公用語とする国又は地域における、2週間から6週間の短期語学研修に参加する京都府立高校生に対して、その経費の一部が補助される府の事業である。本年度、本校からは、夏期休業期間を利用してエディンバラに7名、アデレードに13名、フィリピンに1名(計21名)が参加した。

(2) 中期留学

アメリカ・フロリダ州ジュピターハイスクール又はオーストラリア・クイーンズランド州の複数のハイスクールに、ホームステイをしながら約4ヶ月間留学する京都府立高校生に対して、その経費の一部が補助される府の事業である。本年度、本校からは、アメリカに1名、オーストラリアに7名(計8名)が参加した。

単位認定については、8単位を留学による修得単位とし、教科・科目等の履修・修得の認定は、8月から12月の留学では第1・3学期の、1月から4月の留学では第1・2学期の学習状況を基に行う。

3 成果と課題

短期留学参加生徒に対して行った事後アンケートの結果によると、参加前は7割の生徒が自身の語学力不足に対して、8割の生徒が生活環境や習慣の違いに対して不安を感じていたことがわかるが、参加後はほぼ全ての生徒が海外生活の体験や異文化との触れ合いを成果と感じ、8割を超える生徒が自身の語学力やコミュニケーション能力の伸長を実感している。また、9割の生徒が大学進学後も留学をしたいと希望しているが、海外の大学への進学については慎重な意見が大半を占めた。ただし半数以上の生徒が将来海外での活動を意識するようになったと答えており、短期間の研修ではあるが、参加生徒は日本と海外の良さや特徴を認識し、より具体的にキャリアプランを考えられるようになる有意義な機会となったと考える。

一方、中期留学参加生徒の事後レポートによると、自身の語学力やコミュニケーション能力の向上は当然のこととして、現地高校生との学校生活やホストファミリーとの日常生活を通じて、多くの国の出身者や民族と直にふれあい、文化や価値観の多様性、日本との差異などを強く感じ、視野が広がったり深く考えるようになったことを大きな成果として捉えている。特に難民問題や地域紛争などグローバルな課題に対しても、実体験者や当事者と直接話をしたり、課題に対する様々な国の人の認識の違いなどを実感することで、日本人の意識、あるいは自分自身の生き方や考え方を外からの視点で見つめ直す機会となったことがいきいきと表現されている。また4ヶ月の海外生活を過ごして他の国の人たちと密接に関わる中で、それぞれの人たちが自分の国の文化や伝統に誇りを持ち大切にしている姿を目の当たりにし、改めて日本の文化や伝統の大切さに気づき、これまでの学校教育の有用性をより深く認識したとも述べており、今後のキャリア形成や人間形成に対して中期留学ならではの大きな成果があったと考えられる。

なお、中期留学に参加した3名の生徒は、3学期の始業式後、全校生徒に対して留学生活の報告を行っている。身近な存在から留学経験を直接聞けたことにより、他の生徒にとっても異文化交流や海外経験の魅力を知る良い機会となった。特に下級生にとっては、自身の留学を考える大きな刺激になったものと思われる。中期留学は、参加生徒個人にとってだけではなく、世界に目を向け、世界との交流や世界での活躍を意識するグローバルリーダーの育成という教育目標の達成についても多大な成果があったと言える。



アメリカ・ジュピターハイスクール



オーストラリア・ミッチェルトンステートハイスクール

イ 海外大学進学・留学セミナーについて

1 ねらい

生徒の進路選択の1つとして、将来、世界各地域からの学生が学んでいる海外の大学で学ぼうという意欲を喚起し、高度な学問を身につけるだけでなく、グローバルな視野を持つと共に、日本文化を発信し、世界で活躍することができる人材の育成を目指す。

2 概要(実践)

日 時： 平成31年2月28日(木) 午後4時40分～

場 所： 語学演習室

参加生徒： 1年生13名、2年生4名 計17名

講 師： 山本 棕祐氏 (ベネッセコーポレーション)

内 容：

講師から、大学進学後の留学や、高校卒業後の海外大学進学について、また海外の大学で学ぶ上での入試手順や求められる英語力、心構え等について説明を受けた。

(1) 国内大学入学後の留学と海外大学進学の違い

前者は「英語を」学ぶ留学、後者は「英語で」学ぶ留学。期間・費用も異なってくるので、何のために留学するのかを、まず真剣に考える必要がある。

(2) 国内大学入学後の留学

短期のものは1週間程度から、単位認定留学や交換留学となると数ヶ月から1年間という長さになる。就職活動等も考えると、2年次での留学が望ましいので、大学1年の夏までに高い英語力が必要である。交換留学制度を持つ国内大学も多いが、人数に限りがあり、TOEFLもかなりの高得点を求められる。積極的に情報を集め、早くから準備しておくことが大切。

(3) 海外大学への進学

アメリカの大学への進学について紹介。2年制のコミュニティカレッジを経由した4年制大学への編入や高校卒業後、直接4年制大学へ進学するといったルートがある。また、オーストラリアの大学は専門性を重視するので、実技重視の公立キャリアカレッジ経由で、大学へ編入するという方法がおすすめ。国内大学との併願も可能で、また、海外2年制大学を卒業後、国内の4年制大学に編入するUターン留学もある。

(4) 求められる英語力と、今、大切にすること

英語力を高める努力を自ら行うことのみならず、はっきりとした留学の目的意識を持ち、TOEFLや大学の情報収集が非常に大切である。

(5) 個別相談

5名の生徒が、個別に疑問点を質問した。

3 成果

この5年の間に、このセミナーの開催や留学プログラムの案内など、生徒が海外留学へ目を向ける機会を以前より増やすよう努めてきた。また、国の高校生対象の留学制度も充実してきており、本校では、SGH事業である短期の「アメリカ・フロリダ研修」やSSH事業の「カナダ・ケベック研修」、府立高校海外サテライト校事業での中期留学、京都府教育委員会実施の短期留学補助事業や語学研修補助事業、文部科学省のトビタテ留学JAPAN等に応募する生徒が少なからず存在し、在学中に海外に派遣される生徒が一定数いる。また、大学に進学してからも、機会を求めて留学をする者も多い。しかし、このセミナーは単なる語学留学にとどまらず、本格的な学部進学を目指し、活躍の場を世界に求める生徒を育てようと、始めた事業である。1昨年は、本校卒業後、海外大学への直接進学を行った者が1名おり、本年も奨学金を得て海外大学へ直接進学をする生徒が2名出た。今後も、進学先として海外大学を選択する生徒が増えてくることを期待したい。

本校では、海外派遣された生徒が帰国後、全生徒に帰国報告をする場を設けており、また、文化祭等でも海外で学んだことを発表する機会がある。そのような話を聞いて、留学に対する関心が深まったり、クラスにそういった多様な経験をした生徒がいることが、周りに影響を与えたりしていると考えられる。また、授業内で海外の高校生との交流を実施する機会も多くあり、異なった文化や考え方に触れることから、外向きの思考をする一助になっているのではと思われる。

平成30年度嵯峨野高等学校 S G H 第 1 回運営指導委員会

1 日 時 平成30年9月21日（金）9:30～11:30

2 場 所 嵯峨野高等学校応接室

3 出席者

＜ 運営指導委員 ＞ 岡田運営指導委員長、金運営指導委員、山下運営指導委員、
矢代運営指導委員

＜ 府教育委員会 ＞ 吉村首席総括指導主事、前山副課長、星野指導主事、相築主事

＜ 嵯峨野高等学校 ＞ 小川校長、岩木副校長、神脇教諭、伊藤教諭、藤本教諭

(1) 開会

(2) 教育委員会挨拶（吉村首席総括指導主事）

(3) 校長挨拶（小川校長）

(4) 報告

- ・ 上半期の実施内容と下半期の事業計画について（神脇教諭・伊藤教諭）
- ・ 次年度以降の方向性について（小川校長）
 - ア 具体的に事業内容が確定していないので、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアムについて調査を続けたい。
 - イ 指定事業の有無に関わらずアカデミックラボは継続する。
 - ウ 海外交流については、白紙。

(5) 協議〔◇運営指導委員 ●府教委 ◆嵯峨野高校〕

- ◇ 2年前にも指摘したが、SSH・SGHを統合できないか。単独事業では視野が狭くなる。SGHだけでは、広い視野に立って人材活用ができないのではないかと。例えば、AIをテーマにSGH、SSHでコラボして課題研究にあたるなど。
- ◇ ICTを活用することで海外との連携ができないか。予算の問題はクリアできる。
- ◇ ICTの活用はコストも掛からないし、当社でもやっているが、時差が問題になる。高校に早朝・深夜の活動は難しい。Seeing is believing というが、感度の高い高校生には体験をさせてやりたい。これまでの交流が無くなるのは大変残念である。府教委でのグローバル人材育成という観点で嵯峨野の位置付けはどうなっているのか。
- 鳥羽のグローバル科もSGHであるが、嵯峨野高校がグローバル教育の拠点と考えている。
- ◇ 寄付などを活用するのも一つの手段である。
- ◇ 5年間SGHの担当者が開始以来変わっていないが異動があったらどうするかが問題。担当者の思いがあるので、担当が変わったときに新担当がどう経験を積んでいくかが難しい。マニュアルだけでは、引き継げないものがある。
- ◇ 全て素晴らしい取組だと思う。今後もうまく継続できればよいと思う。発表者の動画を見ると、海外経験のあるなしでレベルの差があったように思う。海外経験で得られる経験などを学校でのカリキュラムなどで対応できないか。
- ◇ 課題研究の取組の可視化については、動画、レポート、指導に当たっていただいている大学・地域の方など関係者アンケート、生徒の年度進行のアンケートなど変容の見られる調査が有効であろう。
- ◇ 評価については、先生達で作ってきたループリック自体が変容していると思う。指導の結果、今の社会で求められている力がわかりやすいようなループリックに変わってきたのだと思う。どのような理由でループリックが変化したかを記録することで他の学校に

- とっても貴重な記録になる。
- ◇教科や単位によっては座学や反転学習など生徒個人で行う学習が効果を上げることもある。その辺りの分類ができればよい。
 - ◇卒業生へのアンケートは良く取られたと思う。大学での学びに SGH の取組が役立っているというのは貴重なデータである。
 - ◇大学の特色選抜への活用については、どういう指導をしてきてどういう特色選抜でどのような結果であったか記録に残すことと、大学との話し合いやアドバイスを求めているかどうか。
 - ◇WWLには是非チャレンジしてもらいたい。
 - ◇ICTの活用は大切であるが、face to face が必要であることは重要な要素である。
 - ◇先ほども出ていたが人事面が心配である。これまで同じリーダーが他の人を巻き込んで全学的な理解という方向を目指してこられたのは非常に大切なことだと思う。これだけ大きな事業に関わってきたリーダーとしての経験を他校で活かすことも京都府全体にとっては有用である。しかし、最後まで先生方には頑張ってもらいたい。
 - ◇校長先生の話にもあったSGHとSSHの統合は、より高次の取組で日本全国のリーダーが目指せるのではないか。
 - ◇SGHとSSHの統合ではなく、融合を目指すべきである。
 - ◇Q&Aがうまく行かないのは、リスニングの問題か論理的な内容の問題か？
 - ◆両方に原因があると思う。見学してきた教員の主観的な感想だが、Q&Aは年々うまくなっていると思っている。指導のプロセスも改善しており、進行を早めることで想定問答集を作るようになった。その作業を通じて自分達の取組をより深く理解することに繋がって回答はしやすくなっている。
 - ◇動画の生徒は、最初の2人と後の2人では英語の間が違っているのではないか。前の生徒は聞がなくて聞き取りにくい、後の生徒は内容は無いが聞き取りやすかった。大学の研究室では、9年間英語でQ&Aを続けているが改善しない。質問を予想して用意した回答を読もうとするのが原因だと思う。
 - ◇HLABは続けるのか？イベント性があるので、問題解決型のイベントにしてはどうか。問題を設定すればリアルになり、日本人と外国人のそれぞれの習慣に従った解決策を提示してくるだろうから、最初はコンフリクトがあるだろうが、交流を積み重ねて文化の違いが分かってくると思う。
 - ◇SGPで質問はTAやネイティブだけだったのか、一般生徒も質問していたか。
 - ◆一般生徒の質問が増えていて、その部分は改善があった。face to face の重要性と言えるが、留学などの海外経験をしてきた生徒が積極的に質問していた。
 - ◇外国人と日本人ではメンタリティが違うので、海外でそのギャップが身に付いた生徒は質問をするようになったのだろう。言葉がしゃべれるより、そういうギャップを理解することが大切である。
 - ◆それは学校教育の基盤の問題だろう。普段から質問させる体験をさせないといけない。学校の授業の中でも、嵯峨野高校の基盤として、自分から働きかける訓練をしなくてはならない。留学にしても、事業に対して自分から手を挙げる、他人と違うことが前提で主体的に行動できる生徒を育てたい。
 - ◇海外でメチャクチャな英語の人もいるので、まず手を挙げる、とにかく質問するとのメンタリティを教えたい。
 - ◆質問の例などを用意して、質問した体験を高校で積ませることが大切と思う。今年は3年同士でミニ発表会をやっていて、生徒同士で様々な指摘ができた。
 - ◇質問は男女どちらが多かった？女子の方が積極的か？
 - ◆海外経験の割合も女子が多く、質問も女子が多かった。知っていることを聞けとのアドバイスをSSHではしている。

- ◇研究室でも、英語が改善しないのは日本語ができていないから。
- ◆アンケートの回答を見ると、無理と思っていたが何とかできたという感想と、うまく応答できなかったと悔しがっている感想が多かったので、生徒達には何かが残せていると感じている。生徒は柔軟性を持って、全体的に前向きで、生徒はしっかりやって自分達で楽しんでいるので、大人がいかにファシリテータとなるかが課題。完成形を目指すのではなく、プロセスを大切にという運営指導委員会の助言を元に指導してきたが、まだまだ改善の必要がある。
- ◇このような取組は日本の教育には馴染まないだろう。大学に入るために問題演習をやれと言われるだろう。フィリピンのサイエンスハイスクールの生徒を見たが、良い成績で高いレベルの内容を学習していた。日本は入試のために同じ問題をトレーニングして解くのは早い、学習内容のレベルが遅れている。京都大学はトップの層は変わっていないが、入学者の下層は明らかに下がってきている。
- ◇2020年に変わる新しい入試への対応はどうなっているか。TOEFLを使うのはどうですか。
- ◆GTECを全員に受験させている。府教委も受験料を補助してくれている。入試が変わればそれに対する指導が変わるだけで入試対策は無くならない。それにより話せるようになればよいが、競争は変わらないだろう。
- ◇(まとめとして)良いイベントに関わらせてもらっていた。学校がいろいろな取組で、いろんな面で生徒を伸ばそうとしてるのが分かります。教員が裏方で、生徒が主人公になっているが、教員は大変な苦労があると思う。あと1年頑張っって次に繋がって行くことを願っている。4年間先生にも良い経験になったのではないかなと思う。生徒の力をいかに伸ばすか、いかに自己陶醉を感じさせるかを工夫しているが、もう一つの効果はこの事業に関わった全校の先生方がグローバル時代に求められる教員の資質が何かということに自覚することになったことが大切であり、他への波及を期待したい。研究開発校として使命を充分に果たして京都府全体に影響を与えて欲しい。

(6) 閉会挨拶 (小川校長)

平成30年度嵯峨野高等学校 S G H 第2回運営指導委員会

- | | |
|-------------|--|
| 1 日 時 | 平成31年2月20日(水) 10:00~12:00 |
| 2 場 所 | 嵯峨野高等学校応接室 |
| 3 出席者 | |
| < 運営指導委員 > | 岡田運営指導委員長、金運営指導委員、山下運営指導委員、矢代運営指導委員 |
| < 府教育委員会 > | 立久井指導部理事、前山副課長、星野指導主事、相築主事 |
| < 嵯峨野高等学校 > | 小川校長、岩木副校長、神脇教諭、伊藤教諭、ノックソン教諭、藤本教諭、村井教諭 |

(1) 開会

(2) 教育委員会挨拶 (立久井指導部理事)

(3) 校長挨拶 (小川校長)

- ・5年間の取組で一定の成果が出ていると考える。新入生に対しても教育課程は変えない。今後も S G H で培った教育活動を続けて行く。
- ・複数の国指定事業は1校で兼ねられないという国の方針から、S S H 指定を受

けている本校はWWLの対象外であるが、これまでの教育活動の財産を今後の嵯峨野高校生や他の府立高校にも広めていきたい。

- ・人材育成はすぐには目に見えないが、今後も見守ってきたい。

(4) 報告

- ・平成30年度SGH研究開発実施報告
- ・平成30年度SGH成果と課題
- ・5年間の研究開発の目標と方向性

(5) 協議〔◇運営指導委員 ◆嵯峨野高校〕

- ◇卒業生アンケートで海外進学や留学への指向が伸びていないとの分析であるが、かなり優秀な結果であると思う。多くの大学生はもっと意識が低い。SSHとは違い、SGHは20年30年後にリーダーになったときに、価値が分かる取組である。教員へのアンケートが必要だと思う。教員の率直な気持ちを把握することが、生徒へ返すことになる。
- ◇大企業の幹部の方は、日本の英語教育のおかげで英語で仕事ができているとおっしゃっていた。SGHの取組の効果は、高校・大学時代の比較ではなく、社会人などになってみて初めて価値が分かってくるのではないかな。
- ◇アンケート項目で「海外の企業で働く」という設問よりも、「海外で働く」とした方が、正確な現状把握ができるのではないかな。
- ◇SGHが終わった後、嵯峨野高校はどう進んでいくかが問題。これまでの取組の良さが、進学実績のみ注目され、進学だけを期待する生徒・保護者が入学を希望するようになれば、5年間の取組が無駄になる。このような学びを重視する学校であるということを嵯峨野高校の特色として打ち出していかなければいけない。
- ◇特色選抜についての成果については大学側の問題。大学がメインとしておらず少人数であり、力をつけた生徒は一般入試でも受かるようになっている。探究活動を行い社会と繋がりながら、他の受験生と競争できるのは素晴らしい。
- ◇理系の特色選抜は、知識以外は求めている。特色入試とSGHの教育が結びつくとは思わない。
- ◇英語による質疑応答力が劣るとの評価があったが、他の評価ポイントで高く評価できるのではないかな。平均からプラスマイナスの幅を持った評価が必要ではないかな。
- ◇今後、いかに整理するかが問題。例え難しくても、教育効果の高い取組を精査し、イベントではなく常態化していくべき。
- ◇評価の問題は難しいが、生徒には失敗をさせるべきだと思う。今の生徒は少しバイアスが掛かると弱いし、自己満足度にも影響する。嵯峨野高校生の自己肯定度は私の大学の学生より1.5倍高い。
- ◆今年は特色入試でも合格者が出ており、SGHでの海外経験がきっかけになっていると聞いている。
- ◇アンケートには表れないが、SGHの取組で課題解決力や問題に対する姿勢などにより、他の学習に対する本人のアプローチの仕方が変わって学力が上がり、結果として進学に繋がるのがこの取組の成果であり特徴であると思う。そのような学び方をさせますよということが、嵯峨野高校の特徴として大切なのではないかな。
- ◇大阪の高校とは地域特性や文化の違いを感じる。大阪はビジネスの町で、映画や小説のようなドラマチックな研究発表を行うが、京都は文化の町で、嵯峨野高校の発表は落ち着いたよい。
- ◇学校交流などでも学校で授業という場なので、生徒どうし、生徒と生徒のコミュニケーションで個々の違いを出していく事などは難しいと思う。スポーツチームや一緒に音楽を演奏したり、遊びに行ったりなどインフォーマルな場でこそ本当に湧き出る気持ちで

コミュニケーションできるのではないか。

- ◆フロリダ研修では今年からホームステイがメインになったが、非常に深くコミュニケーションができていた。また国際交流やポスター発表でも殻を破って、普段見られないような姿を見せる生徒が多く見られる。スポーツや音楽などは、そのような殻を破るにはハードルが低いと思う。
- ◇通学地域が広がり生徒に殻があるかもしれない。英語集中合宿やシンガポール研修が評価が高いのは、一緒に寝泊まりして生活をすることであり、いろんなアクティビティーを続けたりして、長く深く人と付き合うことで殻を破らざるを得ない。
- ◆SGHの取組で生徒が社会に接点を持つと、新鮮な驚きを感じている。教室を飛び出て社会が実際にこのように動いていると感じてくれることは、生徒の役に立っていると思う。
- ◇ポストSGHはどうなるか。
- ◆課題研究は、新学習指導要領の先行実施で「総合的な探究の時間」として来年から全校でやることになっている。問題は課題設定のレベル、質が問題。課題研究は全員で取り組んでいるが、SSHと違って突出した生徒を育成するのが目的ではない。自分達が課題を持ってどんどん社会に出て行くようになっているので、これは継続して社会性は養っていききたい。また学校の場合としては、時間の配分が問題になる。9割の生徒が部活動に参加しており、探究活動は授業の中がメインになり一定整理をしてきた。働き方改革の問題もあり、生徒が主体的に活動していくことが目指す方向である。
- ◇留学や研修はどうなるか。
- ◆教育委員会の事業も連携し、生徒もどんどん自分で主体的に留学に応募することを促したい。学校も国や企業の教育助成なども活用したい。お金を集めるのは校長の仕事である。
- ◇生徒が自分で活動していくのは文部科学省も望んでいる方向であろう。これが5年後、先生が関わる取組に戻ってはいはアプローチが失敗だったということになる。
- ◆全員ができるかは疑問であるが、やりたい生徒ができる環境は保ちたい。イメージ的には忙しい学校よりも楽しい学校になってもらいたい。また本校の歴史をベースに、世界に出て行くには日本の事をしっかり押さえるというスタンスも重視していきたい。
- ◇自分の研究分野でも、どこであっても同じような結果が出る。わざわざ会って話をするのは、個人のルーツ背景があるから面白い。
- ◇カリキュラムが体系的で高品質なシステムである。一つの取組でも準備、イベント、発表をセットにしている。特に発表させることは、学校が自分達の取組を評価しているとメッセージを伝えることになる。先生方は色々な場面で生徒をエンカレッジしており、真面目に評価していることが、大きな成果に繋がっていると思う。これを色々な場所に広げてもらいたい。
- ◇プログラムが終わり、嵯峨野高校は探究心を育んでいくという方向性を大切にしているかどうか。また全学的なイベントに入念な準備を行い、多くの先生が力を出していることは大切である。ただ、各先生の思いで、良い面・悪い面をシェアすることが、他校への展開での各校の導入判断のポイントとなる。財政的にも厳しくなる中、残していくべきイベントは何か精査する必要がある。また表向きの授業だけではなく、打ち解けたコミュニケーションの場がこれらの事業を一層推進するのではないか。
- ◇担当の先生、学校の先生方、校長先生、府教委の方々がチームとして立場の違う人がそれぞれの良い面を持ち寄って一つのものを作り上げていくというのがグローバルということであり、その5年間の成果が我々の目の前にある。京都府の中でも全体に広がり、日本の教育が少しでも良くなってもらいたい。

(6) 閉会挨拶（小川校長）

アンケートについて

内 容：「将来について」「学校生活について」「自分自身について」を3つの柱とした25項目の設問

実施時期：平成26、27、28、29、30年度当初

対象生徒：第1、2、3学年1～6組 合計約720名

グラフは90頁、91頁を参照

【将来について】（設問1～4）

「1 将来海外の大学等へ留学したい」では、1年次の数値について過去5年間を比較してみると、52.3%(26年度)→42.2%(27年度)→46.5%(28年度)→39.3%(29年度)→43.5%(30年度)となっており、本年度は昨年を上回る数値となっている。各種海外留学や海外研修には毎回定員を大きく超える応募があるほか、中学生対象の学校説明会等では、本校での留学や海外研修に関する相談や質問が多く寄せられるなど、積極的に海外交流を行っている本校の取組は対外的にも浸透してきていると考えられる。また、現3年生の変容を見ると、46.5%(1年次)→41.9%(2年次)→39.6%(3年次)と、学年が進行するにつれ減少しているが、この学年は1年次の数値が高く、3年では例年並みの数字に落ち着いたものである。

「2 国際化に重点を置く大学へ進学したい」では、1年次の過去5年間を比較すると70.2%(26年度)→62.7%(27年度)→60.2%(28年度)→63.6%(29年度)→57.0%(30年度)と減少傾向が見られる。また現3年生の3年間推移でも60.2%(1年次)→57.0%(2年次)→50.2%(3年次)と減少傾向にある。近年の生徒の興味・関心の対象分野の多様化と、どの分野も国際化は必須であるとの認識が浸透している可能性を検証したい。

「3 将来できれば海外の大学に進学したい」と考えている生徒は、1年次の過去5年間の平均が13.7%であり、海外へ進学を希望している生徒が一定数入学しているが、現3年でも学年進行で割合が減少しており、海外進学の実績の積み上げや、情報提供・サポート体制の充実などで、1年次の希望割合を維持・増加していきたい。

「4 将来仕事で国際的に活躍したい」と考える生徒の割合は、1年次の過去5年間を見ると60%前後の値で推移しており、高い割合を示していると言える。1年次の比較で今年度入学生は設問1・4では昨年より高いか同じ程度の数値であるが、設問2・3では低い値となっている。留学・仕事などさまざまな面において海外を視野に入れた生徒が多いが、国際感覚については留学などを含めて国内のどの大学でも一定身に付けられると考える入学生が多いと考えられる。

【学校生活について】（設問5～12）

「5 SSH及びSGHのプログラム、あるいはそれに類似する学校独自の行事に積極的に参加している」では、昨年例年を大幅に下回ったが、今年度の1年生は回復している。一方、現3年生の推移を見ると53.3%(1年次)→54.8%(2年次)→60.0%(3年次)と年々高くなってきており、実際に学校生活を送る中で様々な取組への意識が高まってきている様子が窺える。現1年生についても、昨年大幅に割合を減らしたが、例年並みの数値になっており、国際交流などSGHの取組を積極的に広報してきたことにより入学生にしっかり認知されていると考えられる。

「6 学習に積極的に取り組んでいる」では、1年次の過去5年間を見ると、いずれも85%前後の高い割合を示している。現3年生の推移では、2年次に「中弛み」現象が見られたが、3年次でも9割近い割合にもどしており、本校生の学習に対する意識の高さが窺える。

設問7～12では、1年次の過去3～4年間で今年度は最高の割合を示しており、学習にも学校行事にも熱心に取り組み、社会貢献やボランティア、ディスカッションなどにも積極的に取り組む生徒が増えており、志を持って、主体的に生きるという学校の方針が生徒に浸透している事が分かる。特に「11 英語検定試験、TOEFLやTOEIC等に積極的にチャレンジしたい」では5年間で最高の数値を示しており、高大接続における英語4技能外部資格の活用を敏感に察知していると思われる。

「8 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組みたい」では、現3年生の推移を見ると、70.7%(1年次)→66.2%(2年次)→82.1%(3年次)と3年次に大きく上昇している。2年次のアカデミックラボの活動が、近年どんどん学校外に広がり地域・社会での体験がこれらの数値を押し上げたと考えられる。これは「12 ボランティア活動に積極的に取り組んでいる」でも同じような傾向が見て取れる。

「10 英語学習に積極的に取り組んでいる」生徒は、現3年は8割程度の高い率で推移しており、日頃の授業への取組状況などから見ても、本校生の英語学習への意欲は極めて高いと考えられる。ただ「7 授業におけるディスカッション・プレゼンテーションなどに積極的に取り組んでいる」や「11 英語検定試験、TOEFLやTOEIC等に積極的にチャレンジしたい」は学年進行に伴って減少しているが、これは例年と同じ傾向であり、受験を意識した授業内容の変化や、充分高い資格を取得している生徒の割合が多くなることなどが理由と考えらる。

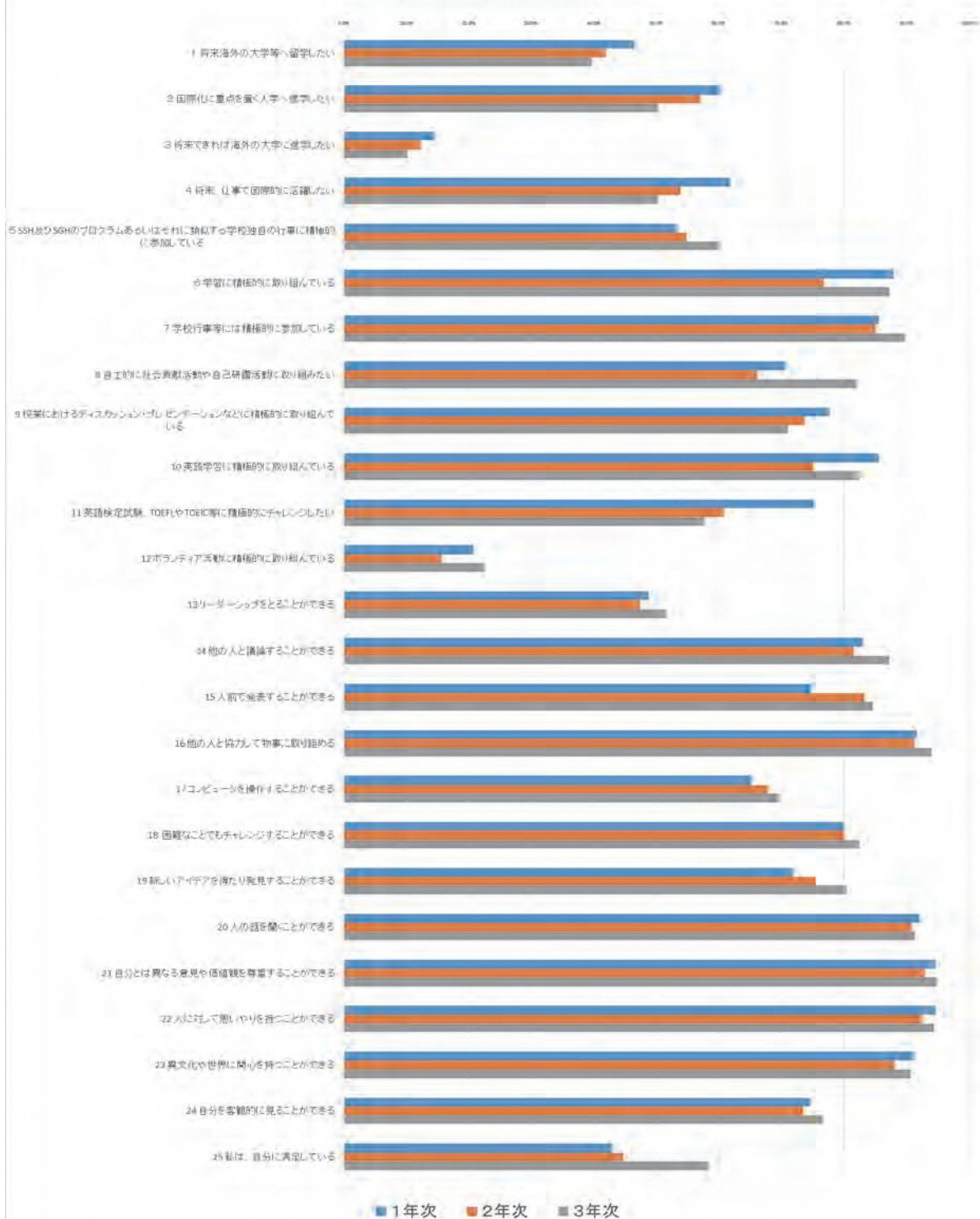
【自分自身について】(設問13～25)

1年次の過去5年間の結果を見ると、「14 他の人と議論することができる」、「15 人前で発表することができる」、「16 他の人と協力して物事に取り組める」、「18 困難なことでもチャレンジすることができる」、「22 人に対して思いやりを持つことができる」の項目で今年度が最も高い数値を示している。中学校段階から新学習指導要領に示された、「主体的・対話的で深い学び」が実践されている結果とも考えられるが、本校の「和敬」「自彊」「飛翔」の校是に示された、求める生徒像を理解し体现した生徒が入学してきていると考える。それ故、受けSGH事業の終了後も学校としては、現1年生や今後の嵯峨野高校生に対して、高い意識や期待に応える教育を進めていく使命があると考ええる。

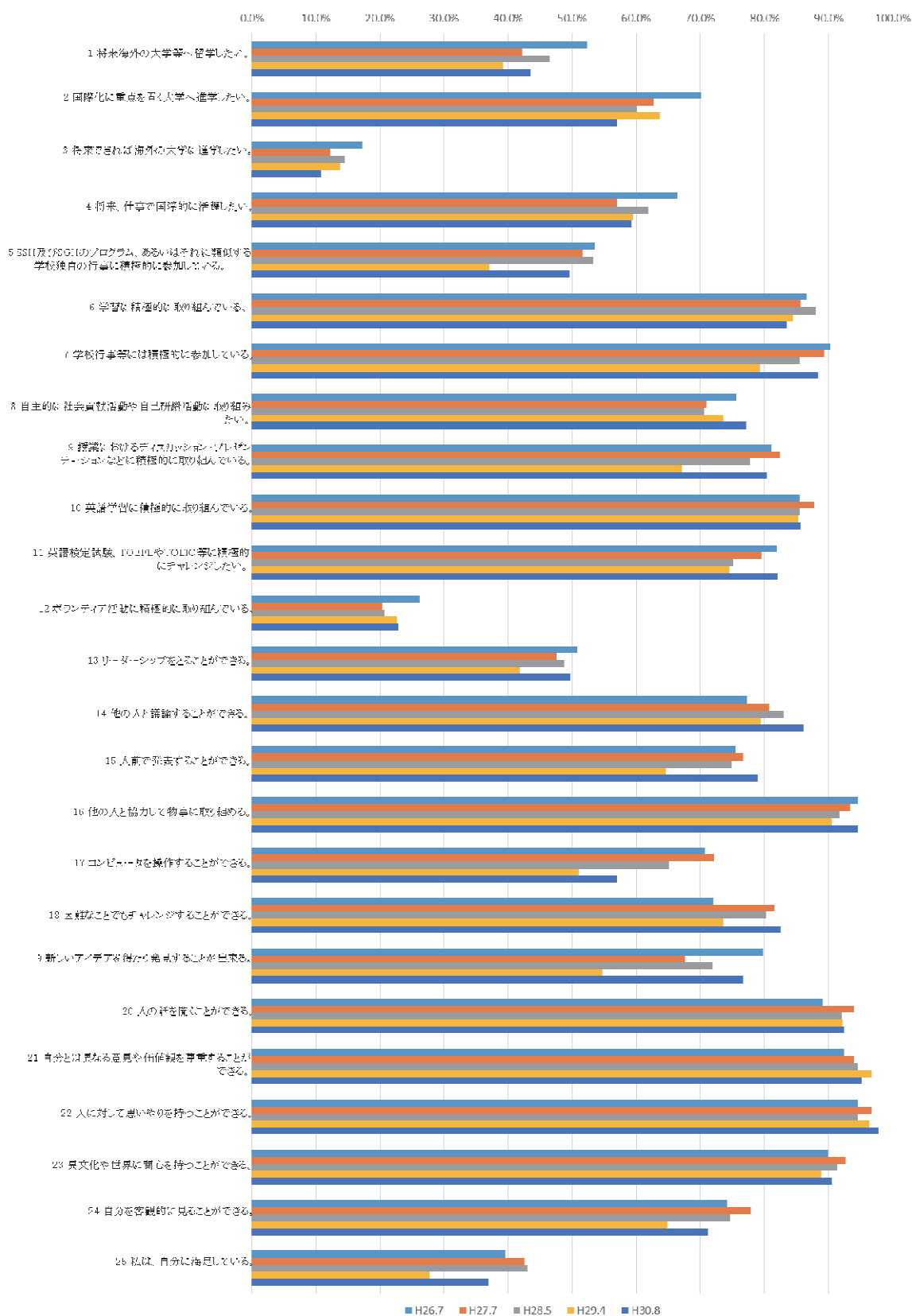
一方、現3年生の1年次と3年次の比較では、質問20、22、23以外の項目では3年次が最高の割合を示しており、最高で無かった3つの質問も3年次で90%を越える高い割合を示している。3年間学習、学校行事や部活動に積極的に取り組んで学校生活を送ってきたことに加え、SGHのプログラムで高い次元での探究活動を行ったことや、その探究の過程においてチームのメンバーだけでなく他の本校生や外部の大学・企業・地域の方々など、多くの人と関わりを持ったことで、リーダーシップ、コミュニケーション能力、ICT活用能力、価値観の許容力、積極性、忍耐力、創造性などが明らかに高まっていることが見て取れる。特に「25 私は、自分に満足している」が1年次から15.4%と最も高い増加を示している。これは、全ての教育活動によって生徒の自己肯定感が大きく高められたという3年間の成果と言える。

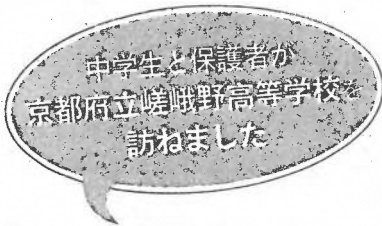
本校では5年間のSGHの研究指定により、数多くの取り組みを行ってきた。その取り組みは本校の教育全体にもなにがしかの影響を与えており、直接・間接の何らかの形で生徒に良い方向への変容をもたらしたことは、このアンケート結果から明らかになっていると思われる。5年間積み上げてきた研究開発の成果が本校の財産として、研究指定が終わった後も、嵯峨野高校生に良い変容をもたらすよう教育活動を進めていきたい。

現3年生の3年間の推移



1年生当初の年度別推移





「楽しく、深く、学べる 学校ですね」



京都の「今」を探る、シリーズ「京都事情」。今号から3号にわたり、特色ある取り組みを行っている公立高校を特集します。第1回は、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」と「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」指定校の京都府立嵯峨野高等学校。2組の中学生とその保護者が訪ねました。



「よく見て考え、自ら選び取る主体性を育ててほしい」と校長の小川雅史さん。写真右から、島本孝子さん・尚宏さん・小川さん、稲垣七菜さん・知美さん

京都から世界へ 社会貢献できる人材の育成を

京都府立嵯峨野高等学校(京都市右京区常盤段ノ上町1)を訪ねたのは、島本孝子さん・尚宏さんと稲垣知美さん・七菜さん親子。尚宏さんと七菜さんは京都府内の中学2年生です。

京都の大学・研究機関と連携した探究活動

京都大学は、出都志願生などの大募集を目的として、同時に「専修コース」が、研究機関と連携し、専修コースは1年次から「探究コース」を選択。探究活動を行います。少人数のラボ(研究グループ)で、理系の一貫教育で、2年次で専攻分野(文系)へと分かれます。2012年度より、2021年度のSSH指定校、2014年度より2018年度のSGH指定校とされています。

グローバル社会で生き抜く充実の英語教育

海外の高校生と交流の機会も多い同校。専修コースでは、サイエンス英語力を身につける授業を使った海外短期留学プログラムや、英語の授業に力を入れています。英語の授業に力を入れているのも同校の魅力の一つです。

直径4mのプラネタリウムに驚きの声

校長の小川さんの案内。地学実験室です。天井に、校内を回った4mのプラネタリウムが、サイエンス部の部長、副部長の案内で、色んな実験室、伝統工芸の展示などを見学。この時季の、嵯峨野高校五つの専門に分かれ、京大の先生が上りまわっています。

部活も勉強も励む先輩に感激

9割を超え生徒が部活動に参加している、同校。今、将棋部に入っています。嵯峨野は将棋も強い、憧れます。真面目に勉強ばかりしている、堅いイメージでしたが、全然違いました。尚宏さん。七菜さんも「部活も勉強もやる」ことが、一生懸命になっている。先輩たちの姿はカッコイイです。今春、同校に入校した。尚宏さん。高橋来由子さんも、勉強も部活動も両立しています。



図工室が使用する茶室「里仁軒」の前で写真左から、学校生活の充実ぶりを語ってくれた、乾原雄人さん(1年)、高橋来由子さん(1年)

◎ 嵯峨野高校自慢のプラネタリウムに驚き、見上げるみなさん。星空や大きな地球を見せてもらいました
◎ CA教室では、高校生たちがデータ集めや資料作りをしていました
◎ 体育館に一歩足を踏み入れると、「こんにちは」の声がこちらから。部活に励む姿もいろいろ先達たち
◎ 約3万冊の蔵書を誇る図書室。吹き抜けがあり、窓の光も抑えられた明るく開放的な雰囲気。興味を引くディスプレイも随所に

※スーパーサイエンスハイスクール(SSH)、スーパーグローバルハイスクール(SGH)は、いずれも文部科学省の制度。SSHは2002年度〜理系、数学に重点を置いたカリキュラムの開発や、大学および研究機関などとの効果的な連携を確立するために、理数教育を重点的に行う高校を指定。SGHは2014年度〜グローバルリーダーの育成を目指し、国際的に活躍できる人材育成を重点的に行う高校を指定。

源氏物語ゆかり寺社巡りを

嵯峨野高生、スタンプラリー企画

「想像ふくらませて」



源氏物語を題材にしたスタンプラリーをPRする生徒たち(京都市右京区・嵯峨野高)

源氏物語に親しんで
もらいたいと、嵯峨野
高(京都市右京区)の
生徒6人が源氏物語に
ゆかりの寺社などを巡
るスタンプラリーを企
画した。27日から、
「子どもや外国の方も
楽しめます」と参加を
呼びかけている。

同校の選択授業「京
・平安文化論ラボ」で、
昨年の2年生から取り
組む。源氏物語を現代
語訳したり、あらすじ
や和歌の解説などをま
とめたりする中で、ス
タンプラリーを企画し
た。

物語で、源氏と六
条御息所が別れる場と
して描かれる野宮神社
(右京区)や源氏が須
磨に下る前に歌を詠ん
だ下鴨神社(左京区)、
藤壺中宮から冷たくさ
れた源氏がかもる雲林
院(北区)などゆかり
の11カ所にスタンプを
設置する。

スタンプ場所と源氏
物語との関係を解説す
る紹介文を載せ、イラ
ストレーターながたみ
どりさんの協力で、登
場人物をネズミで描い
たキャラクター「ちゅ
る」をモチーフにした
スタンプを配布する。

メンバーの大木陽南
子さん(17)は「物語
の舞台に足を運んで、
想像をふくらませて楽
しんでもらいたい」と
話している。

スタンプは27、28日、
11月3、4日の4日間
設置。1日は限定で「古
典の日フォーラム」会
場の京都劇場(下京区)
で押せる。スタンプを
3個集めると、クリア
ファイルと交換でき
る。

(加藤華江)

雪舟の原寸大複製画展示

嵯峨野高 国宝「天橋立図」など3点



「天橋立図」の複製画に見入る生徒たち(京都市右京区・嵯峨野高)

京都市右京区の嵯峨野高で1日、雪舟の国宝「天橋立図」など著名な作品3点の原寸大複製画を展示する取り組みが行われた。最新技術で質感まで高精細に再現された複製画に生徒たちが見入った。

同高は2年生の探究活動の授業で京都の文化財について調べており、複製画を多くの生徒たちに見てもらおうと展示を企画した。複製に取り組むNPO法人京都文化協会(下京区)と京都国立博物館

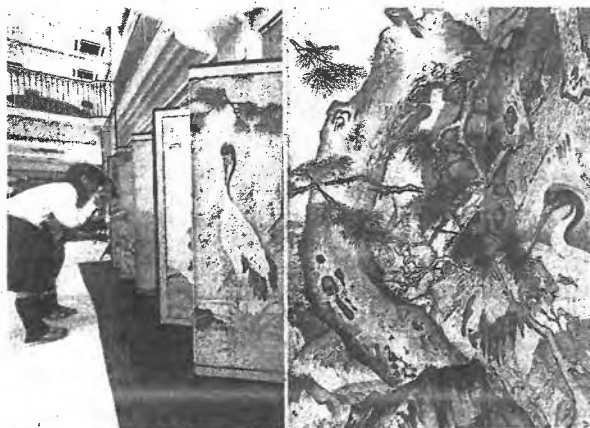
(東山区)が展示品の提供に協力した。

図書室に、雪舟の天橋立図や「四季花鳥図」、俵屋宗達の「風神雷神図」の複製画を並べた。授業の合間に生徒たちが訪れ、近くに寄って筆遣いや構図などを目を凝らして見ていた。

昨年、探究活動で複製画について調べた3年河本吉華さん(17)は「古い感じまで再現され、感動した。文化財を大事にしなければならないと感じた」と話した。(三村智哉)

京都国立博物館 複製貸し出し

雪舟の水墨画 高校生魅了



京都国立博物館が所有する雪舟作「四季花鳥図屏風」や俵屋宗達作「風

神雷神図屏風」などを精密に再現した実物大の複製が1日、京都府立嵯峨野高校に貸し出され、生徒たちが観賞した。写真。日本を代表する美術品に親しんでもらおうという取り組みで、生徒らは「迫力に引き込まれた」と屏風に夢中で見入っていた。

同校ではこの日、図書室に屏風など3点を展示。昼休みの時間などに訪れた生徒らは目の前まで作品に近づき、繊細な筆致や多様な色使いを観察した。金谷真帆さん(18)は雪舟作の屏風を見て「墨の濃淡による色合いの変化に圧倒された。他にも似たような作品を見てみたい」と話した。

「里仁軒」いつか文化財指定に

嵯峨野高に残る茶室「里仁軒」と調査した2年生4人
(京都市右京区)



嵯峨野高のシンボルの茶室 2年生4人が調査

嵯峨野高(京都市右京区)の2年生4人が、同高のシンボルの茶室「里仁軒」を調査し、建築年代が1945年と推測されることなどを絞り込んだ。最終目標だった登録有形文化財の指定は果たせなかったが、4人は「後輩たちにいずれ目指してもらいたい」としている。

梅村萌絵さん(17)、田畑莉奈さん(17)、長瀬悠花さん(16)、中山太貴さん(17)。昨春から総合的な学習の時間の「京の文化財ラボ」に所属し、里仁軒を文化財登録することを目標に設定して5月から調査を始めた。

茶室の詳しい記録はなく、同高の史料を調べたところ、45年3月に同高の創設費を援助した真服会社経営の矢代仁兵衛が茶室の建設基金1万円を同高の前身の嵯峨野高等女学校に寄贈したとする記述を確認。また、「(戦争の)戦いが激しくなった時に中庭に茶室がたつた」とする当時の在校生の述懐録も見つかり、45年の3月から終戦までに建築されたと推測した。

また、これまで矢代氏の自宅から移築されたと

1945年建築と推測

思われてきたが、矢代氏の自宅には別の茶室があり、間違いの可能性が高いことも分かった。「佐々木藤左衛門という人の茶室を移築した」などの説もあったが、確証は得られなかった。

ほかに、茶室は校舎の改築のたびに解体の危機にさらされながらも残ったことや、母屋から切り離された可能性があることなども分かったという。

調査結果は報告書にまとめ、茶室の構造も図面に残したが、まだ不明な点が多いため文化財登録には至らなかった。4人は「文化財の大切さがあらためて分かった。今回を最初の調査とし、次の世代にバトンタッチしたい」としている。

(三村智哉)